

金石文献による中国華嚴宗の研究 (二)

織田 顕祐

はじめに

中国の華嚴教学は、唐代の賢首大師法蔵によって大成された。それは、様々な形で展開した中国の仏教的思惟を総括し、以後の中国・朝鮮・日本の仏教の展開に大きな影響を与えた。その華嚴教学の成立と展開については、従来仏教内の文献によって教理史的に研究するのが主な方法であった。しかしながら、仏教は本来、人間の全体的な活動であるから、その全体像を解明するためには歴史的・社会的・時代的などの様々な角度からの研究が不可欠である。

本研究は、そうした発想に基づいて、中国華嚴教学の思想的な展開を、仏教外の歴史資料とも言うべき金石文などによって側面からの解明を試みようとするものである。今年度は主として法蔵以降の華嚴教学の展開を明らかにするために基礎資料の調査と精読に努めた。本稿はその研究成果である。このような今年度の研究課題は、主として法蔵と則天武后をめぐる基礎資料の精読に努めた昨年の成果の中から明らかになってきた問題点である。即ち法蔵は、当初の想像以上に政治権力と近いところで活動していたようであり、法蔵が参加した外国三蔵による経典翻訳は皇帝の権力の裏づけとしての意味が予想以上に大きかったのではないかと思われるのである。また教学上の関心から言えば、則天武后の「仏先道後」政策は、禅・浄土・天台・法相などの諸宗の隆盛をもたらし、法蔵以降はこうした諸宗との密接な相互関

係のもとに華嚴教学も展開変化していったであろうことが想像されるのである。

こうした観点に立って、今年度は以下の八典籍を選抜し、解説研究を試みた。

- ① 唐杭州靈隱山天竺寺大德詵法師塔銘並序（唐 皎然撰、『全唐文』九一八）
- ② 清涼国師妙覺塔記（元 行育撰、原碑拓本）
- ③ 釈大方広仏華嚴経論主李長者事迹（唐 馬支撰、『全唐文』八一六）
- ④ 唐大興善寺故大徳大弁正広智三藏和尚碑銘並序（唐 嚴郢撰、原碑拓本〔『金石萃編』一〇二二〕）
- ⑤ 大唐西京千福寺多宝仏塔感應碑文（唐 岑助撰、原碑拓本〔『金石萃編』八九〕）
- ⑥ 唐国師千福寺多宝塔院故法華楚金禪師碑（唐 飛錫撰、原碑拓本〔『金石萃編』一〇四〕）
- ⑦ 麓山寺碑（唐 李邕撰、原碑拓本〔『金石萃編』七八〕）
- ⑧ 唐台州国清寺湛然伝（『宋高僧伝』卷第六、大正五〇）

これらのうち、①②③は法蔵以後の華嚴教学もしくは華嚴経思想に関する人物について基礎資料である。①の碑主法詵は、法蔵と澄観との間にある問題を考える上で見逃す事のできない人物である。澄観は、法蔵の没後に生まれており、両者の間に面授の事実はない。しかしながら、宋代以降になると「第三祖法蔵、第四祖澄観」という華嚴宗伝灯観が成立し、以後それが前提視されるようになる。本碑文中には燉煌公から四代を経て教えが法詵に伝えられた旨の一文があり、『宋高僧伝』が燉煌杜順と称することによって（大正五〇・七三二a）、杜順・智儼・法蔵・？・法詵という祖灯説のあったことが知られるのである。さらに『宋高僧伝』は、澄観が法詵に華嚴経を学んだ事も記している（大正五〇・七三七a）から、伝統的な「第四祖澄観」という祖灯説は大いに問題があるという事になる。この点はこれまでも注意されたこととはあるが、法蔵以降の華嚴教学の展開を理解するうえで見逃すことのできない重要な文献であると言えよう。②は、澄観没後多少時間を経た元代の碑文であり、偽刻であるとの指摘もあるが、これまでの澄観研究に於いては関説されな

がらも内容の厳密な検討がなされてこなかったものである。③は、法蔵とはほぼ同時代の在俗の華嚴経研究者である李通玄の伝記に関する原資料である。李通玄は、八十華嚴に対する註釈である『新華嚴経論』など多くの著作を著した。『新華嚴経論』は、比較的早い時期から入蔵せられて広く行われ、また李通玄の華嚴経理解はわが国の明恵に多くの影響を与えた。このように李通玄は、東アジアにおける仏教の展開に大きな影響を与えた人である。

次に、華嚴教学における法蔵と澄観の間の諸問題を考えていこうとする時に見逃す事のできないのが、法蔵と澄観との間に不空らによって密教が隆盛となっている点である。澄観は、不空の訳場に参加しており、そこから梵語の知識を得たのではないかと思われる。また『普賢行願讚』が不空訳であることを考えると澄観独特の三聖円融観思想の成立について不空らとの密接な関係があったのではないかと思われるのである。④は、その不空三蔵の伝記に関する第一次資料である。

⑤⑥⑦⑧は主として天台教学に関するものである。天台教学は、もともと法蔵が自己の思想の拠りどころとしていたものであり、智顛以降六祖湛然(七一―七八二)までの間は俗に暗黒時代と称されるような状況であった。六祖湛然の活躍時期は、不空の翻訳活動全盛期とほとんど重なっており、湛然には当該期の高級官僚であった梁肅の碑銘が存在したようである。こうした点を考えると湛然は世俗権力との何らかのつながりがあったのではないかと考えられるのであるが、それを明確に伝えるものは現存しない。それは一体どのような理由によるのであろうか。また澄観は湛然と密接な関係にあり、こうした意味においても、華嚴と天台の関係は見逃す事ができないのである。こうした流れにあって、今回特に取り上げて研究したものに関して、まず⑤⑥の碑主である楚金に関する資料は、湛然以前のいわゆる暗黒時代の長安における天台法華思想の様子を知るための貴重な資料である。また⑦は、天台と深い関係にあった江南の名刹に関する文献であり、⑧は湛然の伝記資料である。

以下は、本年の解読研究の成果である。各文献によって底本に違いがあり、使用文字等に異なりがあったので、掲載

にあたっては、**積文・校勘**は正字体に、**訓読・語釈**は常用体に統一するよう心がけた。

唐杭州靈隱山天竺寺大德誥法師塔銘并序

〔釋文〕

唐杭州靈隱山¹天竺寺大德誥法師塔銘并序²

西周之叔世。本師淪跡於拘尸那城。千有餘年。教行東漢。玄綱遐屬。殆如綏旒。而先經異時。至機終義。故我唐聖曆中。大方廣梵文四譯斯備。雷霆始懼於魔耳。天地再造於人心。暉暉無邊。佛日正出。其時弘道之士有燉煌公。得他心稱是文殊後身。洎四葉傳於吾師。本孫氏之子。長沙桓王十有三世孫。母也。初感夢吞明珠。遂黜蠱惡輩。誕滯厥月。生有異表。中歲若成。寥兮真姿。不棲于俗。願移榮於道。忘錫羨於家。至十五。辭親從師。依年受具。

行學一集。鬱爲教宗。終卷伊呂立功之致。陋黃綺肆志之適。遺形理性。與山木爲羣。故地思貞大師。屬我以華嚴經・菩薩戒・起信論。心以靜銳。智與經冥。徹照淵玄。萬法一念。宵景盈空而不見。晨曦溢目而何有。有而不可有者。吾其見真師之心哉。受經彌時。乃疑未契。其夕夢乘大編。直截滄溟。橫山當前峻與天極。不覺孤帆鳶戾。懷襄止濟。峯竦竦而忽焉。雲溶溶而在下。既瘖形若委衣。流汗輕醒。自此句義。不思而得。一部全文。常現心境。事事無礙之旨。如貫花焉。天寶六年。於蘇州常樂寺。畫盧舍那像。寂念初明。十身竝現。日月何咎。惟吾師自知。大曆三年。講於常州龍興寺。纔登法座。忽有異光。如曳紅縷。漸大鑿於杳空。久修行者。會中先覩。前後講大經十遍。制義記十二卷。誠感之事。此類固多。今畧而不載。受業比邱大初。付以香鑪談柄。知其意有歸。探於吾道者。則有尋陽正覺・會稽神秀。亦猶儒氏之有游・夏・荀・孟。雖賢議德。其造形之異乎。

至大曆十三年十一月七日。沙門惠覺夢巨塔橫仆。陷地二級。無何如吾師示疾。顧門人曰。死生者衆人之桎梏。至人之作

用。昔尼父造遙曳杖。發太山之歌。蓋欲顯本知終。示動歸靜。吾雖不敏。幸異夫流遁不返者乎。言已奄然。與物而化。春秋六十一。惠命三十二。以其年某月日甲乙建塔于某處。終終之義也。噫。素旌晨出。異昔經行。衆籟啾啾以風號。細雨茫茫而天泣。世流有逝。法流何逝而常清。世土自蹇。法山何蹇而常存。吾知夫一貫而何言。時邗城肅公得離性之文。代豫爲銘。刻石松門。辭曰。銘無本。²⁸²⁹³⁰

〔校勘〕

- *本稿は『禪門逸書初編』第二册所收の國立中央圖書館所藏明末虞山毛氏汲古閣刊本『杼山集』卷之九（以下、禪門本と稱する）を底本とし、他に本邦元祿八年（一六九五）重刊和刻本『唐三高僧詩集』所收の汲古閣本『杼山集』卷之九（以下、和刻本と稱する）・『四部叢刊』所收の傅氏雙鑑樓藏影宋精鈔本『皎然集』卷九および『全唐文』卷九一八を参照した。上記四本のうち、前二本は同じ汲古閣本であるが、若干の異同が見られる。以下、諸本の校異を記す。なお異體字の場合は省略する。
- 1 「山」禪門本は「出」に作る。いま他三本によって改める。
 - 2 「并序」禪門本・和刻本とも皎然集・全唐文には「并序」二字無し。
 - 3 「玄」全唐文は避けて「元」に作る。
 - 4 「故」皎然集は「故」字無し。
 - 5 「暉」皎然集・全唐文は「暉」に作る。
 - 6 「日」皎然集は「日」に作る。
 - 7 「弘」禪門本・全唐文は「私」に作る。
 - 8 「願」皎然集は「願」に作る。
 - 9 「木」皎然集は「水」に作る。
 - 10 「玄」全唐文は避けて「元」に作る。
 - 11 「宵」皎然集は「霄」に作る。
 - 12 「前」皎然集は「前」字無し。
 - 13 「明」皎然集は「萌」に作る。
 - 14 「曆」全唐文は避けて「歷」に作る。
 - 15 「三」皎然集は「二」に作る。
 - 16 「杳」禪門本・皎然集・全唐文とも「香」に作る。いま和刻本によって改める。ちなみに『宋高僧傳』卷五・『武林梵志』卷十も「杳」に作る。
 - 17 「空」全唐文は「室」に作る。
 - 18 「先」禪門本・全唐文は「光」に作る。
 - 19 「大」皎然集は「太」に作る。
 - 20 「鑪」全唐文は「爐」に作る。
 - 21 「氏」皎然集は「門」に作る。

22 「曆」全唐文は避けて「歷」に作る。

23 「如」全唐文は「而」に作る。なお和刻本は赤字として一格空
白とする。

24 「太」全唐文は「泰」に作る。

25 「雖」皎然集は「非」に作る。

26 「土」皎然集は「山」に作る。

27 「邗」和刻本は「邦」に作る。

28 「辭」皎然集は「詞」に作る。

29 「無」全唐文は「闕」に作る。

30 「本」皎然集・全唐文は「本」字無し。

I

〔訓読〕

唐杭州靈隱山天竺寺大德誥法師塔銘並びに序

西周の叔世に、本師跡を拘尸那城に淪めてより、千有余年にして、教えは東漢に行わる。玄綱還かに属つらなること、殆んど綴旒の如し。経に先んじて時を異にし、機に至りて義を終う。故に我が唐の聖曆中、大方広の梵文四訳 斯くに備わりて、雷霆始めて魔の耳を懼れず、天地再び人の心を造いたす。唾唾たる無辺、仏日正に出づ。其の時、弘道の土に燉煌公というひと有り。他心を得て、是れ文殊の後身なりと称す。四葉に洎びて吾が師に伝う。本孫氏の子、長沙桓王の十有三世の孫なり。母や、初め夢に明珠を呑むと感じ、遂に蠱を黜け輩を悪みて、誕 厥月に弥る。生まれて異表有り。歳に中りて成るが若し。寥たる真姿は、俗に棲まず。移榮を道に願ひ、錫羨を家に忘る。十五に至りて、親を辞し師に従ひ、年に依りて受具す。

〔語釈〕

【靈隱山天竺寺】天竺と冠する寺に上中下の三あるが、天竺寺の額を掲げたのは下天竺寺のみであったようである。『咸淳臨安

志』卷八十「下竺靈山教寺。在錢唐西一十七里。隋開皇十五年僧真觀法師与道安禪師建号南天竺。唐永泰中賜今額。五代時

有五百羅漢院、後廢。大中祥符初改賜靈山寺。天禧四年復天竺寺額。紹興十四年高宗皇帝改賜天竺時思薦福寺額、為吳秦王香火院：(下略)」

【誦法師】『積氏疑年録』唐大曆十三年卒、年六十一(七一八―七七八)。六学僧伝二六作年六十、今拋宋僧伝五、及清画撰塔銘、皎然集九」

【拘尸那城】Kusinagara 世尊入滅の地。

【玄綱】ここでは仏の教え。

【綴旒】本来は吹き流し(結びつけた旗あし)のこと。のちに君が臣下に自由にせられる喩えとして多用されるが、ここでは吹き流しの如く長く連なる形容であろうか？

【至機】微妙なところ。『文選』成公綏の嘯賦に「於是延友生、集同好、精性命之至機、研道德之玄奥」李周翰注「至機、猶幾微也」

【終義】意味がはっきりする。『春秋左氏伝』序「伝或先経以始

事、或後経以終義」

【大方広梵文四訳】未詳。実叉難陀が訳した『大方広仏華嚴経』『大方広普賢所説経』『大方広如来不思議境界経』『大方広如来智徳不思議経』のことか？あるいは当時、華嚴経の梵文原典が四種存在したのであるうか？

【唾唾】「唾」とは獸などの足跡のこと。転じて乱れるさま。

【燉煌公】華嚴宗の初祖である杜順を指す。前年度の研究成果『真宗総合研究所研究紀要』第十九号所収「金石文献による中国華嚴宗の研究(一)」五頁―八頁参照。

【長沙桓王】三国呉の孫策(一七五―二〇〇)のこと。『三国志』卷四十六参照。

【誕弥厥月】誕生する。『詩経』大雅・生民「誕弥厥月、先生如達」

【錫羨】増し与えること。『文選』揚雄の甘泉賦「餌胤錫羨、拓迹開統」李善注「心劭曰、錫、与也、羨、饒也」

II

【訓読】

行学一たび集りて、鬱として教宗と為る。終に伊呂立功の致を卷み、黄綺肆志の適を陋わすんず。形を遺れ性を理め、山木と羣を為す。故地の思貞大師、我に属するに華嚴経・菩薩戒・起信論を以てす。心は以て静に鋭らき、智経と冥す。徹らかに淵玄を照らして、万法一念すれば、宵景空に盈つるも見えず。晨曦目に溢るれど何にか有る。有にして有

なるべからざる者は、吾れ其れ真師の心を見るかな。受経 時を弥りて、乃ち未だ契かたわざるかと疑う。其の夕 夢に大
輻ふくに乗り、直だ槍溟を截る。横山 前に当りて唆そはだち天と極まる。覚えず孤帆 鳶のごと戻りて、懷襄 濟を止む。峯
竦竦として忽焉たり。雲溶溶として下に在り。既に寤めて形 衣を委するが若く、汗を流して軽醒す。此れより句の義、
思わずして得、一部の全文、常に心境に現じ、事事無礙の旨 貫花の如し。

〔語釈〕

【伊呂】 商の伊尹と周の太公望呂尚。伊尹は湯王を、呂尚は武王
をたすけて大功を立てた。並び称して優れた宰相に喩える。『漢
書』刑法志「故伊呂之将、子孫有国、与商周並」

【黄綺】 漢の商山四皓のうち夏黄公と綺里季の二人。ともに商山
の奥深いところに隠れ住んだ。陶淵明「飲酒」之六「咄咄俗中
愚、且当従黄綺」

【遺形】 忘我の境地。『文選』賈誼「鵬鳥賦」に「真人恬漠兮、

III

〔訓読〕

天寶六年、蘇州の常樂寺に於いて、盧舎那の像を画き、寂念 初めて明らかにし、十身並び現ず。日月何ぞ咎めん。
唯だ吾が師自から知る。大曆三年、講を常州の龍興寺に於いてす。纔かに法座に登りて、忽ち異光有り。紅纓を曳くが
如く、漸く大いにして杳空まぼろしに縈る。久しく修行する者、会中に先に覩、前後して大経を講ずること十遍、義記十二巻を
制す。誠感の事、此の類固まじに多し。今略して載せず。受業の比邱大初、付するに香爐・談柄を以てす。其の意の帰る有

独与道息。釈智遺形兮、超然自喪」

【思貞大師】 未詳。『宋高僧伝』では「恩貞大師」に作る。また
一説に惠苑のことという（鎌田茂雄『中国華嚴思想史の研究』
一八三頁参照）。

【鳶戾】 鳶のように自在に動くこと。『詩経』大雅・旱麓の「鳶
飛戾天、魚躍于淵」による表現。

【懷襄】 山を包み陵に登る。『尚書』堯典「蕩々懷山襄陵」

ることを知らしむ。吾が道を深き者は、則ち尋陽の正覚・会稽の神秀有り。亦た猶お儒氏の游・夏・荀・孟有るがごとし。雖賢 徳を議するは、其れ形を造るの異か。

〔語釈〕

【蘇州常樂寺】 未詳。

【日月何咎】 『維摩經』 仏国品「爾時舍利弗。承仏威神作是念。

若菩薩心淨則仏土淨者。我世尊本為菩薩時意豈不淨。而是仏土不淨若此。傍知其念即告之言。於意云何。日月豈不淨耶。而盲者不見。對曰。不也。世尊。是盲者過。非日月咎」(大正一四・五三八c)

【常州龍興寺】 『咸淳毘陵志』 卷二十五「龍興寺在州東南二百步、陳至徳中建、旧名中興、唐神龍中改今額」

【義記十二卷】 未見。佚書か？

【比邱大初】 未詳。

【杳空】 ここは諸本に異同があつて明らかではないが、おそらく奥深いところの意であらう。

【談柄】 弘子のこと。

【尋陽正覚】 未詳。

【会稽神秀】 鎌田茂雄氏は大通禪師とする(『中国華嚴思想史の研究』一八七頁参照)。

IV

〔訓読〕

大曆十三年十一月七日に至りて、沙門惠覚 夢みらく巨塔横に仆れて地に陥つること二級。何如無くして吾が師 疾を示す。門人を顧みて曰く、死生は衆人の桎梏にして至人の作用なり。昔 尼父 逍遙して杖を曳き、太山の歌を発す。蓋し本を顧わし終を知り、動を示して静に帰することを欲す。吾れ敏ならずと雖も、幸い夫の流遁して返らざる者に異なるか、と。言い已わりて奄然として、物と与に化す。春秋六十一、恵命三十二なり。其の年某月日を以て甲乙 塔を某処に建つ。終終の義なり。噫、素旌晨に出で、異音の経行す。衆籟啾啾として以て風号き、細雨茫茫として而して天泣く。世流逝くこと有り、法流何くにか逝きて常に清し。世土自から驚く、法山何ぞ驚けて常に存す。吾れ夫の一貫と

は何をか言うを知る。時に邢城の肅公の離性の文を得、予に代わりて銘を為し、石に松門に刻す。辭に曰く。銘 本に無し。

〔語釈〕

〔沙門惠覺〕 未詳。

〔桎梏〕 手かせ足かせ。転じて束縛することをいう。

〔至人〕 『唐代釈教文選の研究』一九一頁参照。

〔惠命三十二〕 『宋高僧伝』は「四十二」に作る。

〔尼父逍遙曳杖、堯太山之歌〕 孔子臨終の情景を指す。『礼記』

檀弓上「孔子蚤作、負手曳杖、消遙于門、歌曰泰山其頽乎、梁

木其壞乎、哲人其萎乎」

〔邢城肅公〕 未詳。

〔離性〕 『莊子』則陽「遁其天、離其性、滅其情、亡其神」

(浦山あゆみ)

清涼國師妙覺塔記

〔釋文〕

大元華嚴寺重修大唐華嚴新舊兩經疏主翻經大教授充上都僧統清涼國師妙覺塔記／宣賜京兆府長春禪庵長講沙門印 吉祥

集／京兆延安鳳翔三路僧尼都提領釋彧 吉祥 書丹／師諱澄觀。字大休。俗姓夏侯氏。越州會稽人也。年九歲。禮本

州寶林寺禪德體真大師爲師。甫越一期。／解通三藏。十有一歲。蒙恩得度。纔衣福田。心冥理觀。乃講般若涅槃淨名圓覺

等一十四經。起信瑜珈／因明唯識等九論。其他長安四絕論。生公十四科。終南法界觀。天臺止觀。康藏還源觀。耽玩不

捨。如龍／戲珠也。

年滿受具。於曇一大師。繼稟南山業。遂講律藏。又於常照禪師。受苦薩戒。啓十弘誓。非徒言之。實允蹈之。行解圓融。福德具足。又參無名大師。印可融宗。宗說兼通。理之必至。審觀稱性。無越華嚴。仍依東京大說和尚。聽受玄旨。一歷耳根。再周能演。誦曰。法界盡在汝矣。至住處品。慨念文殊隨事觀。照五臺。遂不遠萬里。委命棲託。閣錫大華嚴寺十年。于茲山門淨侶。敦請敷揚。若曰一乘別教談何容易。但以斯教。賢首頗得其門。後學未窺其奧。每恨人亡法障。未備全書。承襲有人。逢蒙見解。吾於此時。不可默矣。又念五地聖人。身棲佛境。心證眞如。於後得智。起世俗心。作世閒解。廼覽儒家。經子史傳道家莊老寓言東震詞翰西乾梵書。悉皆游刃。

擬著大疏。於般若院。祈聖加護。見一金像。挺特山嶽。面如滿月。卓立空際。仍於寐中。捧咽面門。及覺。遂下椽筆。如有神助。通以同時具足十玄。科以信解行證四分。首尾相應。遠近相符。譬如大明當空衆星奪曜是月也。設無遮以慶之。疏就將闌。忽夢爲龍。頭枕南臺。尾蟠北臺。鱗鬣耀空。明逾皎日。須臾奮迅。化作多龍。分照而去。流通之兆。其在茲乎。暨演新製。五雲凝空。四衆輻湊。咸來叩曰。大教理深。疏文義廣。願加再剖。以決重昏。遂與上首覺人。僧睿智愷等。製隨疏演義鈔四十卷。隨文手鏡一百卷。口訓面授。又爲相國鄭公餘慶南康王韋公皐。越州觀察孟公簡左拾遺白公居易等。著十七卷。文是皆所以發明華嚴之旨也。又爲僧錄邃大師等。製經律論關脈三十餘部。又七聖誕節。對御說法。表奏八十餘卷。

國師以 玄宗開元戊寅歲生。天寶戊子歲出家。 肅宗至德丁酉歲受戒。 代宗大歷戊申歲譯經。 德宗元興

甲子歲造疏。至貞元丁卯絕筆。貞元丙子翻經賜紫。貞元己卯授清涼 國師號。 順宗禮爲師。問大經理趣。言

下有省。煥若臨鏡。照明於心。 憲宗元和庚寅授僧統印。 穆宗 敬宗禮爲師。讚云。我和尙甚深希有。類優曇

鉢花朗潤。隨機若摩尼大寶。 文宗太和辛亥受心印於師。開成己未春三月六日且召上足三教首座寶印法師海岸等。付

法入寂。歷 九宗聖世。爲七帝門師。俗壽一百二。僧臘八十三。形長九尺有四。垂手過膝。目夜發光晝乃不瞬。言

論清雅。動止作則。才供二筆。學瞻九流。凡著述見流傳者。總四百餘卷。盡形一食。大經前後講五十餘遍。無遮大會

十有五設。出家弟子／爲人師者三十有八。海岸虛寂爲首。稟授學徒逮千人數。唯東京僧睿圭峯宗密獨得其奧。餘則虛心／而來實腹而往。蛻經三七。顏色潤澤。端坐如山。乃定力也。其月二十七日。恭承遺旨。遷奉全身於終南／石室。皇帝輟朝。重臣縞素。其餘即可知也。

初期有西域梵僧。在葱嶺見二使者。足不履地。以呪／止而詰之。曰。餘北印土 文殊堂神。於東土取華嚴菩薩大牙供養。及至奏啓石室。驗之果無大牙。惟／三十九齒色若冰霜。遂闍維靈骨。得舍利數千粒。明白光潤。舌若紅蓮。火不能變。悉聚而瘞之。 文宗／命裴公美撰碑。沈元及塑像。塔謚妙覺。 御製眞贊尊師禮貌優渥無前。

今則年代寢遠塔廢碑亡漫／不可考。有 清涼遠孫永安嫡子龍川行吉祥者。受／今上皇帝之師號得／大元帝師之戒法。欲重建祖塔。自燕京至臨洮。往復萬里。特以是事白今／帝師決其可否。 帝師曰。善哉善哉。眞美事也。出白金一笏。

以遺之。併囑陝西僧統雄辯大師五路／提領遷公大師共成其事。既祇終南按傳載。遍求塔址。懇土尋文。僅見石座。因請詮庵主者書清涼疏／三卷。欲葬塔中。以酬志願。繼而因緣際。會存以石厝。來施者有以舍利來獻者。如照禪師於／天兵之後。在華嚴寺。收得 清涼舍利。因施於衆。有達僧判清典座。劉萬戶太夫人。賈氏張太監夫人／劉氏等。各施所得舍利。計千餘粒。方欲詣市贖玻璃瓶以貯之。萬戶夫人復以家藏玉瓶爲施。并轉法／藏。設齋慶讚。迎引之日。甘澤應祈。烏雲四起。還欲大樹。香花幡蓋。遶長安城。送出南關。隊仗四散。雨方／滂霈。是夕宿張大監莊夫人劉氏。大興供養。翌日道至焦村。欲雨不雨。粘合二哥千戶夫人尤忽氏。衆／檀信等設供。鼓樂喧闐。幡花閒雜。送至寺中本處齊提控衆老宿等。又復設齋。罷人散復大雨矣。此皆／檀越之敬信。 清涼之感應也。塔成命印吉祥記之。自愧謬妄。難勝大任。牢辭不獲。姑述梗概。以酬盛／心。若夫序 清涼之世繫師承。美 清涼之道德功行。已具載於相國鄭公餘慶十卷之文。裴公休／妙覺之碑矣。茲毋庸贊云。／

至元九年歲次壬申九月日 宣賜扶宗弘教大師上谷大法雲寺傳戒長講沙門行吉祥建。／宣授陝西五路釋教都提領圓融湛寂弘教大師弘遷。／宣授陝西等路釋教都僧訖本寺住持雄辯大師釋 信滿 同建 本寺院主信遇／宣授諸路釋教都總統

燕京大寶集寺住持壇主遠孫圓明吉祥

副院弘冲／宣授鞏昌路都提領崇信

都僧錄惠才僧錄覺照 都僧判崇緣

僧判復興／京兆路都僧判通濟大師 幸達

收舍利主無憂居士吳清／京兆路都僧錄明鑒通惠大師 丈亨

前威寧縣丞任天祐／宣授京兆路僧尼都提領大師 明湛

提點正元／僧統所案司提舉

惠達 知管普明 知書文滿 德閻 譯使唐丈慶知印張英／京兆路僧錄司提始寶輝 知文道常 管局道瓊 提始祖敬／宣

授扶宗弘教大師傳法門人 講經沙門了應 了悟 小師提點義明 權講 海襲／提點祖寶 海興 海進 海達 海悟 提

始海珍 海受 海回 海聚／傳者海初 海俊 海祐 海祥 海貴 海湛 海榮 海信 提控劉澤／上座海智海志海應

助緣尼 福瓊 善妙 行堅 智善智秀 福智 海昌／西京路都僧錄普恩寺住持通悟大師令吉祥

I

〔訓読〕

大元華嚴寺重修^マ大唐華嚴新旧^マ西經疏主翻經大教授充上都僧統清涼国師妙覺塔記

宣賜京兆府長春禪庵長講沙門印 吉祥 集む

京兆延安鳳翔三路僧尼都提領釈 吉祥 書丹す

師 諱澄觀、字 大休、俗姓 夏侯氏、越州会稽の人なり。年九歳にして、本州宝林寺禅徳體真大師に礼して師と為す。

甫めて一期を越ゆるに、解^ホく三蔵に通ず。十有一歳にして、恩を蒙って得度す。纔かに福田を衣とし、心理観を冥と

す。乃ち、『般若』、『涅槃』、『浄名』、『円覚』等の一十四経、『起信』、『瑜珈』、『因明』、『唯識』等の九論、其の他『長

安四絶論』、『生公十四科』、『終南法界観』、『天台止観』、『康威還源観』を講^ナう。耽玩して捨てざること、龍の珠を戯ぶが如

し。

【語釈】

【華嚴寺】 陕西省西安。華嚴宗初祖杜順が六四〇年に没し、その遺体を長安南郊を流れる樊川の北原に葬り、墓塔として六四五年に建立。

【華嚴新旧兩經疏主】 「旧經」とは、実叉難陀訳八十卷本（大正一〇・No.二七九）。これに対して『大方広仏華嚴經疏』六十卷（大正三五・No.一七三五）を著している。「新經」とは、般若訳四十卷本（大正一〇・No.二九三）。これに対して『華嚴經行願品疏』（『貞元新訳華嚴經疏』）十卷（新纂卅五・No.二二七）がある。

【宣賜京兆府長春禪庵長講沙門印】 太行弘教慧印（一二七一―一三三七）か。『補統高僧伝』四、『清涼山志』八に伝有り。

【京兆延安鳳翔三路僧尼都提領釈或】 未詳。

【書丹】 碑文を彫る時に、石に丹で下書きをすること。

【字大休】 『華嚴懸談会玄記』は「大體」とする。

【年九歳】 『宋高僧伝』巻第五「澄観伝」は、十一歳とする。『宋高僧伝』巻第五・澄観伝「年甫十一依宝林寺〔今応天山〕需禪師出家。」（大正五〇・七三七a）

【宝林寺】 『宋高僧伝』巻第五「澄観伝」は、割注を施して、応天山（四川省双流県）にある寺であるとしますが、それでは離れ過ぎて「本州」とは言い難い。恐らくは、雲横山（浙江省義烏県）の双林寺のこと。双林寺は、宋寧宗（一一九四―一二二四）の時、選ばれて十刹の第八位となったが、そのとき「宝林寺」と呼ばれていた。

【體真大師】 未詳。『宋高僧伝』は、需禪師（法林洪需）とする。【一期】 一周年。『華嚴懸談会玄記』は「歳曜一周」とする。『三國志』魏志・王肅伝「選其丁壯、挾留万人、使一期而更之。」「南史」何尚之伝「炯（何炯）年十五、從胤（何胤、何炯の從兄）受業、一期並通五經章句。」

【十有一歳】 『宋高僧伝』巻第五「澄観伝」は、十四歳とする。『宋高僧伝』巻第五・澄観伝「十四遇恩得度。」（大正五〇・七三七a）

【纓衣福田】 「纓衣」は、「わずかの衣」という意か、「黒衣」という意か。いずれも用例未検。なお、『華嚴懸談会玄記』は「纓服田裳」とする。これに従えば前者の意か。「田裳」は袈裟の意。「福田」は、福德の報いをもたらすもとなる善行、福德を生ずる田の意。

【理観】 道理を観察する観法。浄土や仏の相好など具体的な事物を観察する事観に対する。

【涅槃】 宋 慧嚴等『大般涅槃經』三十六卷（大正一一・No.三七五）。

【浄名】 姚秦 鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』三卷（大正一四・No.四七五）か唐 玄奘訳『説無垢称經』六卷（大正一四・No.四七六）。

【円寛】 唐 仏陀多羅訳『大方広円寛修多羅了義經』一卷（大正一七・No.八七二）。

【起信】 梁 真諦訳『大乘起信論』一卷(大正三二・No.一六六)

六)。

【瑜珈】 唐 玄奘訳『瑜伽師地論』百卷(大正三〇・No.一五七)

九)。

【因明】 唐 玄奘訳『因明入正理論』一卷(大正三二・No.一六三)

〇)。

【唯識】 唐 玄奘訳『成唯識論』十卷(大正三一・No.一五八)

五)。

【長安四絶論】 僧肇『四絶論』のこと。浄源『肇論集解令模鈔』

所引の『妙覺塔記』には「肇公四絶論」とある。鎌田茂雄『中

国華嚴思想史の研究』(東京大学出版会)一五六頁参照。

【生公十四科】 竺道生『十四科義』のこと。鎌田茂雄『中国華嚴

思想史の研究』(東京大学出版会)一五六頁参照。

【終南法界観】 杜順『法界観門』一卷。宗密『注華嚴法界観門』

(大正四五・No.一八八四)から復元することが可能。

【天台止観】 天台智顛『摩訶止観』二十卷(大正四六・No.一九九

一)。

【康藏還源観】 法藏『修華嚴奥旨妄尽還源観』一卷(大正四五・

No.一八七六)。

II

〔訓読〕

年満ちて受具するに、曇一大師に於いて南山の業を継禀し、遂に律藏を講ず。又常照禪師に於いて、菩薩戒を受け、十弘誓を啓く。徒らに之を言ふには非ず、実に允とに之を蹈み、行解円融し、福德具足す。又無名大師に参じて、印可を融宗す。宗・説兼ねて通じ、理の必ず至る。審らかに観ずれば性に称うも、『華嚴』を越ゆるは無し。仍て東京大説和尙に依て、玄旨を聴受す。一たび耳根を歴れば、再びには能演を周くす。説曰く「法界尽く汝に在り」と。「住処品」に至りて、文殊随事を慨念し、五臺を観照す。遂に万里を遠しとせず、命を委ね棲託し、錫を大華嚴寺に闍くこと十年、茲に山門の浄侶、敦く敷揚を請ふ。若く曰く。「一乗別教 談ずること何ぞ容易ならんや。但だ斯の教を以て、賢首頗る其の門を得るも、後学未だ其の奥を窺はず、毎に人亡くなりて法障はるを恨む。未だ全書を備へず。承襲は人に有り。逢

うて見解を蒙らば、吾此の時に於いて、黙す可からず。又念ふに、五地聖人は、身は仏境に棲み、心は真如を証すとも、後得智に於いて、世俗心を起こし、世間解を作す。迺ち儒家の経子史伝・道家の荘老寓言・東震の詞翰・西乾の梵書を覽、悉く皆游刃す。

【語釈】

【曇一大師】 六九二―七七一。前後四分律を講ずること三十五遍にも及んだという。至徳年間(七五六―七五八)に僧統に任ぜられた。『宋高僧伝』巻第一四に伝あり。

【南山業】 四分律宗。

【常照禪師】 未詳。

【十弘誓】 本碑文には具体的項目が見えないが、『華嚴懸談会玄記』巻第一(新纂卅八・九三b)には各項目が挙げられている。

- ① 體不損沙門之表。
- ② 心不違如來之制。
- ③ 坐不背法界之經。
- ④ 性不染情礙之境。
- ⑤ 足不履尼寺之塵。
- ⑥ 脇不触居士之榻。
- ⑦ 目不視非儀之彩。
- ⑧ 舌不味過午之餽。
- ⑨ 手不積円明之珠。
- ⑩ 宿不離衣鉢之則。

【無名大師】 七二二―七九三。律藏に詳しかった。のち、荷沢神会に学び、心印を授与せられる。『宋高僧伝』巻第一七に伝有り。

【融宗】 無名は神会に学んだ人物であるから、南宗禅のことでありと考えられる。

【東京大説和尚】 法説。本研究成果の五頁以降参照。

【住処品】 『六十華嚴』巻第二九「菩薩住処品」のこと。『六十華嚴』巻第二九・菩薩住処品「東北方有菩薩住處。名清涼山。過去諸菩薩常於中住。彼現有菩薩。名文殊師利。有一萬菩薩眷屬。常為說法。」(大正九・五九〇a)

【一乗別教】 別教一乗。三乗と一乗との対立を超越しつつ三乗を内に含む。『華嚴経』の教え。同教一乗(『法華経』の教え)に對する。

【五地聖人】 未詳。文殊のことか。

【後得智】 根本無分別智の後に獲得される智慧。一切を無差別に感ずる根本無分別智に対して、現象的な差別の世界を分別をもつて観ずる智慧のこと。

【賢首】 賢首大師法蔵(六四三―七一〇)。華嚴宗第三祖。

【西乾】 西天。竺乾。インドのこと。

【游刃】 熟達すること。『莊子』「養生主篇」にある庖丁の故事による。『莊子』養生主篇「庖丁為文惠君解牛。……文惠君曰。善哉。技蓋至此乎。庖丁游刃。對曰。……彼節者有間。而刀刃者無厚。以無厚入有間。恢恢乎其於游刃。必有余地矣。」

III

〔訓読〕

『大疏』を著さんと擬りて、般若院に於いて、聖加護を祈るに、一金像を見る。山嶽に挺特し、面満月の如く、空際に卓立せり。仍ち寐中に於いて、咽面門を捧ぐ。覚むるに及んで遂に椽筆を下す、神助有るが如し。通ずるに同時具足の十玄を以てし、科するに信解行証の四分を以てす。首尾相応じ、遠近相符う。譬えば大明空に当たれば衆星曜きを奪わゆるが如し。是の月や、無遮を設け以て之を慶す。『疏』就り、將に聞かんとするに、忽に龍と為るを夢みる。頭南臺を枕し、尾北臺に蟠かまり、鱗鬣空に耀き、明皎日を逾ゆ。須臾にして奮迅し、化して多龍と作り、分照して去る。流通の兆、其れ茲に在らんか。

新製を演ずるに暨んで、五雲空に擬じ、四衆輻湊し、威く来りて叩うて曰く、「大教の理深く、疏文の義広し、願はくは再剖を加へられ、以て重昏を決せられんことを」。遂に上首覚人僧睿・智愷等のために、随疏演義鈔四十卷・随文手鏡一百卷を製し、口訓面授す。又相国鄭公餘慶・南康王章公阜・越州觀察孟公簡・左拾遺白公居易等の為に、十七卷を著す。文は是れ皆華嚴の旨を發明する所以なり、又僧録遼大師等の為に、經律論闕脈三十餘部を製す。又七聖誕節の対御説法、表奏八十餘卷あり。

〔語釈〕

【大疏】『大方広仏華嚴經疏』六〇卷（大正三五・No.一七三五）

【般若院】華嚴寺の中の一塔頭か。

【咽面門】「咽門」はノド。「面門」はクチ。「咽面門」という形

での用例は未検。

【同時具足十玄】「十玄門」のことか。十玄門は、十の視点から

究極の縁起の世界のあり方を示したものの。①同時具足相応門。

②広狭自在無礙門。③一多相容不同門。④諸法相即自在門。⑤

秘密隱顯俱成門。⑥微細相容安立門。⑦因陀羅網法界門。⑧託

事頭法生解門。⑨十世隔法異成門。⑩主伴円明具徳門。(『大方

広仏華嚴經疏』卷第二、大正三五・五一五a)

【信解行証四分】 十信・十解・十行・十証。

【椽筆】 「椽大之筆」の略。たるきのような大きな筆。転じて、堂々たる文章をいう。

【無遮】 男女貴賤道俗の区別無く平等に布施を行う法会のこと。

【僧睿】 未検。

【智愷】 未検。

【随疏演義鈔】 『大方広仏華嚴經随疏演義鈔』九〇卷(大正三六・No.一七三六)。

IV

〔訓読〕

国師 玄宗 開元戊寅(二六)歳(七三八)を以て生る。

天宝戊子(七)歳(七四八)、出家。

肅宗 至徳丁酉(二)歳(七五七)、受戒。

代宗 大歴(大曆)戊申(三)歳(七六八)、訳経。

徳宗 元興(興元)甲子(元)歳(七八四)、造疏。

至貞元丁卯(三)(七八七)、絶筆。

貞元丙子(一二)(七九六)、翻経に紫を賜ふ。

【随文手鏡】 未詳。

【鄭公餘】 鄭餘慶。旧一五八・新一六五に伝。『宋高僧伝』が挙げる鄭綱とはいとこ。

【孟公簡】 孟簡。旧一六三・新一六〇に伝。

【白公居易】 白居易。旧一六六・新一一九に伝。

【十七卷】 未詳。

【遼大師】 未詳。宣福寺沙門靈遼のことか。靈遼は『四十華嚴』の訳場で共に詳定をつとめている。

【経律論閏脈三十餘部】 未詳。

【七聖】 七人の皇帝。

貞元己卯(一五)(七九九)、清涼国師号を授かる。

順宗(八〇五)、礼して師と為す。大經の理趣を問ふに、言下に省さる有りて、煥たること鏡に臨むるが若く、照たることに明なり。

憲宗元和庚寅(五)(八一〇)、僧統の印を授けらる。

穆宗・敬宗、礼して師と為す。讀じて云く、「我が和尚は甚深希有なり。優曇鉢花の朗潤なるに類し、機に随ふこと摩尼大宝の若し」と。

文宗太和辛亥(五)(八三二)、心印を師より受く。

開成己未(四)(八三九)春三月六日旦、上足の三教首座宝印法師海岸等を召し、付法し入寂す。

九宗の聖世を歴て、七帝の門師為り。俗寿一百二、僧臘八十三、形長九尺有四。手を垂るれば膝を過ぎ、目夜には光を発ち昼は乃ち瞬かず。言論清雅にして、動止則を作す。才二筆を供へ、学九流を贍たる。凡そ著述して流伝を見るもの、総べて四百餘卷。尽く一食に形す。大經前後講ずること五十餘遍、無遮大会十有五設、出家の弟子にして人の師と為る者三十有八、海岸虚寂を首と為す、稟授学徒は千人もて数うるに逮ぶも、唯だ東京僧睿・圭峯宗密のみ独り其の奥を得。餘は則ち心を虚うして来り腹を實して往く。蛻三七を経るも、顔色潤沢にして、端坐すること山の如きなるは、乃ち定力なり。其の月二十七日、遺旨を恭承して、遷して全身を終南石室に奉ず。皇帝輟朝し、重臣縞素す。其の餘は即ち知るべし。

〔語釈〕

【訳経】 不空の訳場に参したこと。

【造疏】 『華嚴經大疏』を著したこと。

【順宗・問大經】 『答順宗心要法門註』一卷が伝わる(新纂卅五)

八・No.一〇〇五。註は宗密によるもの。

【盡形一食】 「一食」は、一食頃(非常に短い間)のことか。或

いは、肉食について述べたものの書名とも考えられる。

【優曇鉢花】「優曇鉢」は *udumbara-puspa* の音訳。花が外から見えないために、三千年に一度だけ咲くきわめて珍しい花とされ、非常に希有なことの譬えに用いられる。

【摩尼大宝】「摩尼」は *mani* の音訳。珠玉の総称であるが、不幸災難を除いたり濁水を清浄にするなどの徳があるとされる。

【海岸】未詳。

【垂手過膝】仏の三十二相の一つ「正立手摩膝相」。『大智度論』巻第四「王言。何等三十二。相師答言。一者。……九者。正立

手摩膝相。不俯不仰。以掌摩膝。……」(大正二五・九〇b)
【日夜発光昼乃不瞬】出典未検。八十種好の内、目に関するのは

次の二つ。『大般若経』卷第三八一「世尊眼淨青白分明。是三十六。世尊眼相脩廣譬如青蓮華葉甚可愛樂。是三十七。」(大正六・九六八b)

【才供二筆】適例未検。「二つの才能を持っている」ということか。この場合は、律と禪が相当するか。

【九流】先秦時代の代表的な九つの学派。儒家・道家・陰陽家・法家・名家・墨家・縦横家・雑家・農家。ここでは、外典をよく学んだことを指すか。

【蛻】ぬけがら。遺体を指す。葛洪『抱朴子』論仙「下士先死後蛻。謂之尸解仙。」

V

【訓読】

初期西域梵僧有り、葱嶺に在りて二使者の、足地を履まざるを見る。呪を以て止めて之を詰す。曰く、「余(餘)は北印土文殊堂の神なり。東土に於て華嚴菩薩の大牙を取りて供養せん」と。至るに及んで奏して石室を啓き之を驗む。果たして大牙無し。惟だ三十九齒のみにして色冰霜の若し。遂に靈骨を闡維し、舍利数千粒を得るに、明白光潤たり。舌紅蓮の若く火も変ずる能はず。悉く聚めて之を瘞む。文宗裴公美に命じて碑を撰せしめ、沈元及に像を塑らしめ、塔を妙覺と諡す。真贋を御製し師を尊び貌を礼すること、優渥前に無し。

【語釈】

【初期】「二期」に同じく、「一年経って」というような意味か。

【葱嶺】現在のバミール高原。

【餘】『華嚴懸談会玄記』は「余」に作る。いま、従う。

【大牙】門歯。

【惟三十九齒】仏には齒が四十本あるとされる。三十二相の一つ。『大智度論』卷第四「王言。何等三十二。相師答言。一者。

……二十二者。四十齒相。不多不少。余人三十二齒。身三百余

骨。頭骨有九。菩薩四十齒。頭有一骨。菩薩齒骨多。頭骨少。

余人齒骨少。頭骨多。以是故。異於余人身。」(大正二五・九〇

c)

【色若冰霜】仏の齒は非常に白いとされる。三十二相の一つ。『大智度論』卷第四「王言。何等三十二。相師答言。一者。……二

十四者。牙白相。乃至勝雪山王光。」(大正二五・九〇c)

【闍維】jīdāiの音訳。荼毘に付すこと。

【裴公美】裴休。公美は字。

【沈元及】未詳。人名か。

【真贊】真影と贊文という意味か。

【優渥】天子の恩沢や詔勅が懇ろで手厚いこと。

VI

〔訓読〕

今は則ち年代寢りに遠く、塔廢し碑亡く、漫として考うべからず。清涼遠孫、永安嫡子の龍川行吉祥なる者あり。今上皇帝の師号を受け、大元帝師の戒法を得たり。祖塔を重建せんと欲して、燕京自ら臨洮に至り、往復すること万里、特に是の事を以て今の帝師に白して其の可否を決せしむ。帝師曰く「善哉善哉。真に美事なり」と。白金一笏を出して以て之に遺り、併せて陝西僧統・雄辯大師・五路提領遷公大師に囑して、共に其の事を成さしむ。既に終南に祇(抵)り、伝載を按じて遍く塔址を求め、土を懇(懇)して文を尋ねて、僅かに石座を見る。因て詮庵主なる者に請うて、清涼の疏三巻を書し、塔中に葬って、以て志願に酬いんと欲す。繼いで因縁際会して石匣を以て來施する者あり、舍利を以て來獻する者あり。照禪師の如きは、天兵の後に、華嚴寺に在て清涼の舍利を取得し、因って衆に施せり。達僧判、清典座、劉万戸太夫人賈氏、張太監夫人劉氏等あり、各おの得る所の舍利計千余粒を施し、方に市に詣って玻璃瓶を贖い、以て之に貯えんと欲す。万戸夫人は復た家藏の玉瓶を以て施を為し、並びに法藏を転じ、齋を設けて慶讚す。迎引の日、甘

沢祈りに応じ、烏雲よも四に起こり、還つて大いに澍さんと欲す。香花幡蓋は、長安城を遶り、送つて南関に出で、隊仗四散するに、兩方に滂霈ほうはいたり。是の夕、張大監の莊に宿る。夫人劉氏大いに供養を興す。翌日、道して焦村に至るに、雨ふらんとして雨ふらず。粘合二哥千戸夫人朮忽氏、衆檀信等、設供し、鼓樂喧闐やかましく、幡花間雜す。送りて寺中に至るに、本処の齊提控、衆老宿等、又復た齋を設け、罷めて人散ずれば、復た大雨あり。此れ皆檀越の敬信、清涼の感應なり。塔成り、印吉祥に命じて之を記さしむ。自ら設聞を愧じ、大任に勝え難きも、牢として弊するを獲ず。姑しやうく梗概を述べて以て盛心に酬いん。夫の清涼の世繫師承を序べ、清涼の道德功行を美するが若きは、已に相国鄭公余慶十卷の文、裴公休妙覺の碑に具に載せれば、茲に贅を庸いるなし、と云う。

〔語釈〕

【永安】 善柔（一一九八〜一二六九）。『補統高僧伝』四・『華嚴 仏祖伝』に伝。

【今上皇帝】 世祖。

【師号】 扶宗弘教大師

【大元帝師】 八思巴（バスバ。一二三五〜一二八〇）。『元史』二

〇二・『補統高僧伝』に伝。

【遷公大師】 弘遷。

【詮庵主】 未詳。

【設聞】 少しの評判。

VII

〔訓読〕

至元九年（一二七二）歳次壬申九月日宣賜扶宗弘教大師上谷大法雲寺伝戒長講沙門行吉祥建

宣授陝西五路积教都提領円融湛弘教大師弘遷

宣授陝西等路积教都僧統本寺住持雄弁大師积信満 同建 本寺院主信遇

宣授諸路釈教都總統燕京大宝集寺住持壇主遠孫円明吉祥 副院弘冲

宣授鞏昌路都提領崇信 都僧録惠才僧録覺照 都僧判崇縁僧判復興

京兆路都僧判通濟大師 幸達 収舍利主無憂居士吳清

京兆路都僧録明監通惠大師 丈亨 前威寧縣丞任天祐

宣授京兆路僧尼都提領大師 明湛 提点正元

僧統所案司提举惠達 知管普明 知書文滿 徳閻 訳使唐丈慶知印張英

京兆路僧録司提点宝輝 知文道常 管局道瓊 提点祖敬

宣授扶宗弘教大師伝法門人 講經沙門了応 了悟 小師提点義明 権講海褒

提点祖宝 海興 海進 海達 海悟 提始 海珍 海受 海回 海聚

侍者海初 海俊 海祐 海祥 海貴 海湛 海栄 海信 提控劉澤

上座海智 海志 海心 助縁尼 福瓊 善妙 行堅 智善 智秀 福智 海昌

西京路都僧録普恩寺住持通悟大師令吉祥

釋大方廣佛新華嚴經論主李長者事迹

〔釋文〕

釋大方廣佛新華嚴經論主李長者事迹

(采 畢 晃)

李長者。諱通玄。莫詳所自。或有詢其本者。但言滄州人。開元二十七年三月望日。曳策荷笈。至太原孟縣西四十里同穎鄉。村名大賢。有高山奴者。尚德慕士。延納無倦。長者徑詣其門。山奴諦瞻神儀。知非常器。遂磬折禮接。請歸安居。每旦唯食棗十顆。柏葉餅子如匕大者一枚。自爾不交外人。掩室獨處。含毫臨紙。曾無虛時。如是者三稔。一旦捨山奴。南去五六里。至馬氏古佛堂。自搆土室。寓于其側。

端居宴默。于茲十年。後復囊挈經書。遵道而去二十里餘。次韓氏別業。即今冠蓋村焉。忽逢一虎。當塗馴伏。如有所待。長者語之曰。吾將著論釋華嚴經。可與吾擇一棲止處。言畢虎起。長者徐而撫之。遂將所挈之囊。挂于虎背。任其所止。於是虎望神福山原。直下三十餘里。當一土龕前。便自蹲駐。長者旋收囊裝。置於龕內。虎乃龕顧。妥尾而去。其龕。瑩潔圓迴。廣袤尋丈。自然而有非人力成。龕之四旁。舊無泉澗。長者初來之夕。風雷暴作。拔去一古松高三百餘尺。及旦松根之下。化爲一潭。深極數尋。迴還五十餘步。甘逾瑞露。色奪琉璃。時人號爲長者泉。至今澄明。未曾增減。僊陽之歲。祈之必應。長者製論之夕。心窮玄奧。口出白光。照耀龕中。以代燈燭。

居山之後。忽有二女子。容華絕世。皆可笄年。俱衣大布之衣。悉以白巾幪首。姓氏居處。一無所言。常爲長者。汲水焚香。供給紙筆。卯辰之際。輒具淨饌。甘珍畢備。置長者前。齋罷撤器。莫知所止。歷于五祀。曾不闕時。及其著論將終。遂爾絕迹。謹按華嚴舊傳。東晉三藏佛馱跋陀羅。於江都都司空寺譯經。有二青童子。忽自庭沼而出。承事梵僧。麝香添餅。不離座右。每將欲夕。還潛沼中。日日皆然。率爲常事。及譯畢寫淨。沈默無迹。長者感通。事符曩昔。

長者。身長七尺二寸。廣眉朗目。丹唇紫肥。長髯美茂。修臂圓直。髮彩紺色。毛端右旋。質狀無倫。風姿特異。殊妙之相。靡不具足。首冠樺皮之冠。身披麻衣。長裙博袖。散腰而行。亦無韋帶。居常跣足。不務將迎。放曠人天。無所拘制。忽一日出山。訪舊止之里。適值野人聚族合樂。長者徧語之曰。汝等好住。吾將欲歸。衆乃罷樂。驚惶相顧。咸皆惻愴。必謂長者却還滄州。揮涕同詞。懇請留止。長者曰。縱在百年。會當歸去。於是舉衆却送長者入山。至其龕所。復語之曰。去住常然耳。汝等可各還家。及衆旋踵之頃。嵐霧四起。景物不分。行路之人。咸共駭異。翌日長叟結徒。登山禮候。但

見姿容端儼。已坐化於龕中矣。時當三月二十八日。報齡九十六。有一巨蛇。蟠當龕外。張目呀口。不可向近。衆乃歸誠致祝。某等今欲收長者全身。將營殯藏。乞潛威靈。願得就事。蛇因攝形不現。耆舊潸泣擧荷。擇地於大山之陰。累石爲墳。蓋取堅淨。卽神福山逝多蘭若。今方山是也。

初長者隱化之日。及成墳之時。煙雲凝布。巖谷震蕩。有二白鶴悲唳當空。二鹿相叫連夕。其餘飛走悲鳴滿山。鄉原之人相率變服。追攀孺慕。若喪所天。每當建齋。卽墳上雲起。七七如是。良足異夫。長者。平昔之時。每年常於三月末閒。設十方賢聖淨會。不以女人造食。貴使觸事精誠。至於棗核米泔。不許輒棄。齋畢任用。犬彘徧霑。如斯之會。遵承到今。未曾廢絕。至大曆九年二月六日有僧廣超。於逝多蘭若。獲長者所著論二部。一是大方廣佛新華嚴經論四十卷。一是十二緣生解迷顯智成悲十明論一卷。傳寫揚顯。徧於并汾。廣超門人道光。能繼師志。肩負二論。同遊燕趙。昭示淮泗。使後代南北學人。悉得參閱論文。宗承長者。皆超光二僧流布之功耳。其爲論也。統貫經意。標表法身。廓性海於無邊。歷刹塵而不動。分泮衆教。極彼源流。融熔上乘。會此華藏。俾迷徑者獲道。滯教者忘機。可謂毗盧之指歸。華嚴之日月矣。若非聖人愍世降生開導昏瞶。孰能條釋大典。指授大心歟。長者。行止玄微。固難遐究。虛空不可等度。沉擬求邊際耶。比歲。僧元規特抵方山。求長者遺迹。初禮石墳。次尋龕址。龕前有松三株。一已查立。俱是長者手植。將化之月。一株遂枯。至今二株常有靈鶴結巢於頂。又於壽陽南界解愁村。遇李士源者。乃傳論僧廣超之猶子也。示長者眞容圖。瞻禮而廻。斯爲滿願矣。向之云云。蓋在據實。枝葉華藻無所務焉。雲居散人馬支纂錄。

I

〔訓読〕

釈大方広新華嚴經論主李長者事迹

李長者、諱は通玄、自る所を詳らかにすること莫し。或いは其の本を詢う者有れば、但だ滄州の人と言う。開元二十七

年三月望日、策を曳き笈を荷うて、太原五県の西四十里同穎郷に至る。村を大賢と名う。高山奴という者有り、徳を尚
び士を慕うに、延納して倦むこと無し。長者徑ちに其門に詣り、山奴神儀を諦瞻して、非常の器なることを知る。遂に
磬折して礼接し、帰せんことを請ひ安居せしむ。毎且唯だ棗十顆、柏葉の餅子七の大きさ如きなる者の一枚を食うのみ。
爾れ自り外人に交わらず、室を掩つて独処し、毫を含み紙に臨んでは、曾て虚時無し。是の如くすること三稔にして、
一旦山奴より捨れ、南に去ること五六里、馬氏が古仏堂に至り、自ら土室を構え、其の側に寓す。

〔語釈〕

【滄州】 ①水際の土地。隠者の住処といわれる。三国・魏・阮籍

「為鄭冲勸晋王箋」(『文選』卷四〇)「今大魏之徳、光于唐虞。

明公盛勳、超於桓文。然後臨滄州而謝支伯、登箕山而揖許由、

豈不盛乎」。②州名。唐置く。河南省滄県の東南。『旧唐書』卷

三九・河北道・滄州上「滄州、上、漢渤海郡、隋因之。武徳元

年、改為滄州、領清池、饒安、無棣三県、治清池。…天宝元年、

改為景城郡。乾元元年、復為滄州」。

【開元二十七年三月望日】 七三九年。『統感』に「二十恐剩」と

いうのは、『決疑論序』、『宋高僧伝』などに七年とするのに拠つ

たもの。二十七年とする資料は他に『神福山靈跡記』がある。

望日は十五日。

【太原孟県】 山西省孟県。

【高山奴】 未詳。

【延納】 ひきいれる。吳質「在元城与魏太子賤」(『文選』卷四〇)

「前蒙延納、待宴終日、燿靈匿景、繼以華燈」。

【神儀】 表情、風采。『梁書』卷五一・陶弘景「及長、身長七尺

四寸、神儀明秀、朗目疏眉、細形長耳」。

【磬折】 立礼の法。磬のように身をかがめる。『礼記』曲礼下「行

不举足。車輪曳踵。立則磬折垂佩」。

【礼接】 礼遇。『晋中興書』(『芸文類聚』卷一三)「礼接名豪。設

官分職。隱恤士庶。百姓婦心焉」。

【安居】 やすらかに暮らす。『孟子』滕文公下「一怒而諸侯懼。

安居而天下熄」。

【掩室】 王巾「頭陀寺碑文」(『文選』卷五九)「是以掩室摩竭、

用啓息言之津。杜口毘邪、以通得意之路」。李善注「華嚴經曰、

仏在摩竭提国寂滅道場、始成正覺。法華經曰、寂滅、無言也。

僧肇論曰、釈迦掩室於摩竭」。

II

〔訓読〕

端居宴黙すること、茲に十年にして、後ち復た囊もて経書を挈ぐ。道に遵って去ること二十里余、韓氏が別業に次る。即ち今の冠蓋村なり。忽ち一虎に逢う。塗に当って馴伏して、待つ所有るが如し。長者之に語げて曰く「吾れ將に論を著して華嚴経を釈せんとす。吾が与に一棲止の処を扱ふ可し。」と言畢りて虎起ち、長者徐ろに之を撫す。遂に挈ぐ所の囊を將って、虎の背に掛け、其の止る所に任す。是に於て虎神福山原を望みて、直ちに下ること三十余里、一土龕の前に當って、便すなわ自ち蹲駐す。長者旋たちまち囊裝を収めて、龕内に置く。虎乃ち屢しば顧み、尾を爰れて去る。其の龕、瑩潔円廻にして、広袤尋丈あり、自然にして人力の成すに非ざる有り。龕の四旁、旧より泉澗無し。長者初めて来るの夕、風雷暴かに作り、一古松の高き三百余尺なるを抜き去り、且に及んで松根の下、化して一潭と為る。深きこと数尋を極め、廻還五十余歩あり。甘きこと瑞露を逾え、色は琉璃を奪う。時人号づけて長者泉と為す。今に至るまで澄明にして、未だ曾て増減せず。僊陽の歳、之に祈れば必ず応あり。長者論を製するの夕、心玄奥を窮め、口より白光を出し、龕中を照耀して、以て燈燭に代う。

〔語釈〕

【端居】 ふだん。平生。『梁書』卷二六・傅昭「終日端居、以書記為業、雖老不衰」。

【宴黙】 しずかでおごそかな状態に居ること。『統高僧伝』釈法聰「年二十五。東遊嵩嶽西涉武当。所在通道惟居宴黙。因至襄陽傘蓋山白馬泉。築室方丈以為栖心之宅。入谷兩所置蘭若舍。

今巡山者。尚識故基焉」(大正五〇・五五五b c)。

【別業】 別荘。『宋書』卷六七・謝靈運「靈運父祖並葬始寧県、并有故宅及墅、遂移籍會稽、修營別業、傍山帶江、尽幽居之美」。

【冠蓋村】 未詳。

【神福山】 山西省寿陽県東北、孟県西南にあり。

【龕】 仏塔。仏塔下部の小部屋（僧の遺体をおさめる）。仏像や神像を収める厨子。

【瑩潔】 つやがあり清らか。梁・陶弘景「許長史旧館壇碑」「君清穎瑩潔、特絶世倫」。

【広袤】 大きな面積。張衡「西京賦」「天命不滔、疇敢以渝。於

是量徑輪、考広袤」。李善注「南北為徑、東西為広。∴。説文曰、南北曰袤」。

【尋丈】 長さの單位。尋は八尺、丈は一丈。『管子』明法「有尋丈之数者、不可差以長短」。

【愆陽】 愆は愆の俗字。冬に暖かいこと。『漢書』卷二七・五行志「凡雹、皆冬之愆陽、夏之伏陰也」。日照り。

III

〔訓読〕

山に居するの後、忽ち二女子有り、容華絶世にして、皆な笄年可りなり。俱に大布の衣を衣、悉く白巾を以つて首を幪う。姓氏居処は、一も言う所無し。常に長者の為に、水を汲み香を焚き、紙筆を供給す。卯辰の際には、輒ち淨饌を具え、甘珍畢く備え、長者の前に置く。齋籠りて器を撤し、止まる所を知る莫し。五祀を歴て、曾て時を闕かず。其の論を著すこと將に終らんとするに及び、遂爾として迹を絶つ。謹しんで華嚴旧伝を按ずるに、東晋の三蔵仏馱跋陀羅、江都の謝司空寺に於いて経を訳す。二青童子有り、忽ち庭の沼自りして出ず。梵僧に承事し、香を熱き餅を添えて、座右より離れず。將に夕ならんと欲する毎に、還つて沼中に潜る。日日皆な然り、率ね常事と為す。訳畢つて写淨するに及んで、沈黙して迹無し。長者の感通、事曩昔に符すなり。

〔語釈〕

【笄年】 女子の十五歳。『礼記』内則「女子十年不出。∴十有五年而笄。二十而嫁。有故。二十三年而嫁。聘則為妻。奔則為妾。

凡女拜。尚右手」。

【大布】 地の粗い布。粗末な布。『春秋左氏伝』閔公・伝二年「文公大布之衣。大帛之冠」。杜預注「大布、麤布。大帛、厚綫。蓋用諸侯諒闇之服」。

【卯辰】 六時から八時。

【淨儀】 精進料理。『統高僧伝』法論「帝美其清悟。為設淨儀於大宝殿」(大正五〇・五〇〇a)。

【遂爾】 このときに。『魏書』卷五五・劉芳「惟太常所司郊廟神祇、自有常限、無宜臨時樹臨以意、若遂爾妄營、則不免淫祀」。

【高僧伝】 卷一二・釈慧進「年四十忽悟心自啓。遂爾離俗止京師高座寺」(大正五〇・四〇七c)。

IV

【訓読】

長者、身の長七尺二寸、広眉朗目、丹唇紫肥、長髻美茂、修臂円直、髮彩紺色、毛端右に旋る。質状倫無く、風姿特異、殊妙の相、具足せざること靡し。首に樺皮の冠を冠り、身に麻衣を披る。長裙博袖にして、腰を散やかにして行き、亦た韋帯無く、居常跣足す。将迎を務めず、人天に放曠たりて、拘制せらるる所無し。忽ち一日山を出で、旧止の里を訪う。適たま野人の族を聚めて楽を合するに値う。長者徧く之に語げて曰く「汝等好住、吾れ将に帰らんと欲す。」と。衆乃ち楽を罷め、驚惶して相い顧る。咸く皆な惻愴し、必ず謂らく長者却て滄州に還らんと。涕を揮い詞を同じうして、懇ろに留止を請う。長者曰く「縦に在ること百年なるも、会ず当に帰去すべし。」と。是に於て衆を挙げて却て長者を送りて山に入る。其の龕所に至りて、復た之に語げて曰く「去住は常に然るのみ、汝等各おの家に還るべし。」と。衆踵を旋すの頃に及んで、嵐霧四に起つて、景物分たず。行路の人、咸く共な駭異す。翌日長叟徒を結んで、山に登つて礼候するに、但だ姿容端儼にして、已に坐して龕中に化するを見る。時に三月二十八日に当る。報齡九十六なり。一巨蛇有り、蟠りて龕外に当り、目を張り口を呀け、向い近づく可からず。衆乃ち帰誠して祝を致し「某等今長者の全身を収め、

【華嚴旧伝】 『大方広仏華嚴経感応伝』「忽遇西来三藏一乘法主仏駄跋陀羅。…而三藏遂撰衣鉢昇空。諸神变騰身、坐飛南往揚州、如鳥翔空。挙僧愕悔、不可復追。以義熙十四年三月十四日、於建業謝司空寺。造護浄法堂、翻訳華嚴。当訳経時、堂前忽然化出一池。毎日且有二青衣、從池而出。於経堂中、洒掃研墨給侍、際暮還宿池中。相伝釈云、此経久在龍宮。龍王慶此翻訳故、乃躬自給侍耳。後因改此寺為興嚴寺」(大正五一・一七三c)。

將に殞威を営まんと欲す。乞うらくは威靈を潜めんことを。願くは事を就するを得んことを。」と。蛇因りて形を撰めて現われず。耆旧潛泣して躰荷し、地を大山の陰に挾ぶ。石を累ねて墳と為し、蓋は堅淨なるを取るなり。即ち神福山の逝多蘭若にして、今の方山は是れなり。

【語釈】

【質状】 性質と形。『晋書』卷三六・張華「園中茅積下得一白魚、質状殊常、以作鮓、過美、故以相獻」。

【居常】 平生。『史記』卷九二・淮陰侯「信由此日夜怨望、居常鞅鞅、羞与絳、灌等列」。

【跣足】 はだし。『北史』卷八四・郭文恭「文恭孝慕罔極、乃居祖父墓次、晨夕拜跪。跣足負土、培祖父二墓、寒暑竭力、積年不已」。

【將迎】 送迎。謝靈運「初去郡」(『文選』卷二六)「牽絲及元興、解龜在景平。負心二十載、於今靡將迎」。李善注「文子曰、聖人若鏡、不將不迎。爾雅曰、將、送也」。

【放曠】 心がひろく、こだわらない。潘岳「秋興賦」「逍遙乎山川之阿、放曠乎人閒之世」。

【人天】 人閒界と天上界。『魏書』卷一一四・釈老志「人天道殊、卑高定分」。

【端儼】 ただしくおごそか。『宋書』卷七三・顔延之「方其剋瞻、弥喪端儼、沉遭非鄙、慮將醜折」。

【婦誠】 まごころを寄せる。『楚辭』九歎「逢紛」「椒桂羅言顛覆兮、有竭信而婦誠」。

【威靈】 神秘的で不思議な力。揚雄「長楊賦」「今衆遠出、以露威靈、數搖動以罷車甲、本非人主之急務也、蒙芻惑焉」。

【耆旧】 老人で昔なじみ。『漢書』卷七八・蕭育「上以育耆旧名臣、乃以三公使車載育入殿中受策」。

【潛泣】 涙の流れるさま。『詩』小雅「大東」「君子所履。小人所視。睠言顧之。潛焉出涕」。

【逝多蘭若】 寺院名。逝多は Jeta の音写。舍衛国波斯匿王の太子。蘭若は aranya の音写。もと森林の意で、転じて寺院をいう。

【方山】 神福山に同じ。

〔訓読〕

初め長者隠化の日より、成墳の時に及ぶまで、煙雲凝布し、巖谷震蕩す。二白鶴の悲唳して空に当たり、二鹿の相い叫ぶこと連夕有り。其の余の飛走の悲鳴、山に満つ。郷原の人、相い率て服を褒じ、追攀し孺慕すること、所天を喪うが若し。建齋に当たる毎に、即ち墳上に雲起る。七七是の如くすること、良に異とするに足るかな。長者、平昔の時、毎年常に三月の末間に於て、十方賢聖の浄会を設くるに、女人を以って食を造らしめず、事に触れて精誠ならしめんことを貴ぶ。棗核米泔に至るまで、輒りに棄つることを許さず。齋畢りて用いるに任せ、犬彘徧く霑う。斯の如きの会、遵承して今に到り、未だ曾て廢絶せず。大曆九年二月六日に至って僧広超というもの有り、逝多蘭若に於て、長者の著す所の論二部を獲たり。一は是れ大方広仏新華嚴經論四十卷、一は是れ十二縁生解迷顯智成悲十明論一卷なり。伝写揚顯して、并汾に徧し。広超が門人道光、能く師の志を継ぎ、二論を肩負して、同に燕趙に遊び、昭かに淮泗に示す。後代の南北の学人をして、悉く論文を参閲し、長者を宗承することを得しむるは、皆な超光二僧の流布の功なるのみ。其の論を為るや、經意を統貫し、法身を標表す。性海を無辺に廓げ、利塵を歴るも動ぜず。衆教を分泮して、彼の源流を極め、上乘を融熔し、此の華藏に会う。徑に迷う者をして道を獲しめ、教に滯おる者をして機を忘れしむ。謂つ可し毘盧の指帰、華嚴の日月なり、と。若し聖人の世を愍れみて降生し昏瞶を開導するに非ざれば、孰れか能く大典を条釈し、大心を指授するか。長者は、行止玄微にして、固に遐かに究め難し。虚空は等度す可からず、況や辺際を求むることを擬するや。

【語釈】

【連夕】『隋書』卷七三・辛公義「公義親設一榻、独坐其間、終日連夕、对之理事」。

【郷原】いなかの偽善者。『論語』陽貨「子曰。郷原。徳之賊也」。土地のもの。

【追攀】追いつがる。王粲「七哀詩」二首（其一）「親戚对我悲、朋友相追攀。出門無所見、白骨蔽平原」。

【孺慕】幼児のように慕う。『陳書』卷三二・司馬暠「暠幼聰警、有至性。年十二、丁内艱、孺慕過礼、水漿不入口、殆経一句」。

【所天】天として尊ぶもの。君父など。『後漢書』卷三四・梁竦「妾得蘇息、拭目更視、乃敢昧死自陳所天」。李賢注「臣以君为天、故云「所天」」。

【米泔】米のとぎ汁。

【大曆九年】七七四年。

【僧広超】未詳。

【大方広仏新華嚴経論四十卷】大正蔵No.一七三九

【十二縁生解迷顯智成悲十明論一卷】大正蔵No.一八八八

【并汾】并州（河南省西部と山西省東部一帯の地）と汾水（山西省北部に発し、太原市を流れ、省の中央を西南に流れて黄河に注ぐ）のあたり。

【道光】『宋高僧伝』卷十四明律に唐杭州華嚴寺道光伝が見えるが、本文の道光と同一人物かは不明。

【燕趙】河北省から山西省にかけての地。

【淮泗】淮水（河南省に水源を発し、安徽省と江蘇省を流れる）と泗水（山東省泗水県に源を発して江蘇省に入り淮水に注ぐ）のあたり。

【法身】仏の三身のひとつ。仏の宇宙身。色も形もない真実そのものの形。

【性海】本性の海。真理を海にたとえたもの。

【無辺】空間的に限られていないこと。

【利塵】無数の国土を微塵としたほど、数の多いことをいう。

【分泮】分離する。

【上乘】大乘の異名。

【華蔵】華蔵世界。毘盧舎那仏の浄土の名。

【忘機】亡機とも書く。機は物を求める分別心。分別の心を忘れて無心無作であること。

【毘盧】毘盧舎那仏。華嚴経が説く仏の名。

【降生】仏と菩薩の出生をいう。高いところから下に降りるといふ意味でいう。

【指授】伝授する。『三国志』卷四〇・彭羨「先主亦以為奇、数令羨宣伝軍事、指授諸將、奉使称意、識遇日加」。

【虚心】偉大な心。広大心ともいう。

【虚空】空間の意。虚・空ともに無の別称。無限・遍満を表す場合のたとえに用いられる。

【辺際】きわまるどころ。

〔訓読〕

比歳、僧元覘特に方山に抵りて、長者の遺迹を求む。初め石墳を礼し、次に龕址を尋ぬ。龕前に松三株有るも、一は已に查立す。俱に是れ長者手ら植う。將に化せんとするの月、一株遂に枯る。今に至るまで二株常に靈鶴有り巢を頂きに結ぶ。又た寿陽の南界解愁村に於いて、李士源という者に遇う。乃ち論を伝えらるる僧広超の猶子なり。長者の真容図を示され、瞻礼して廻り、斯れを満願と為す。向の云云は、蓋し実を據うに在り。枝葉華藻は務めとする所無し。雲居散人馬支纂録す。

〔語釈〕

【僧元覘】 未詳。

【寿陽】 県名。山西省寿陽県。

【猶子】 兄弟の子。甥や姪。『礼記』檀弓上「喪服。兄弟之子猶子也。蓋引而進之也」。

【真容図】 本当の姿を描いた絵。『高僧伝』卷一三興福篇「論曰。

昔憂填初刻栴檀。波斯始鑄金質。皆現写真容工図妙相」(大正五〇・四一三a)。

【瞻礼】 仰ぎ見て礼拝する。曹松「書翠巖寺壁」「何年話尊宿、瞻礼此堂中。入郭非無路、帰林自学空」。

【満願】 願いのかなうこと。皮日休「病後春思」「応笑病来慙満

願、花牋好作断腸文」。

【據実】 事実を摘録する。事実にもとづく。『文心雕龍』指瑕、顔監匡謬、拈據及於末微、知幾点煩、丹黄爛其盈幅。此遇諸異代、據実而談者也」。

【枝葉】 主要でないことから。『春秋左氏伝』閔公・伝元年「国將亡。本必先顛。而後枝葉從之」。

【華藻】 華麗な修辭。曹植「七啓」(『文選』卷三四)「歩光之劍、華藻繁綺。飾以文犀、彫以翠緑」。李善注「藻、文采也」。

【雲居散人馬支】 未詳。雲居は山名。河北省房山県の西。散人はもと役に立たない人をいい、雅号に添えていう。

(石川彰彦)

唐大興善寺故大德大辯正廣智三藏和尚碑銘并序

〔釋文〕

唐大興善寺故大德大辯正廣智三藏和尚碑銘并序／

銀青光祿大夫・御史大夫・上柱國・馮翊縣・開國公・嚴郢撰／

銀青光祿大夫・彭王傅・上柱國・會稽郡・開國公・徐浩書／

和尚闡不空。西域人也。氏族不聞於中夏故不書。／玄宗屬知至道。特見高印。訖

灌頂國師。以玄言德祥。開右 至尊。／代宗初。以特進大鴻臚表之。及示疾不起。又就臥內。加開府儀

同三司肅國公。皆牢讓不允。特錫法號。曰大廣智三藏。

大曆／九年夏六月癸未。滅度於京師大興善寺。 代宗爲之。廢朝三日。贈司空。追諡大辯正廣智三藏和尚。

茶毗之時。詔遣中謁者。齋 祝文祖祭。申如在之敬。 睿詞深切。嘉薦令芳。禮冠羣倫。舉無與比。伊年

九月。／詔以舍利起塔於舊居寺院。

和尚性聰朗。博貫前佛萬法要指。縉門獨立。邈盪盪其無雙。稽夫真言字義之憲度。灌頂升壇之／軌迹。則時成佛之速。

應聲儲社之妙。天麗且彌。地普而深。固非末學所能詳也。敢以概見序其大歸。昔金剛薩埵。親於毗盧遮／那佛前。受瑜

伽最上乘義。後數百歲。傳於龍猛菩薩。龍猛又數百歲傳於龍智阿闍梨。龍智傳金剛智阿闍梨。金剛智東來傳／於和尚。

和尚又西遊天竺師子等國。詣龍智阿闍梨。揚擡十八會法。因化相承。自毗盧遮那如來地於和尚。凡六葉矣。每齋戒／留

中。道迎善氣。登禮皆答。福應較然。溫樹不言。莫可記已。

西域隘巷。[狂]象奔突。以慈眼視之。不旋踵而象伏不起。南海半渡。天／吳鼓駭。以定力對之。未移晷而海靜無浪。其生也。母氏有毫光照燭之瑞。其歿也。精舍有池水竭涸之異。凡僧夏五十。享年七／十。自成童至于晚暮。常飾共具坐道場。浴蘭焚香。入佛知見。五十餘年。晨夜寒暑。未曾須臾有傾搖懈倦之色。過人絕遠。乃如／是者。後學升堂誦說。有法者非一。而沙門惠朗。受次補之記。得傳燈之[圖]。繼明佛日。紹六爲七。至矣哉。於戲法子。永懷梁木。將／紀本行。託餘勒崇。昔承微言。今見几杖。光容眇漠。壇宇清愴。暮書昭銘。[小]子何攘。銘曰／

嗚呼大士。右我 三宗。道爲 帝師。秩爲儀同。昔在廣成。軒[后]順風。歲逾三千。復有肅公。瑜伽上乘。眞語

密契。六葉／授受。傳燈相繼。述者牒之。爛然有第。陸伏狂象。水息天吳。慈心制暴。慧力降愚。寂然感通。其可測乎。兩楹夢奠。雙樹變色。司空／寵終。辯正旌德。 天使祖祭。 宸衷悽惻。 詔起寶塔。舊[圖]之隅。下藏舍利。

上飾浮屠。跡殊生滅。法離有無。刻石／爲偈。傳之大都。／

建中二年歲次辛酉十一月乙卯朔十五日己巳建／

I

〔訓読〕

唐大興善寺大弁正広智三藏和尚碑銘并序

銀青光祿大夫・御史大夫・上柱国馮翊県・開国公・嚴郢撰

銀青光祿大夫・彭王傅・上柱国・会稽郡・開国公・徐浩書

和尚諱は不空。西域の人なり。氏族は中夏に聞かざるが故に書かず。玄宗は至道を燭知せられ、特に高印せらる。肅宗・代宗に訖り、三朝皆な灌頂国師と為り、玄言徳祥を以て、至尊を開右す。代宗の初め、特進大鴻臚を以て之れを褒表す。疾を示して起たざるに及び、又た臥内に就いて、開府儀同三司・肅国公を加えらる。皆牢く譲るも允されず。特に法号

を錫りて、大広智三藏と曰う。

【語釈】

【唐大興善寺大弁正広智三藏和尚碑銘】 原碑は西安碑林に現存する。「唐大興善寺大弁正広智三藏国師之碑」の十六字が四字四行で書かれている題額の左下より右斜めに、また、碑の中央左右に断裂があり不明な字もある。縦二〇センチメートル、横一〇〇センチメートル、一行あたり四十八字である。

大興善寺・西安府にある。創建は晋武の時代で、初め遵善寺と名づけられたが、北周武帝の廃滅を免れて長安陟帖寺として保存せられた。隋の文帝の開皇中に至って大興善寺と改められ、那連提耶舎や闍那幅多など、外国三藏を迎えて訳経道場となした。唐代に至り、不空のような大訳経家を置き、代宗の永泰元(七六五)年、ここに方等戒壇を建て、臨壇大徳十人を立てた。

不空・(七〇五―七七四)阿目佉跋折羅(Amoghavajra)、訳名は不空金剛。大広智三藏はその諡号。玄宗・肅宗・代宗の三代にわたり皇帝の厚い信任を得た。『金剛頂経』をはじめとする密教経典総計一一〇部一四三巻を訳したとされる。

【銀青光祿大夫】 文散官。銀青光祿大夫の品階は従三品。散官は実職を伴わないで単に品階の上下を示すに過ぎない官名をいう。

【御史大夫】 職事官。非違を檢察する御史台の長官。御史大夫の品階は従三品。

【上柱国】 勳官。上柱国の品階は正二品。もとは軍功の大なる者

に対し加えられる恩典。

【馮翊縣】 陝西省大荔県の治。

【開国公】 爵号。開国県公の品階は従二品。皇族や顕著な功勞のあつた高官に対し与えられる栄典。

【嚴郢】 字は叔敖。華州華陰の人。『唐書』卷一四五列伝第七〇に伝あり。

【彭王傳】 職事官。王府官、親王府の長官で、品階は従三品。

【会稽郡】 越州。浙江省会稽紹興県。徐浩は『唐書』卷一六〇列伝第八五の徐浩伝によると、代宗のとき工部侍郎、会稽県公を累遷して嶺南節度使となり、徳宗のはじめ、召せられて彭王傳を授かり、郡公に進んだとある。

【徐浩】 字は季海。越州の人。『唐書』卷一六〇列伝第八五に伝あり。

【至道】 至極の道。最善の道。『礼記』学記に「雖有嘉肴。弗食。不知其旨也。雖有至道。弗学。不知其善也。是故学然後知不足。教然後知困。知不足。然後能自反也知困。然後能自強也。故曰。教学相長也。兌命曰。学学半。其此之謂乎。」とある。

【燭知】 明らかに知る。適例未見。

【高印】 高仰。尊び仰ぎ見るさま。

【灌頂国師】 灌頂は頭に水を灌ぎかけること。もとインドの国王

の即位や立太子の時行なった儀式。四大海の水をもって頂にそそぎ、祝意を表した。

【女言】 奥深い言葉。

【徳祥】 さいわいのしるし。

【至尊】 天子、また天子の位をいう。『史記』書卷二十八・封禪書第六に「天子從禪還。坐明堂。群臣更上寿。於是制詔御史。朕以眇眇之身承至尊。兢兢焉懼不任。維徳菲薄。不明于礼楽。」とある。

II

【訓読】

大曆九年夏六月癸未、京師の大興善寺に於て滅度す。代宗は之れが為めに、朝を廢めること三日、司空を贈り、大弁正広智三蔵和尚を追諡す。茶毗の時、詔して中調者を遣し、祝文祖祭を齎らしめ、在るが如きの敬を申せしむ。睿詞は深切にして、嘉薦令芳、礼は群倫に冠たりて、挙げて与にも比ぶ無し。伊の年九月、詔して舍利を以て塔を旧居の寺院に起す。

【語釈】

【司空】 三公（太尉・司徒・司空）の一。正一品。唐代では全く名目だけとなり、まれに死後の贈官とされたに過ぎなかった。

【中調者】 『後漢書』本紀・卷八孝靈帝紀第八に「二年春。大疫。使常侍・中調者巡行致医薬。」とある。趙遷の『大唐故大徳贈司

【開右】 開き助ける。

【特進大鴻臚】 特進は文散官。正二品。大鴻臚は外国の賓客を接待することを掌る。

【臥内】 寢室。

【開府儀同三司】 文散官。品階は従一品。三司、すなわち三公と同じ礼遇を与えた。

【肅国公】 肅は甘肅省酒百水泉内。国公は爵号。品階は従一品。

空大弁正広智三蔵行状』によれば、「勅功徳使李元琮知喪事。」

とあり、また、『宋高僧伝』卷第一・不空伝にも同様に、「勅功徳使李元琮知護喪事。」（大正五〇・七一三C）とある。この「功徳使」のことか。李元琮については伝未詳。

【祝文】 神を祀る文。祭文。ここでは不空を祭る代宗の文。『後

得無祭。従之。』とある。

漢書』本紀・卷一上・光武帝紀第一に「六月己未。即皇帝位。

【睿詞】 天子の言葉。

燔燎告天。禋于六宗。望於群神。其祝文曰。皇天上帝。后土神

【深切】 ねんごろなさま。『漢書』志・卷二十七中之下・五行志

祇。眷顧降命。属秀黎元。為人父母。秀不敢当。』とある。

第七中之下に「其宿留告曉人。具備深切。雖人道相戒。何以過

【祖祭】 祖の祭祀に奉ずる。『南齊書』志・卷十志第二・礼下に

是。』とある。

「建元四年。高帝山陵。昭皇后心遷祔。祠部疑有祖祭及遣啓諸

【嘉薦令芳】 『漢書』志・卷二十二・礼樂志第二・安世房中歌に

奠九飯之儀不。左僕射王儉議。奠如大斂。賀循云。從墓之墓皆

「孔容之常。承帝之明。下民之衆。子孫保光。承順温良。受帝

設奠。如將葬廟朝之礼。范寧云。將窆而奠。雖不稱為祖。而不

之光。嘉薦令芳。寿考不忘。』とある。

III

【訓読】

和尚、性聡明にして、前仏の方法要指に博貫たり。緇門は独立し、邈かに盪盪として其れ双ぶ無し。稽うるに夫れ真言字義の憲度、灌頂升壇の軌迹、則時成仏の速、応声儲社の妙、天麗らかに且つ弥しく、地普く而して深し。固より末学の能く詳らかにする所に非るなり。敢えて概見を以て其の大婦を序ぶるに、昔、金剛薩埵は、親しく毗盧遮那仏の前にて、瑜伽最上の乘義を受け、後ち數百歳して、龍猛菩薩に伝う。龍猛、又た數百歳して龍智阿闍梨に伝う。龍智、金剛智阿闍梨に伝う。金剛智、東來して和尚に伝う。和尚、又た西のかた天竺・師子等の国に遊び、龍智阿闍梨に詣り、十八法会を揚擢し、法化相承く。毗盧遮那如来より和尚に賜すまで、凡そ六葉なり。毎に斎戒中を留め、善氣を道迎す。登礼して皆く答え、福応較然たり。温樹言わず、記す可き莫きのみ。

【語釈】

【天麗且弥云々】 『漢書』卷八十七下・揚雄伝に「揚子曰。愈。

若夫閑言崇議。幽微之塗。蓋難与覽者同也。昔人有觀象於天。

視度於地。察法於人者。天麗且弥。地普而深。昔人之辭。乃玉乃金。」とある。

【金剛薩埵】 ヴァジュラ・サットヴァ (Vajra-sattva) の訳。執金剛、金剛手の一形態。密教付法の第二祖とされ、法身大日如来の自内証の説法を結集してこれを龍猛菩薩に授けたと伝えられている。

【毗盧遮那仏】 マハーヴァイローチャナ (Mahāvairocana) の訳。大日如来。真言密教の教主である仏。

【瑜伽最上乘義】 最上乘は至極の教法をいう。『法華経』授記品に「諸菩薩智慧堅固。了達三界。求最上乘。」(大正九・二〇b) とある。則ちここでは瑜伽至極の教法の意義。密教根本經典のひとつ、金剛頂経のことか。

【龍猛菩薩】 龍樹の密教での名。

【龍智阿闍梨】 ナーガボーディ (Nāgabodhi) の訳。インド南部の人で密教付法の第四祖とされる。龍猛(龍樹)の弟子で南インドにおいて金剛智に法を付し、また師子国(セイロン島)で不空に法を伝えたという。

【金剛智阿闍梨】 (六七一?—七四一)密教付法の第五祖。(中国における初祖)。ヴァジュラボーディ (Vairabodhi) の訳。跋日羅菩提と音写する。唐の代宗から大弘教三藏と諡された。大乘・小乗・律などを学び、インド南部で龍智(龍樹の弟子)から密教を受けたと伝えられる。開元八年に洛陽に入り、その後、長安と洛陽との間を往来し、開元十一年以降、金剛頂瑜伽中略出

念誦経などの密教經典八部十一巻を訳した。『宋高僧伝』巻一。【十八会法】 金剛頂経には十八会十万余よりなる広本が存在したとされる。不空訳の金剛頂経(金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王経)はその十八会のうちの初会を訳したものである。

また、不空の訳出として、金剛頂経瑜伽十八会指帰がある。

【揚擡】 事例を挙げ引いて述べる。『莊子』巻八中・徐無鬼篇に「頡滑有実古今不代而不可以虧。則可不謂有大揚擡乎。闕不亦問是已。奚惑然為。以不惑解惑。復於不惑。是尚大不惑。」とある。

【道迎】 導迎。みちびきむかえいれる。『隋書』巻十三音楽上に「記曰。大夫無故不撤懸。士無故不撤琴瑟。聖人造樂。導迎和氣。惡情屏退。善心興起。」とある。

【登礼】 礼を致す。『漢書』卷六武帝紀に「翌日親登崇高。御史乘屬。在廟旁吏卒咸聞呼万歳者三。登礼罔不答。〔顔師古注〕言登礼於神。無不答庇。」とある。

【福応】 めでたいしるし。『漢書』卷二十二礼楽志に「其余巡狩福応之事。不序郊廟。故弗論。」とあり、『文選』班孟堅兩都賦・兩都賦序に「是以庶悅豫。是以福応尤盛。白麟赤鴈芝房宝鼎之歌。薦於郊廟。」とある。

【較然】 あきらかなさま。『史記』卷八十六刺客列伝に「自曹沫至荆軻五人。此其義或成或不成然其立意較然。不欺其志。名垂後世。豈安也哉。」とある。

【温樹不言】 『漢書』卷八十一孔光伝に「或問光。温室省中樹皆

何木也。光暎不応。更答以它語。其泄如是。」とある。温樹は温室樹、つまり宮中の樹木のこと、ここでは、むやみに知るこ

とを話さないことをいうものであろう。

IV

〔訓読〕

西域の隘巷に、狂象奔突せば、慈眼を以て之れを視、踵を旋さずして象伏して起きず。南海の半渡に、天吳鼓駭せば、定力を以て之れに對し、未だ晷を移さずして、海静まり浪無し。其の生るるや、母氏毫光照燭の瑞有り、其の歿するや、精舎池水竭涸の異有り。凡そ僧夏五十、享年七十なり。成童自り晩暮に至るまで、常に共具を飾りて道場に坐し、蘭を浴びて香を焚き、仏の知見に入る。五十余年、晨夜寒暑、未だ曾て須臾も傾揺懈倦の色あらず。人に過ぐるこ絶遠、乃ち是の如き者は、後学升堂して誦説し、法ある者一に非らず。而して沙門恵朗、次補の記を受け、伝灯の指を得。仏日を継明し、六を紹して七と為る。至れるかな。ああ法子、永に梁木を懷す。將に本行を紀さんとし、余に勸崇を託す。昔微言を承くるも、今凡詰を見るのみ。光容は沙漠として、壇宇は清愴たり。書を纂べ銘を昭すに、小子何ぞ攘らんや。銘に曰く。

〔語釈〕

【隘巷】 せまいちまた。『詩經』大雅・生民之什・生民に「不康禋祀。居然生子。誕實之隘巷。牛羊腓字之。」とある。

第一卷班孟堅・西都賦に「爾乃移師趨險。並蹈潛穢。窮虎奔突。狂兇触蹶。」とある。

【狂象】 『大唐故大德贈司空大弁正広智不空三藏行狀』他日王作調象戲。『(大正五〇・二九三a) 参照。

【半渡】 『史記』卷七項羽本紀に「漢吳教挑楚軍戰。楚軍不出。使人辱之。五六日。大司馬怒。渡兵汜水。士卒半渡。漢擊之。

【奔突】 疾走して突入する。勢いよく走ってつきあたる。『文選』

大破楚軍。尽得楚國貨賂。」とある。

【天呉】海神の名。水伯ともいう。『山海経』卷四・海外東経に

「朝陽之谷。神曰天呉。是為水伯。其為獸也。八首人面。八足八尾。皆青黃。」とある。『大唐故大德贈司空大弁正広智不空三藏行状』「初至訶陵国界。」(大正五〇・二九二c) 参照。

【鼓駭】鼓の音が震動響鳴すること。ここでは海の荒れることと解す。適例未見。

【毫光】光線が四射して毛のような状態をいう。『大唐故大德贈司空大弁正広智不空三藏行状』「初母康氏之未娠也。」(大正五〇・二九二b) 参照。

【成童】十五歳以上の少年をいう。『礼記』内則に「十年。出就外傳。居宿於外学書記。衣不帛襦請肄簡諒。十有三年。学楽誦詩。舞勺。成童。舞象。学射御。」とある。

【浴蘭】蘭を浮かべた湯に入る。『隋書』卷十四音楽中に「地始坼。虹始藏。服玄玉。居玄堂。沐蕙氣。浴蘭湯。匏器潔。水泉香。陟配彼。福無疆。君欣欣。此楽康。」とある。

【沙門惠朗】不空の弟子。不空の卒後、灌頂国師を承る。密教付法の第七祖。

V

〔訓読〕

嗚呼大士、我が三宗を右く。道は帝師為りて、秩は儀同と為る。昔広成在り、軒后風に順う。歳三千を逾えて、復た肅公あり。

【永壞梁木】梁(はり)の木が折れるの意。転じて聖人の亡くなることをいう。『礼記』檀弓上に「孔子蚤作。負手曳杖。消搖於門。歌曰。泰山其頽乎。梁木其壞乎。哲人其萎乎。既歌而入。当戸而坐。子貢聞之。曰。泰山其頽。則吾将安仰。梁木其壞。哲人其萎。則吾将安放。夫子殆将病也。遂趨而入。」とある。

【本行】道徳の根本となるおこない。

【勒崇】金石上に銘を刻み、尊崇を表示する。『漢書』卷八十七上揚雄伝に「伊年暮春。将瘞后土。礼靈祇。謁汾陰于東郊。二因茲以勒崇垂鴻。発祥隕祉。欽若神明者。盛哉鏤乎。越不可載已。」とある。

【几詰】ひじかけとつえ。老人を養うもの。

【光容】人の儀容に対する敬称。

【眇漠】はるかにかすかなさま。

【昭銘】きれいに銘に刻む。『文選』第五十六卷班孟堅封燕然山銘并序に「茲可謂一勞而久逸。暫費而永寧也。乃遂封山刊石。昭銘盛徳。其辞曰。」とある。

瑜伽の上乗、真語の密契。六葉授受し、伝灯相い継ぐ。

述ぶる者は之れを牒し、爛然として第あり。

陸に狂象を伏せしめ、水に天吳を息ましむ。慈心もて暴を制し、慧力もて愚を降す。寂然として感通し、其れ測る可けんや。

兩楹奠を夢み、双樹色を変ず。司空終を寵り、弁正徳を旌わす。

天使祖祭し、宸衷悽惻す。詔して宝塔を起たしむる、旧庭の隅に。

下には舍利を蔵し、上には浮屠を飾る。跡は生滅を殊にし、法は有無を離る。

石に刻みて偈を為り、之れを大都に伝う。

建中二年歲次辛酉十一月乙卯朔十五日己巳建つ

【語釈】

【広成】 広成子。黄帝に至道の精髓を教えた仙人。『莊子』卷四下外篇・在宥第十一に「黄帝立為天子十九年。令行天下。聞広成子在於空同之山。故往見之。曰。我聞吾子達於至道。敢問至道之精。吾欲取天地之精。以佐五穀。以養民人。吾又欲官陰陽。以遂群生。為之柰何。」とある。

【軒后】 軒轅氏。則ち黄帝のこと。

【爛然有第】 『後漢書』卷五十九張衡伝に「高祖踞洗。以對酈生。當此之會。乃鼙鳴而。故能同心戮力。勤恤人隱。奄受區夏。遂定帝位。皆謀臣之由也。故一介之策。各有攸建。子長謀之。爛然有第。」とある。

【兩楹夢奠】 兩楹は堂の上の東西にある二本の柱。『礼記』檀弓上に「夫子曰。賜。爾來何遲也。夏后氏殯於東階之上。則猶在阼也。殷人殯於兩楹之間。則与賓主夾之也。周人殯於西階之上。則猶賓之也。而丘也。殷人也。予疇昔之夜。夢坐奠於兩楹之間。夫明王不興。而天下其孰能宗予。予殆將死也。蓋寢疾七日而沒。」とある。

【旌徳】 徳をあらわす。

【宸衷】 天子の心のうち。

【悽惻】 徳に報いんことを思うさま。『文選』第十六卷・哀傷陸士衡歎逝賦并序に「諒多顔之感目。神何適而獲怡。尋平生於響

像。覽前物而懷之。步寒林以悽惻。翫春翹而有思。」とある。

(長谷川 慎)

大唐西京千福寺多寶佛塔感應碑文

〔釈文〕

大唐西京千福寺多寶佛塔感應碑文

南陽岑勛撰

朝議郎判尚書武部員外郎瑯邪顏真卿書

朝散大夫檢校尚書都官郎中東海徐浩題額／

粵妙法蓮華。諸佛之祕藏也。多寶佛塔。證經之踴現也。發明資乎十力。弘建在於四依。有禪師。法號楚金。姓程。廣平人也。祖父竝信著釋門。慶歸法胤。母高氏。久而無妊。夜夢／諸佛。覺而有娠。是生龍象之徵。無取熊羆之兆。誕彌厥月。炳然殊相。岐嶷絕於葷茹。髻鬣不爲童遊。道樹萌芽。聳豫章之楨幹。禪池映滄。涵巨海之波濤。年甫七歲。居然猷俗。自誓出家。禮藏探經。法華在手。宿命潛悟。如識金環。摠持不遺。若注瓶水。九歲落髮。住西京龍興寺。從僧錄也。進具之年。昇座講法。頓收瓊藏。異窮子之疾走。直詣寶山。無化／城而可息。尔後因靜夜持誦。至多寶塔品。身心泊然。如入禪定。忽見寶塔。宛在目前。釋迦分身。遍滿空界。行動聖現。業淨感深。悲生悟中。淚下如雨。遂布衣一食。不出戶庭。期／滿六年。誓建茲塔。既而許王瓘。及居士趙崇信女普慈善來稽首。咸捨珍財。禪師以爲。輯莊嚴之因。資爽塏之地。利見千福。默議於心。

時千福有懷忍禪師。忽於中夜見有一水。發源龍興。流注千福。清澄泛灑。中有方舟。又見寶塔自空而下。久之乃滅。即今建塔處也。寺內淨人。名法相。先於其地。復見燈光。遠望則明。近尋即滅。竊以水流開於法性。舟泛表於慈航。塔現兆於有成。燈明示於無盡。非至德精感。其孰能與於此。及禪師建言。雜然歡愜。負畚荷插。于囊于囊。登登憑憑。是板是築。灑以香水。隱以金錠。

我能竭誠。工乃用壯。禪師每夜。於築階所。懇志誦經。勵精行道。衆聞天樂。咸嗅異香。喜歎之音。聖凡相半。至天寶元載。創構材木。肇安相輪。禪師理會佛心。感通。帝夢。七月十三日。敕內侍趙思侃。求諸

寶坊。驗以所夢。入寺見塔。禮問禪師。聖夢有孚。法名惟肖。其日賜錢五十萬。絹千匹。助建修也。則知精一之

行。雖先。天而不違。純如之心。當後佛之授記。昔漢明永平之日。大化初流。我皇天寶之年。寶塔斯建。

同符千古。昭有烈光。於時道俗景附。檀施山積。庀徒度財。功百其倍矣。至二載。敕中使楊順景宣旨。

令禪師於花萼樓下。迎多寶塔額。遂摠僧事。備法儀。宸睠俯臨。額書下降。又賜絹百疋。聖札飛毫。動雲

龍之氣象。天文挂塔。駐日月之光輝。至四載。塔事將就。表請慶齋。歸功。帝力。時僧道四部。會逾萬人。有

五色雲。團輔塔頂。衆盡瞻覩。莫不崩悅。大哉觀佛之光。利用資于法王。禪師謂同學曰。鵬運滄溟。非雲羅之可頓。

心遊寂滅。豈愛網之能加。精進法門。菩薩以自强不息。本朝同行。復遂宿心。鑿井見泥。去水不遠。鑽木未熟。得火何

階。凡我七僧。聿懷一志。晝夜塔下。誦持法華。香煙不斷。經聲遞續。炯以爲常。沒身不替。

自三載每春秋二時。集同行大德四十九人。行法華三昧。尋奉恩旨。許爲恆式。前後道場。所感舍利。凡三千七十

粒。至六載。欲葬舍利。預嚴道場。又降一百八粒。畫普賢變。於筆鋒上。聯得一十九粒。莫不圓體自動。浮光粲然。禪

師無我觀身。了空求法。先刺血寫法華經一部。菩薩戒一卷。觀普賢行經一卷。乃取舍利三千粒。盛以石函。兼造自身石

影。跪而戴之。同置塔下。表至敬也。使夫舟遷夜壑。無變度門。劫筭墨塵。永垂貞範。又奉爲主上及蒼生。

寫妙法蓮華經一千部。金字三十六部。用鎮寶塔。又寫一千部。散施受持。靈應既多。具如本傳。

其載 敕内侍吳懷實。賜金銅香鑪。高一丈五尺。奉表陳謝。／手詔批云。師弘濟之願。感達人天。莊嚴之心。義成因

果。則法施財施。信所宜先也。 主上握至道之靈符。受如來之法印。非禪師大慧超悟。無以感於 宸衷。非／

主上至聖文明。無以鑒於誠願。倬彼寶塔。爲章梵宮。經始之功。眞僧是葺。克成之業。 聖王斯崇尔。其爲狀也。

則嶽聳蓮披。雲垂盖偃。下歛幅以踴地。上亭盈而媚空。中／掩掩其靜深。旁赫赫以弘敞。礪礪承陛。琅玕絳檻。玉瑣居

楹。銀黃拂戶。重簷疊於畫栱。反宇環其壁璫。坤靈鼻眞以負砌。天祇儼雅而翔戶。或復肩枷摯鳥。肘擲脩虵。冠盤巨／

龍。帽抱猛獸。勃如戰色。有爽其容。窮繪事之筆精。選朝英之僞贊。若乃開扇鏞。窺奧祕。二尊分座。疑對鷲山。千峽

發題。若觀龍藏。金碧晃晃。環珮葳蕤。至於列三乘分八部。聖／徒翕習。佛事森羅。方寸千名。盈尺萬象。大身現小。

廣座能卑。須彌之容。歛入芥子。寶盖之狀。頓覆三千。

昔衡嶽思大禪師。以法華三昧。傳悟天台智者。尔來寂寥。罕契眞要。法／不可以久廢。生我禪師。克嗣其業。繼明二祖。

相望百年。夫其法華之教也。開玄關於一念。照圓鏡於十方。指陰界爲妙門。駢塵勞爲法侶。聚沙能成佛道。合掌已入聖

流。三乘／教門。摠而歸一。八萬法藏。我爲最雄。譬猶滿月麗天。螢光列宿。山王映海。蟻垤羣峯。嗟乎三界之沈寐久

矣。佛以法華爲木鐸。惟我禪師。超然深悟。其兒也。嶽瀆之秀。冰雪之／姿。果脣貝齒。蓮日月面。望之厲。卽之溫。

觀相未言。而降伏之心。已過半矣。同行禪師。抱玉・飛錫。襲衡臺之祕躅。傳止觀之精義。或名高 帝選。或行密

衆師。共弘開示之／宗。盡契圓常之理。門人苾芻如巖・靈悟・淨眞・眞空・法濟等。以定慧爲文質。以戒忍爲剛柔。含

朴玉之光輝。等旃檀之圍繞。夫發行者因。因圓則福廣。起因者相。相遣則慧深。求／無爲於有爲。通解脫於文字。舉事

微理。含毫強名。偈曰／ 佛有妙法。比象蓮華。圓頓深入。眞淨無瑕。慧通法界。福利恆沙。直至寶所。俱乘大車。其一。於戲上土。發行正勳。

緬想寶塔。思弘勝因。圓階已就。層覆初陳。乃昭 帝夢。福應／天人。其二。輪奐斯崇。爲章淨域。眞僧草創。

聖主增飾。中座眈眈。飛簷翼翼。苻臻靈感。歸 我帝力。其三。念彼後學。心滯迷封。昏衢未曉。中道難逢。

常驚夜杙。還懼真龍。／不有禪伯。誰明大宗。其四。大海吞流。崇山納壤。教門稱頓。慈力能廣。功起聚沙。德成合掌。開佛知見。法爲無上。其五。情塵雖雜。性海無漏。定養聖胎。染生迷嚴。斷常起縛。空色同謬。／蒼匍現前。餘香何嗅。其六。彤彤法宇。繫我四依。事該理暢。玉粹金輝。慧鏡無垢。慈燈照微。空王可託。本願同歸。其七。／ 天寶十一載歲次壬辰四月乙丑朔廿二日戊戌建。
河南史華圖 救檢按塔使正議大夫行內侍趙思侃 判官內府丞車沖 檢按僧義方

I

〔訓読〕

大唐西京千福寺多宝佛塔感応碑文

南陽岑勛撰

朝議郎・判尚書武部員外郎・瑯邪顏真卿書

朝散大夫・檢校尚書都官郎中・東海徐浩題額

〔語釈〕

【多宝塔】『妙法蓮華經』見宝塔品第一に「仏前有七宝塔。高五百由旬。縦広二百五十由旬。従地踊出住在空中」（大正九・三二b）とあり、『法華經』が説かれるところに現れると言う塔。この碑文には、この『妙法蓮華經』をもとにしたと思われる記述が多数見られる。

【千福寺】長安城安定坊にある寺。もとは章懷太子李賢の宅であ

ったが、咸亨四年（六七三）に喜捨された。

【岑勛】詳細は不明。しかしながら、先行研究は岑参に「登千福寺楚金禪師法華院多宝塔」詩のあることをあげる。

【顏真卿】景龍三年（七〇九）貞元元年（七〇九）七八五）。開元二十二年の進士。唐代の書家として有名な人物である。この碑文は現存する顏真卿の作品のなかでもっとも古いものであり、現代で

も書道の手本とされている。

II

〔訓読〕

粵に妙法蓮華は、諸仏の秘蔵にして、多宝仏塔は、証經の踴現なり。発明は十力に資り、弘建は四依に在り。禪師有り。法号は楚金、姓は程、広平の人なり。祖・父は並びに信を積門に著し、慶を法胤に帰す。母の高氏、久くして妊むなし。夜に諸仏を夢みて、覚めて娠む有り。是れ龍象を生むの徴にして熊羆を取るの兆なること無し。誕に厥の月弥ちて、炳然として相を殊にす。岐嶷にして葷茹を絶ち、髻鬣にして童遊を為さず。道樹の萌芽、聳えること豫章の楨幹たりて、禪池の吠澮、涵うこと巨海の波涛なり。年甫めて七歳にして、居然として俗を厭い、自ら誓いて出家す。蔵を礼し經を探すに、法華手に在り。宿命の潜悟すること、金環を識るが如く、摠持して遺さざること、瓶水を注ぐが若し。

〔語釈〕

【証經之踴現】『妙法蓮華經』見宝塔品第一にある「其仏行菩薩道時、作大誓願。若我成仏。滅度之後。於十方国土。有說法華經処。我之塔廟為聽是經故。踴現其前。為作証明」(大正九・三二二c)という記述をふまえたもの。

【楚金】『宋高僧伝』卷二四(大正五〇・八六四c)に伝あり。

【取熊羆之兆】「熊羆」は①勇士②男子③貪欲で残忍な人物、の

喩えとして用いられるが、ここではいずれにも解しがたい。

【岐嶷】幼くして秀でていること。『後漢書』『馬援伝』に「客卿幼而岐嶷。年六歲能応接諸侯。」とある。

【如識金環】前世の記憶を有していることをいうか。『晋書』羊

祜伝に「祜年五歲、時令乳母取所弄金環。…主人驚曰、此吾亡

児所失物也。…時人異之、謂李氏子則祜之前身也。」とある。

III

〔訓読〕

九歳にして落髪して、西京の龍興寺に住し、僧録に従うなり。進具の年、昇座して法を講ず。頓に珎蔵を収むること、窮子の疾走して、直ちに宝山に詣り、化城に息む可きなきに異なる。尔後、静夜に因りて持誦して、多宝塔品に至る。身心泊然として、禪定に入るが如し。忽ち宝塔を見て、宛として目前に在り。釈迦の分身、遍く空界に満つ。行動むれば聖現れ、業浄ければ感深し。悲は悟中に生じて、涙下ること雨の如し。遂に布衣一食して、戸庭より出でず、満六年を期して、茲の塔を建てんことを誓う。既にして許王瓘、及び居士趙崇・信女普意・善来稽首して、感な珎財を捨つ。禪師以為らく、莊嚴の因を輯めて、爽塏の地に資らんと。千福を利見として、心に黙議す。

〔語釈〕

【進具年】 通常は具足戒を受ける二十歳を示すが、『宋高僧伝』は「十八通其義」とあり、あるいはこの時か？

【窮子之疾走】 窮子は法華経七喻の一で、三界生死の衆生を功德の法財なき窮子に喩える。（『妙法蓮華経』信解品第四）

【直詣宝山無化城而可息】 化城は法華経七喻の一で、大乘の悟りにいきなり到達するのが困難であるため、まず小乗の教えを説いたという喩え。（『妙法蓮華経』化城喩第七）

【釈迦分身遍滿空界】 『法華経』の教えを広めるために十人に分身した仏が一カ所に集まったという故事。『妙法蓮華経』見宝塔

品第一一にある「彼仏分身諸仏。在於十方世界説法。尽還集一処」（大正九・三二〇）という記述をふまえたもの。

【許王瓘】 高宗の子・許王素節の子。父の素節が武后によって誅せられたとき、幼を以って殺されなかった。中宗復位後、嗣王となる。『新唐書』卷八一列伝第六に記載あり。

【居士趙崇信女普意】 趙崇・普意は並びに伝未詳。

【善来】 「善来者」に師がその弟子を呼ぶ時の称という意味があり、ここでも楚金の弟子と取りたい。

IV

〔訓読〕

時に千福に懷忍禪師有り。忽ち中夜に、一水の龍興より発源して、流れて千福に注ぐ有り、清澄泛灑として、中に方舟有るを見る。又た、宝塔の空自りして下り、之れを久くして乃ち滅するを見る。即ち今の建塔の処なり。寺内の淨人、名は法相、先に其の地に於いて、復た燈光を見る。遠くに望めば則ち明るく、近くに尋ねれば即ち滅す。窃かに以えらく、水流は法性を開き、舟泛は慈航を表す。塔現れしは有成を兆し、燈明るきは無尽を示す。至徳の精感に非ずんば其れ孰か能く此に與らんやと。禪師の建言するに及んで、雜然として歛慚し、畚を負いて挿を荷い、囊に于いて囊に于いて、登登憑憑、是れ板是れ築。灑ぐに香水を以てし、隠すに金鎖を以てす。

〔語釈〕

【懷忍禪師】 伝未詳。『宋高僧伝』卷四に「唐京師千福寺懷忍伝」があるが、無関係であろう。

【法相】 伝未詳。淨人は比丘僧に給仕する俗人のこと。

【灑以香水】 香水は香または花を入れて仏にささげる水のこと。

この表現は『妙法蓮華経』信解品第四にある「覆以宝帳垂諸華旛。香水灑地散衆名華」(大正九・一六c)とあるのをふまえる。

【隠以金鎖】 未詳。

V

〔訓読〕

我れ能く誠を竭さは、工は乃ち壯を用いん。禪師毎夜に、築階の所に於いて、懇志して誦経し、勵精して行道す。衆天樂を聞きて、威な異香を嗅ぐ。喜歎の音、聖凡相い半ばなり。天宝元載(七四二)に至りて、創めて材木を構え、肇めて

相輪を安んず。禪師仏心を理會し、帝夢に感通す。七月十三日、内侍趙思侃に勅して、諸の宝坊を求めしめ、以て夢むる所を驗せしむ。寺に入りて塔を見、礼して禪師に問う。聖夢に孚有り。法名惟れ肖る。其の日錢五十万、絹千匹を賜いて、建修を助くるなり。則ち知る精一の行は、先天にして違わずと雖も、純如の心は、当に後仏の授記なるべし。昔漢明永平の日、大化初めて流れ、我が皇天寶の年、宝塔斯こに建つ。符を千古と同じくし、昭として烈光有り。時に道俗景附し、檀施山積す。徒を庀え財を度ること、功百にして其れ倍せん。

〔語釈〕

【天楽】 天より聞こえてくる音楽。『妙法蓮華經』妙音菩薩品第二四に「所經諸國六種震動。皆悉雨於七宝蓮華。百千天樂不鼓自鳴」(大正九・五五c)とある。

【異香】 何ともいえないよいにおい。『後漢書』賈琮伝に「旧交阯土多珍産。…異香・美木之属、莫不自出。」とある。

【至天宝物載創構材木】 『宋高僧伝』卷二四唐京師千福寺楚金伝、飛錫「楚金禪師碑」は「三十構多宝於千福。」とある。ただし、禪師の三十歳は七二七年、つまり開元十五年にあたるので、計算が合わない。

【相輪】 塔の上にある九重の輪。

【内侍趙思侃】 未詳なれど、碑文の最後に「勅檢校塔塔使正議大夫

行内侍趙思侃」とあり、多宝塔建設に深くかかわった人物であると思われる。

【聖夢有孚法名惟肖】 『宋高僧伝』卷二四及び飛錫「楚金禪師碑」は玄宗の見た夢について、「玄宗觀法名、下見金字。」とする。

【純如】 調和する。『論語』八佾に「始作翕如也。從之純如也。」とある。

【後仏授記】 「授記」は将来に必ず菩提の果を得ること。

【漢明永平日大化初流】 後漢明帝が金人を夢に見て仏教が初めて中国に伝わったという説。

【景附】 慕いなつくこと。『後漢書』袁紹伝に「凡我同盟、莫不景附。」とある。

VI

〔訓読〕

二載（七四三）に至りて、中使楊順景に勅して宣旨し、禪師をして花萼楼下に、多宝塔額を迎えしめ、遂に僧事を擡べ、法儀を備う。宸睭俯臨して、額書下降す。又た絹百疋を賜う。聖札毫を飛ばして、雲龍の氣象を動かし、天文塔に挂かりて、日月の光輝を駐む。四載（七四五）に至りて、塔事將に就らんとす。請を慶齋に表し、功を帝力に帰す。時の僧道四部、会するもの万人を逾え、五色の雲の、塔頂を団輔する有り。衆尽く瞻視して、崩悦せざるは莫し。大なるかな觀仏の光、利は用て法王を資せしむ。禪師同学に謂いて曰く、鵬は滄溟を運りて、雲羅の頓むべきにあらず。心は寂滅に遊びて、豈に愛網の能く加えんや。法門に精進し、菩薩自ら強いるに息まざるを以てす。本より同行と期りて、復た宿心を遂げん。井を鑿ちて泥を見れば、水を去ること遠からず。木を鑽りて未だ熱せざれば、火を得ること何ぞ階あらん。凡そ我が七僧、聿に一志を懷く。昼夜塔下に、法華を誦持し、香煙断たず、經声逡続し、炯らかに以て常と為し、身を没するまで替らざらんと。

〔語釈〕

【中使楊順景】 中使は内密の勅使で、主として宦官がつとめる。

楊順景は新旧『唐書』に記載なし。

【花萼楼】 玄宗が興慶宮に建てた楼の名。

【僧事】 授戒をはじめとする僧中の事務。

【聖札】 天子の書いた札のこと。ここでは玄宗が書いた「多宝塔」の額書をいう。

【觀仏之光、利用資于法王】 この部分の表現は、『易』觀の「觀國之光、利用資于王。」をふまえたものであろう。

【鵬運滄溟】 『莊子』逍遙遊の冒頭部分「北冥有魚、其名為鯢。

：化而為鳥、其名為鵬。：是鳥也、海運則將徙於南冥。」をふまえたもの。ここでは鵬、つまり楚金が俗世という「雲羅」に留まるものではないということをいう。

【鑿井見泥】 目的とするものが近くにゐること。『妙法蓮華經』

九・三二c)とある。

法師品に「譬如有人渴乏須水。於彼高原穿鑿求之。猶見乾土知水尚遠。施功不已。暫見濕土。遂漸至泥。其心決定知水必近」(大正

【鑽木】 木を擦って火をおこすこと。

VII

【訓読】

三載自り毎に春秋の二時、同行の大徳四十九人を集めて、法華三昧を行はず。尋いで恩旨を奉じて、許されて恒式を為す。前後に道場に感ずる所の舍利、凡そ三千七十粒なり。六載(七七七)に至りて、舍利を葬らんと欲し、預め道場を蔽するに、又た一百八粒を降す。普賢変を画くに、筆鋒上に於いて、聯いて一十九粒を得たり。円体自ら動き、光を浮べて鑿然とせざるは莫し。禪師無我にして身を觀じ、了空にして法を求む。先ず刺血して法華經一部、菩薩戒一卷、觀普賢行經一卷を写して、乃ち舍利三千粒を取る。盛るに石函を以てし、兼ねて自身の石影の、跪きて之れを戴くを造り、同に塔下に置く。至敬を表するなり。夫の舟をして夜壑に遷せしむるも、門を度るの変なく、却もて墨塵を箒え、永く貞範を垂る。又た主上及び蒼生の為に、妙法蓮華經一千部、金字三十六部を写して奉り、用て宝塔を鎮む。又た一千部を写して、施を散じて受持せしむ。靈心既に多く、具さに本伝の如し。

【語釈】

【恩旨】 天子のおぼしめし。ここでは以下に述べるように年二回

う。訳者は不明。

法華三昧を行することを玄宗が許したことをいう。

【觀普賢行經】 曇無蜜多訳「仏説觀普賢菩薩行法經」のこと。大

【菩薩戒】 現存する菩薩戒經とは卷数が違う。『出三藏記集』卷

正九・三八九にあり。

四にある「菩薩戒經一卷」(大正五五・二三a)のことであ

【金字】 金で書かれた經典。直前の妙法蓮華經一千部とは別に用

意されたものであろう。

VIII

〔訓読〕

其の載、内侍吳懷実に勅して、金銅の香鑪を賜う。高さ一丈五尺なり。表を奉りて陳謝す。手詔の批に云う。師の弘済の願、感は人天に達し、莊嚴の心、義は因果を成ず。則ち法施・財施、信に宜しく先んずべき所なりと。主上 至道の靈符を握り、如来の法印を受く。禪師の大慧超悟にあらざれば、以て宸衷を感ぜしむるなし。主上の至聖文明にあらざれば、以て誠願を鑒みるなし。倬かなる彼の宝塔、梵宮を為章す。經始の功、真僧是れ葺き、克成の業、聖主斯れ崇くするのみ。其の状為るや、則ち岳聳えて蓮披き、雲垂れて盖偃す。下は欵幅として以て地より踴り、上は亭盈として空に媚び、中は掩庵として其れ静深、旁は赫赫として以て弘敞なり。礪碱陛を承け、琅玕檻を綵らす。玉瑱 楹に居き、銀黄 戸を払う。重簷 画拱を疊ね、反宇 其の壁璫を環らす。坤靈 鼉負して以て砌を負い、天祇 儼雅して戸を翊る。或いは復た肩は摯鳥を枷し、肘は脩虵を環らし、冠は巨龍を盤らせ、帽は猛獸を抱く。勃如たる戦色、夷んに其の容有り。絵事の筆精を窮め、朝英の偲賛を選ぶ。若し乃ち肩鑄を開きて、奥秘を窺えば、二尊分座し、鷲山に對するかと疑い、千帙題を発けば、龍藏を觀るが若し。金碧晃晃として、環珮葳蕤たり。三乗を列して八部を分かつに至りて、聖徒翕習し、仏事は森羅す。方寸に千名、盈尺に万象、大身小に現じ、広座能く卑し。須弥の容、欬ち芥子に入り、宝盖の状、頓かに三千を覆う。

〔語釈〕

【内侍吳懷実】 吳懷実は『旧唐書』卷二〇〇上高尚伝に名のみが

ある。「(李) 齊物寓書於中官將軍吳懷実。」

【俚彼宝塔、為章梵宮】梵宮とは梵天の宮殿。『妙法蓮華經』化城品に「又其国界諸天宮殿。乃至梵宮」（大正九・二三a）とあるもの。この部分は『詩經』大雅・棫樸の「俚彼雲漢。為章于天。」をふまえたもの。

【琅玕】玉に似た石。『尚書』禹貢に「厥貢惟球琳琅玕。」とあり、伝に「琅玕。石而似玉。」とある。

【壁璫】壁でつくった椽頭のかざり。司馬相如「上林賦」に「華襃壁璫。犛道纒屬。」とある。

【犛鳥】猛鳥。鷲鳥に同じ。

【脩虵】大蛇。修蛇に同じ。

【勃如戰色】『論語』郷党の「上如揖、下如授、勃如戰色。」をふまえた表現。

【朝英】朝廷の俊英たち。

【開扇鑰窺奧秘】扇鑰は鍵のかかっている状態。それを開けて奥の方をみること。

【二尊分座】『妙法蓮華經』見宝塔品には「其塔中……見二如来在七宝塔中師子座上結跏趺坐、各作是念」（大正九・三三c）と描写される。

【龍藏】竜宮にあった經典。

【須弥之容欵入芥子】『維摩經』不思議品にある「若菩薩住是解脱者。以須弥之高广内芥子中」（大正一四・五四六b）という表現をふまえたものであろう。

【宝盖之状頓覆三千】『維摩經』仏国品にある「仏之威神令諸宝盖合成一盖。遍覆三千大世界」（大正一四・五三七b）という表現をふまえたものであろう。

IX

〔訓読〕

昔衡岳の思大禪師、法華三昧を以て、悟を天台の智者に伝う。爾来寂寥として、真要に契うこと罕なり。法は以て久しく廃すべからず。我が禪師を生みて、克く其の業を嗣がしめ、明を二祖より継ぐに、相い望むこと百年なり。夫れ其の法華の教たるや、玄関を一念に開き、円鏡に十方を照らす。陰界を指して妙門と為し、塵勞を駈りて法侶と為す。聚沙能く仏道を成じ、合掌して已に聖流に入る。三乗の教門、摠べて一に帰し、八万の法藏、我が最雄為り。譬えば満月天に麗れるに、螢光列宿し、山王海に映ぜるに、蟻垤群峰あるが猶し。嗟乎、三界の沈寐すること久し。仏法華を以て木

鐸と為す。惟だ我が禪師、超然として深悟す。其の兒たるや、岳瀆の秀、氷雪の姿。果屑貝齒、蓮目月面。之れを望めば厲、之れに即けば温。相を觀未だ言わざるに、降伏の心、已に半を過ぐ。同行の禪師、抱玉・飛錫、衡台の秘躄を襲ぎ、止觀の精義を伝う。或いは名 帝選に高く、或いは行 衆師より密し。共に開示の宗を弘め、尽く円常の理に契う。門人苾芻の如巖・靈悟・淨真・真空・法濟等、定慧を以て文質と為し、戒忍を以て剛柔と為す。朴玉の光輝を含み、旃檀の围绕に等し。夫れ行を發する者は因。因円なれば則ち福広し。因を起こす者は相。相遣れば則ち慧深し。無為を有為に求め、解脱を文字に通ず。事を挙げて理を徵め、毫を含みて名を強んにす。偈に曰く、

〔語釈〕

【衡岳思大禪師】 慧思(五一五〜五七七)のこと。中国天台宗第二祖とされる人物。

【天台智者】 智顛(五三八〜五九七)のこと。中国天台宗第三祖とされる人物。

【開玄関於一念】 玄関は法蔵をたとえたもの。『唐代釈教文選訳注』二六四頁参照。

【照円鏡於十方】 円とは円満、円融であり、また円教に「大乘窮極の実教」の意味があることから、ここにいう円鏡は法華経を指すと考えられる。

【陰界】 世の中のこと。王維「胡居士臥病遺米因」詩に「色声何謂客。陰界復誰守」

【塵勞】 煩惱の異名。ここでは、煩惱を持つ衆生をいうと思われる。

【聚沙能成仏道】 この部分は、『妙法蓮華経』方便品にある「乃

至童子戯。聚沙為仏塔。如是諸人等。皆已成仏道」(大正九・八c)という表現に基づくものである。

【八万法蔵】 正確には八万四千の法蔵。衆生にある八万四千の煩惱を取り去るために仏が説いた八万四千の教え。『妙法蓮華経』見宝塔品に「若持八万四千法蔵十二部経。為人演説」(大正九・三四b)とある。

【譬猶滿月麗天。螢光列宿。山王映海。蟻垤群峰。】 出典未詳。上二句は易に典拠があり、下二句は維摩経の言葉か。

【三界之沈寐久】 三界は欲界・色界・無色界のこと。この部分は、『妙法蓮華経』譬喩品にある「三界無安。猶如火宅。衆苦充滿」(大正九・一四c)という表現を承けたものであろう。

【仏以法華為木鐸】 『論語』八佾にある「天下之無道也久矣、天將以夫子為木鐸。」をふまえた表現。

【果屑貝齒蓮目月面】 聖人の相を表現したものだと思われるが、

仏の三十二相と一致するのは貝齒と齒白齊密相くらいである。

【抱玉・飛錫】抱玉は『宋高僧伝』巻一九に「唐京兆抱玉伝」として立伝される人物である。なお、この抱玉伝の中には楚金は登場しない。また、飛錫は「楚金禪師碑」の撰者。

【衡台之秘躅】衡・台は前出の慧思および智顛のこと。ここでは多宝塔の建立者である楚金が、この二者の後継者たることをのべたものである。

【共弘開示之宗。尽契円常之理。】開示の宗とは法華経のことであり。『妙法蓮華経』方便品に「我有方便力。開示三乘法。一切諸世尊。皆説一乘道」(大正九・八b)とある。また、円常の円は前出の円満、円融であり、常は常住(法には生滅変遷がな

X

〔訓読〕

仏に妙法有り、蓮華に比象す。円頓深入し、真浄瑕なし。慧法界に通じ、福恒沙に利す。直ちに宝所に至りて、俱に大車に乗る。其一。

於戲上士、行を発すること正勤。細かに宝塔を想い、勝因を弘めんことを思う。円階已に就き、層覆初めて陳ぶ。乃ち帝夢に昭かにして、福は天人に応ず。其二。

輪奐斯れ崇く、為に淨域を章す。真僧草創し、聖主飾を増す。中座耽耽として、飛簷翼翼たり。荐りに靈感を臻め、我が帝力に帰せしむ。其三。

彼の後学を念うに、心迷封に滞る。昏衢未だ曉けず。中道逢い難し。常に夜机に驚き、還た真龍を懼る。禅伯有らざれ

いこと)の意か。

【如巖・靈悟・浄真・真空・法濟等。】ここに挙げられる楚金の弟子たちの名は『宋高僧伝』巻二四所収の楚金伝に挙げられる弟子の名(慧空・法岸・浩然)とは一致しない。

【発行者因。因円則福広。起因者相。相遣則慧深。】ここで言われる因とは、大乘因のこと。『観普賢菩薩行法経』に「汝今应当観大乘因。大乘因者諸法実相。聞是語已。」(大正九・三九二b)とある。また福と慧は、それぞれ福德と智慧のこと。『妙法蓮華経』方便品に「見六道衆生。貧窮無福慧」(大正九・九b)とある。

ば、誰れか大宗を明らかにせん。其四。

大海流を呑み、崇山壤を納る。教門頓と称して、慈力能く広し。功聚沙に起り、徳合掌と成る。仏知見を開き、法を無上と為す。其五。

情塵雜ると雖も、性海無漏なり。定聖胎を養い、染迷叢を生ず。断常縛を起し、空色同に謬る。蒼匐現前して、余香何をか嗅がん。其六。

形形たる法宇、繫我が四依。事該わり理暢べ、玉粹にして金輝く。慧鏡垢無く、慈燈微を照らす。空王託す可く、本願同に帰せん。其七。

天宝十一載歲次壬辰四月乙丑朔廿二日戊戌建つ。勅檢校塔使・正議大夫・行内侍趙思侃。判官・内府丞車沖。檢校僧義方。河南の史華刻す。

【語釈】

【正勤】 四正勤のこと。三十七科の道品中、四念処に次いで修行する。『大智度論』に「破邪法正道中行故名正勤」(大正二五・一九八b)とある。

【層覆】 高樓の屋頂をいう。何晏の「景福殿賦」に「爾乃豊層覆之眈眈。建高基之堂堂。」とある。

【輪奐】 建築物の壮大美麗なさま。王巾の「頭陀寺碑文」に「丹刻羣飛。輪奐離立。」とある。

【功起聚沙、徳成合掌】 「聚沙能成仏道」の語注参照。

【開仏知見】 仏知見は諸法実相の理を了知照見する仏の智慧。

『妙法蓮華経』方便品に「諸仏世尊。欲令衆生開仏知見使得清

浄」(大正九・七a)とある。

【情塵】 六情(眼・耳・鼻・舌・身・意)と六塵(色・声・香・味・触・法)。『大智度論』に「情塵識和合。所作事業成」(大正二五・二三〇c)とある。

【性海無漏】 性海は如来法身の境であり、無漏は煩惱を離れた境地。『妙法蓮華経』方便品に「是徳藏菩薩。於無漏実相。心已得通達」(大正九・五a)とある。

【染生迷叢】 染とは染愛のことか。染愛は、情欲の境に浸染し、愛着すること。

【蒼匐】 梵語 Campaka の音訳。金色花樹。

【四依】 人四依の一。大乘の菩薩でありながら、法を伝えて人を化す者があり、ここでは楚金のことを指している。

し間違いであろう。

【内府丞車沖】 新旧『唐書』に記載なし。

【四月乙丑朔】 天宝十一載四月は丁丑が朔である。おそらくは写

(福井 敏)

唐國師千福寺多寶塔院故法華楚金禪師碑

〔釋文〕

唐國師千福寺多寶塔院故法華楚金禪師碑／紫閣山草堂寺沙門飛錫撰／正議大夫行中書舍人翰林學士柱國東海男賜紫金魚袋吳通微書／

潭碧千丈。無隱月容。松青萬嶺。莫靜風響。夫德充于内而聲聞于天者。有以見之於禪師矣。禪師法諱楚金。程氏之子。本廣平郡。今爲京兆之盤／厓人焉。祖宗闕閔。存而不論。母渤海高氏。夜夢諸佛。是生禪師。眞可謂法王之子者也。行素顏玉。神和氣清。七歲諷花經。十八講花義。三十構多／寶於千福。四十入 帝夢於九重。上觀法名。下見金字。詰朝使問。罔不有孚。聲沸江海。豈惟京轂。於是傾玉帛。引金繩。千梁攢空。一塔聳漢。／迴廊飛閣。無不創焉。風起而鈴鳴半天。珠懸而月生絕頂。清淨眼耳。駿奔香花。度如恆沙。而無所度者有之矣。嘗於翠微悟眞。捫蘿靈趾。乃曰。此／吾棲遁之所。遂奏兩寺。各建一塔。咸以多寶爲名。度緇衣在白雲。昭其靜也。矧夫心洞琉璃。思出常境。工人杼匠。僉訝生知。毘首所未悟。班輸所／愕視。若然。則浮圖之化。髻珠之教。風靡千界。皆禪師之力。豈止眞丹五天而已哉。禪師雲雷發空谷之響。金石吐鏗鏘之音。吟詠妙經。六千餘遍。／寶樹之下。髣髴見於分身。靈山之上。依稀覩於

三變。心無所得。舌流甘露。瑞鳥金碧。棲于手中。天樂清冷。奏于空際。凡諸休應。皆不有之。

乃曰。法／本無名。焉用彼相。長而不宰。其在茲焉。若非法花三昧。稟自衡陽。止觀一門。傳乎台嶺。安能迂象王之法駕。迴（十三字空格）／聖主之宸睞。承明三入。弘道六宮。

后妃長跪於

御筵。

天花每散而不著。（二十二字

空格）／玄宗題額。

肅宗賜幡。鵲返雲中。住香樓而不下。龍蟠天上。挂金刹而常飛。玉衣盈箱。璽書滿篋。寫千

經滴瀝而垂露。答

／萬乘渙汗之渥澤。夔龍貂冕。下

黃道以整襟。隱逸高僧。入青蓮而扣寂。微塵知識。

如從百城而至。無邊勝土。若自千花而來。豈榮冠於一／時。亦庶幾於佛在也。雖林茂鳥歸。人高物向。澄淳天地之境。委曲虛空之姿。無來乃來。不往而往。所作已訖。吾將去乎。有夢綵座前迎。諸天獻菓。／粵以乾元二年七月七日子時。右脇薪盡火滅。雪顏如在。昭乎上生於安養之國矣。享齡六十二。法臘三十七。（十三字空格）／天子憫焉。中使弔焉。尋敕驃騎大將軍朱光暉監護。卽以其年八月十二日。法葬于長安城西龍首原法華蘭若塔之禮也。

於戲禪師韶年／詔度。初配龍興。中歲觀心。閉關千福。罷玉柄。葆天光。悟炎宅清涼。駕一乘獨運。乃夢塔從地涌。因用模焉。今之所製。抑有由矣。至若神光燿耀於／其顛。聖燈明滅於其下。畫普賢則舍利飛筆。會羣釋乃卿雲澹空。頂中之血。刺寫經王。衣裏之珠。指呈醉土。當其無。不立心境。同乎大通。／彼五色之相宣。我摩尼之何有。豁如也。縑纈皮革。多由損生。屬徒衣布。寒加艾納。慈至也。若乃降龍之鉢。解虎之杖。蓮花之衣。甘露之飯。凡諸法／物。率多 救賜。不住於相。威將施焉。室不貯於金錢。堂每流乎香積。澹然閑住。爲 天人師。允所謂利見於大雄。釋門之亞聖者也。

又曰。／吾自知終於六十有二矣。爾曹誌之。以其言。驗其實。宛如也。噫。八部增怛。萬國同哀。有 詔令茶毘。遵天竺故事。於是金棺閉。香木燒。玉兔馴。／白鶴唳。霧咽松檟。風悽郊垌。月飛青天。無照玄夜。法花弟子當院比丘慧空法岸浩然等。表妹萬善寺上座契元萬善寺建多寶塔比丘尼／正覺資敬寺建法華塔比丘尼奔吒利等。眞白凡數萬人。悲化城之不住。痛寶所而長住。貝葉翻手。孰指宗通。金磬發林。誰宣了義。以予分座／御榻。同習天台。爰託斯文。鏤之貞石。

式揚眞古。敢不銘云。／

天上雲飄。海中日出。如何落照。大明奄失。蓮花之外。別有蓮花。寥廓之表。又逢寥廓。法離去來。道無今昨。松門一塔兮誰爲寂寞。寂而常照。死而／不亡。其響彌高兮其德彌彰。白鶴雙雙。飛香郁郁。明月既出。更無星宿。／

建塔國師奉 救追諡號記。 以貞元十三年四月十三日。左街功德使開府邪國公竇文場奏。千福寺先師楚金是臣和尙。

於天寶初爲／國建多寶塔置法華道場。經今六十餘祀。僧等六時禮念。經聲不斷。以歷 四朝。未蒙旌德。伏乞

聖慈特加諡號以廣前修。奉／勅宜賜諡曰大圓禪師。中書門下准 勅施行者。今合院梵侶。敬承 恩旨。頂奉修

持。用資 皇壽。將恐代隔時遷。眞縱靡固。輒刊／碑末以紀芳猷。遠追鸞嶺之風。聿光不朽之跡。／貞元廿一年。歲

在乙酉。七月戊辰朔廿五日壬辰建。 廣平宋液摸刻／

I

〔訓読〕

唐国師千福寺多宝塔院故法華楚金禪師碑。紫閣山草堂寺沙門飛錫撰。正議大夫行中書舍人翰林學士柱国東海男賜紫金魚袋吳通微書。

〔語釈〕

【紫閣山草堂寺沙門飛錫】 『宋高僧伝』（卷三）大唐千福寺飛錫伝

「釈飛錫、未知何許人也。神氣高邈、識量過人。初学律儀、後於天台法門一心三觀、与沙門楚金棲心研習。天寶初遊于京闕、

多止終南山紫閣峯草堂寺」（大正五〇・七二一c）。また飛錫の著に『念佛三昧宝王論』三卷がある。

【正議大夫行中書舍人翰林學士柱国東海男賜紫金魚袋吳通微】

正議大夫（文散官、正四品上）中書舍人（正五品上）柱国（勳官、正二品）。『旧唐書』（卷一九〇下）文苑伝下・附吳通微玄伝

「通微、建中四年自寿安県令入為金部員外、召充翰林學士、尋改職方郎中、知制誥。与弟通玄同職禁署、人士榮之。七年、改

礼部郎中、尋転中書舍人。『唐尚書省郎官石柱題名考』(卷一六)
「重修承旨學士壁記、吳通微、建中四年自金部郎中充累遷中書

舍人、賜紫金魚袋、卒官。」

II

【訓読】

潭碧千丈、月容を隠す無く、松青万嶺、風響を静むる莫し。夫れ徳内に充ちて声天に聞ゆるは、以て之を禪師に見る有り。禪師法諱は楚金、程氏の子、本広平郡、今京兆整屋の人為り。祖宗の閥閥は、存して論ぜず。母は渤海の高氏、夜諸仏を夢み、是に禪師を生む。真に法王の子と謂ふべきなり。行は素にして顔は玉のごとく、神は和にして気は清たり。七歳にして花経を諷し。十八にして花義を講じ、三十にして多宝を千福に構し、四十にして帝夢に九重に入る。上法名を觀るに、下に金字を見る。詰朝使問ふに、孚有らざるは罔し。声江海に沸き、豈に惟だ京轂のみならんや。是に於て玉帛を傾け、金繩を引き、千梁空を攢ち、一塔漢に聳え、迴廊飛閣、創せざるは無し。風起りて鈴半天に鳴り、珠懸りて月絶頂に生じ、眼耳を清浄にし、香花を駿奔す。度るに恒沙の如く、度る所無き者之有り。嘗て翠微悟真に於て、蘿を靈趾に捫る。

【語釈】

【潭碧千丈四句】類似の内容が『摩訶止観』卷一上に「如月隱重

山、拳扇類之、風息太虚、動樹訓」(大正四六・三b)と見え
る。

【程氏之子】『新唐書』(卷七五下)宰相世系表五下「程氏出自風
姓。……裔孫封於程、是謂程伯。雒陽有上程聚、即其地也。……

程氏世居長安」

【広平郡】河北省。

【京兆之整屋】陝西省整屋県。

【閥閥】功績、経歴。『論衡』謝矩篇「史上功曰伐閥」、『史記』
(卷一八)功臣侯表「古者人臣功有五品、……明其等曰伐、積

日曰閑」

詰朝將見」杜預注「詰朝、平旦」

【渤海高氏】『新唐書』（卷七二下）宰相世系表一下「高氏出自姜姓。齊太公六世孫文公赤，生公子高、孫倭，為齊上卿，与管仲合諸侯有功……（量）十世孫洪，後漢渤海太守，因居渤海脩県」

【金繩】策書をしぼる金製の繩。『後漢書』方術伝序「然神絰怪牒、玉策金繩、関局於明靈之府、封牒於瑤壇之上者、靡得而闕也」

【詰朝】早朝。『春秋左氏伝』僖公二八年「戒爾車乘、敬爾君事、」

【翠微悟真】翠微院、悟真寺の意か。

III

【訓読】

乃ち曰く、此れ吾が棲遁の所なりと。遂に兩寺に奏し、各々一塔を建て、咸多宝を以て名と為す。縮衣を度するは白雲に在り。其の静なるを昭にするなり。矧んや夫れ心琉璃より洞にして、思常境より出づるをや。工人杼匠、僉生れながら知るかと訝る。毘首も未だ悟らざる所、班輪も愕き視る所。若し然らば、則ち浮図の化、髻珠の教の、千界に風靡せるは、皆禪師の力、豈に止だ真丹五天のみならんや。禪師は雲雷空谷の響を発し、金石鏗鏘の音を吐く。妙経を吟詠すること、六千余遍、宝樹の下、髣髴として分身を見はし、靈山の上、依稀として三変を覩す。心に所得無く、舌甘露を流す。瑞鳥金碧、手中に棲み、天楽清冷、空際に奏す。凡そ諸の休応は、皆之れ有らざらんや。

【語釈】

【白雲】『趙州録』上に「問、白雲自在時如何、師云、争似春風处处閑」とある。

【班輪】春秋魯国の巧匠。公輸班。一説に班は魯班を指し、輪は公輸班を指すとす。『漢書』（卷一〇〇上）鼓伝上「逢蒙絶技於弧矢、班輪羯巧於斧斤」

【毘首】毘首羯磨の略。帝釈の臣で工巧なる者。また、建築を司る。『智度論』卷四「巧變化師、毘首羯磨天」（大正二五・八八

【髻珠】髻珠喻。如来が『法華経』を説いてすべての権教を開会して一乘の実教を顯し、二乗も必ず仏になれるとの証明を与え

a)

ることを、転輪聖王が髻にかくれて見えなかった珠を解いて功臣に与えるのに喩えたもの。『法華経』安樂行品（大正九・三八c）三九a)

【真丹】 震旦。古代インドで中国を指した呼称。

【五天】 五天竺（東西南北中の五方の天竺）。

【宝樹之下、髣髴見於分身】 『法華経』見宝塔品「諸仏各各、詣宝樹之下、如清淨池、蓮華莊嚴。其宝樹之下、諸師子座、仏坐

其上、光明嚴飾」（大正九・三三c）
 【三變】 三變土田（三變土淨）。釈迦如来が、『法華経』見宝塔品を説いた時、多宝塔を供養させるため十方分身の諸仏を集めようとして、三たび娑婆の穢土を變じて清淨の国土としたこと。
 【休応】 吉兆。『三國志』（卷二九）魏志・方技伝〔管輅伝〕「輅曰、……昔元凱之弼重華、宣惠慈和、周公之翼成王、坐而待旦。故能流光六合、万国咸寧。此乃履道休応、非卜筮之所明也」

IV

〔訓読〕

乃ち曰く、法は本より名無く、焉んぞ彼の相を用ひん。長じて宰せずとは、其れ茲れに在り、と。若し法花三昧、衡陽自り稟け、止観一門、台嶺に伝ふるに非ずんば、安んぞ能く象王の法駕を迂げ、聖主の宸睞を廻らさんや。承明三たび入り、道を六宮に弘む。后妃御筵に長跪し、天花毎に散れども著かず。玄宗額を題し、肅宗幡を賜ふ。鵠は雲中に返り、香楼に住んで下らず、龍は天上に蟠り、金刹に挂りて常に飛ぶ。玉衣箱に盈ち、璽書篋に満つ。千経滴瀝として露を垂らすを写し、万乗渙汗の渥沢に答ふ。夔龍貂冕は、黄道より下りて以て襟を整へ、隱逸高僧は、青蓮に入りて寂を扣く。微塵の知識は、百城従り至るが如く、無辺の勝士は、千花自り来るが若し。豈に榮の一時に冠して、亦た仏の在に庶幾からん。林茂れば鳥帰り、人高ければ物向ふと雖も、天地の境を澄淨し、虚空の姿を委曲す。来る無くして乃ち来り、往かずして往く。作す所已に訖り、吾將に去らんとす。綵座もて前に迎へ、諸天の菓を献ずるを夢みる有り。粵に乾元二年七月七日子時を以て、右脇す。薪尽き火滅すれども、雪顔在るが如し。昭乎として安養の国に上生す。享齡六十二。法臘三十七。天子憫み、中使弔ふ。尋で驃騎大將軍朱光暉に勅して監護せしむ。即ち其の年八月十二日を以て、法もて

長安城西龍首原法華蘭若に葬し之に塔す。礼なり。

【語釈】

【長而不宰】『老子』第一〇章「生之蓄之、生而不有、為而不恃、長而不宰、是謂玄德」

【法華三昧】法華經の真体を体得した境地。また、その境地を証得するための行法。

【象王】象中の王。仏に譬える。『涅槃經』(卷二三)菩薩品第十三「是大涅槃唯大象王能尽其底。大象王者、謂諸仏也」(大正一二・五〇二b)

【宸睭】宸眷。帝王の御恩寵。李嶠「奉和幸韋嗣立山莊侍宴扈制詩」「幽情遺絳冕、宸眷屬樵漁」(『全唐詩』卷六一)

【承明】古代の天子の左右の正殿。劉向『說苑』修文篇「承明繼体守文之君之寢、曰左右之路寢、謂之承明何。曰、承乎明堂之後者也」

【六宮】古代の皇后の宮殿。正寢一、燕寢五、合わせて六宮ある。『礼記』昏義「古者、天子后立六宮」鄭玄注「天子六寢、而六宮在後」

【天花每散而不著】『維摩經』觀衆生品に見える話。天女の撒いた花が菩薩の体に触れても付着せず、舍利弗には付着したのは、分別の有無によるといふ。

【香樓】寺廟中の樓閣。梁武帝「遊鐘山大愛敬寺詩」「長途弘翠微、香樓間紫煙」(『全梁詩』卷一)

【金利】幡をつるした塔柱。『法華經』授記品「諸仏滅後、起七宝塔、長表金利、華香伎樂」(大正九・二二a)

【万乗】万乗の兵車を領する君主、天子。または、国家。『韓非子』孤憤篇「万乗之患、大臣太重、千乗之患、左右太信、此人主之所公患也」

【渙汗】天子が詔勅や命令を出すこと。『易』渙「九五、渙汗其大号」

【渥沢】厚恩。厚い恵み。

【夔龍】舜の二臣。夔は楽官をなし、龍は諫官をなした。『書』舜典「伯拜稽首、讓于夔龍」

【貂冕】貂の尾の飾りのある冠冕。天子、貴臣が戴する。梁元帝「和劉尚書兼明堂齋宮詩」「貂冕交輝映、珩珮自相喧」(『全梁詩』卷二五)

【黃道】天子の遊歴時に歩く道。李白「上之回詩」「万乗出黃道、千騎揚彩虹」〔注〕蕭士贇曰、前漢天文志、日有中道。中道者、黃道也。日、君象、故天子所行之道亦曰黃道。

【青蓮】①仏寺②仏教③浄土と三通りの意味があるが、ここでは①の意。劉長卿「戲贈干越尼子歌」「亭亭独立青蓮下、忍草禪枝繞精舍」(『全唐詩』卷一五一)

【扣寂】陸機「文賦」に「課虛無以責有、扣寂寞而求音」(『文選』

卷一七)とあるが、ここでは、寂滅の境地に至る意か。

【微塵】 色体の極小なるものを極塵といい、これを七倍すると微塵という。

【百城】 唐・地婆訶羅訳『大方広仏華嚴経』入法界品(大正一〇・八七八a)に見える善財童子の故事。善財童子が弥勒菩薩の教えによって漸次南方において百余城を経由して、五十三善知識に参して法を問うを明かした。

【勝土】 持戒者の尊称。

【千花】 千葉の蓮華。一千枚の花弁を有する蓮華。仏を供養するのに用いる、また、仏の座する蓮華。

【林茂鳥帰】 『淮南子』説林訓「榛巢者処林茂、安也」

【澄渟】 水の清くして静かなさま。静清、平静にたとえる。『水経注』(卷二)河水二「又東注于泐沢、……其水澄渟、冬夏不滅」

【無来乃来、不往而往】 《参考》『莊子』養生主「適来夫子時也、適去夫子順也。安时而処順、哀樂不能入也。古者謂是帝之県解」、『莊子』知北遊「故曰、為道者日損、損之又損之、以至於无為、无為而无不為也」、『維摩経』弟子品「法無去来、常不住故」(大正一四・五四〇a)、『維摩経』文殊師利問疾品「善来文

殊師利、不来相而来、不見相而見」(大正一四・五四四b)

【綵座前迎、諸天献菓】 未詳。

【昭乎】 明らかさま。『呂覽』勿躬篇「昭乎若日之光」

【上生】 塵俗なるこの世を去って清浄なる極楽世界に行くことをいうか。

【安養之國】 極楽世界。須摩提の訳。謝靈運「廬山慧遠法師誄」
「安養有寄、閻浮無希、嗚呼哀哉」(『広弘明集』卷二三、大正五二・二六七b)

【中使】 天子の私使。宮中で任ぜられて差し向けられる使者。多くは宦官を指す。『後漢書』宦官伝「張讓」凡詔所徵求、皆令西園騶密約勅、号曰中使」、沈約「齊安陸昭王碑文」
「勉膳禁突、中使相望」(『文選』卷五九)

【驃騎大將軍朱光暉】 玄宗の時の宦官に朱光輝なる人物がいる(『旧唐書』卷一八四)も、驃騎大將軍の記載は見当たらず。未詳。

【監護】 觀察保護する。『漢書』(卷七一)疏広伝「太子外祖父特進平恩侯許伯以為太子少、白使其弟中郎將舜監護太子家」

V

【訓読】

ああ禪師は齠年詔度せらる。初め龍興に配せられ、中歳觀心し、千福に閉関す。玉柄を罷め、天光を葆し、炎宅の清涼

を悟り、一乗の独運に駕す。乃ち塔の地従り涌くを夢み、因りて用て模す。今の製する所、抑由有り。神光の其の顛に熠耀し、聖燈の其の下に明滅するが若きに至る。普賢を画けば則ち舍利筆を飛し、群釈を会めれば乃ち卿雲空に澹ふ。頂中の血もて、経王を刺写し、衣裏の珠もて、酔士を指呈す。其の無に当りて、其の用有り。不立の心境は、大通に同じくす。彼の五色の相宣ぶるは、我が摩尼の何ぞ有らん。豁如たるなり。縑纈皮革は、多く損生に由り、属徒の衣布は、寒に艾納を加ふ。慈の至れるなり。乃ち降龍の鉢、解虎の杖、蓮花の衣、甘露の飯の若き、凡そ諸法物は、率ね勅賜多し。相に住まらず、威将て施す。室に金銭を貯めず、堂に毎に香積を流す。澹然として閑住し、天人の師と為る。允に所謂大雄を見るに利あり、釈門の亜聖なる者なり。

〔語釈〕

【韶年】 童年。蔡邕「議郎胡公夫人哀讚」。「嚴考殞没、我在齒年、母氏鞠育、載衿載憐」(『蔡中郎文集』卷四)

【龍興】 寺名。「千福寺多宝塔感應碑文」。「有禪師、法号楚金、姓程、広平人也。……住西京龍興寺、從僧錄也」

【観心】 自己の心の本性を観する。天台が説く観法の一つ。

【閉関】 門を閉じて往来を絶つ。塵事と関わらない。顔延之「五君詠〔劉參軍〕」。「劉靈善閉関、懐情滅聞見」李善注「言道徳内充、情欲俱閉、既無外累、故聞見皆滅」(『文選』卷二二)

【玉柄】 玉で作った(飾った)柄。李白「遊昌禪師山池」二首之二「高僧払玉柄、童子猷双梨」王琦注「玉柄、謂塵尾」よって、「罷玉柄」とは、議論をやめる意か。

【葆天光】 内に光りをかくす。『莊子』齊物論「注焉而不満、酌焉而不竭、而不知其所由来、此之謂葆光」

【炎宅・一乗二句】 『法華経』譬喩品に見える〈火宅の喩〉(大正九・一二bc)、菓草喩品に見える〈三草二木の喩〉(大正九・一九ab)

【卿雲】 慶雲。彩雲で瑞祥とされた。瑞雲。『史記』(卷二七)天官書「若煙非煙、若雲非雲、郁郁紛紛、蕭索輪困、是謂卿雲」

【経王】 諸経中の王。法華経が他の諸経よりすぐれていること。『法華経』薬王菩薩本事品「以七宝満三千世界、供養於仏及大菩薩辟支仏阿羅漢、是人所得功徳、不如受持此法華経乃至一四句偈其福最多。宿王華、譬如一切川流江河諸水中、海為第一。此法華経亦復如是。於諸如来所説経中、最為深大」(大正九・五四a)、「又如帝釈於三十三天中王、此経亦復如是、諸経中王」(大正九・五四ab)

【衣裏之珠二句】 『法華経』五百弟子受記品に見える〈衣珠喩〉

(大正九・二九 a)

【大通】 大通智勝仏のこと。『法華経』化城喻品「乃往過去、無量無辺不可思議阿僧祇劫、爾時有仏、名大通智勝如来応供正遍知明行足善逝世間解無上土調御丈夫天人師仏世尊」(大正九・二二 a)

【彼五色之相宣二句】 『八十華嚴』(卷七八)「譬如帝青大摩尼宝、若有為此光明所触即同其色。菩薩摩訶薩菩提心宝、亦復如是、觀察諸法迴向善根、靡不即同菩提心色」(大正一〇・四三一 c)

【豁如】 明るくのびのびしている。物事にこだわらない。『漢書』(卷一)高帝紀上「高祖為人、……寬仁愛人、意豁如也」師古注「豁然開大貌」

【損生】 智によって無明が断たれ変易生死がなくなっていくこと

VI

〔訓読〕

又た曰く、吾自ら六十有二に終るを知る、爾曹之を誌せと。其の言を以て、其の实を験す。宛如たるなり。噫、八部恒を増し、万国哀を同じくす。詔令有り、茶毘して天竺の故事に遵はしむ。是に於て金棺閉じ、香木焼かれ、玉兔馴れ、白鶴喚き、霧は松檜に咽び、風は郊垌に悽しみ、月は青天に飛んで、玄夜を照らす無し。法花弟子当院比丘慧空・法岸・浩然等、表妹万善寺上座契元・万善寺建多宝塔比丘尼正覚・資敬寺建法華塔比丘尼奔吒利等、真白凡そ数万人、化城に住まらざるを悲しみ、宝所に長往するを痛む。貝葉翻手するも、孰か宗通を指さん。金磬林に発するも、誰か了義を宣べん。予の御榻に分座して、同に天台を習ふを以て、爰に斯の文を託さる。之を貞石に鏤し、式て真古を揚げんとす。

と。

【艾納】 香の名。一に松樹皮に生ずる緑の苔をいう。

【降龍之鉢】 降龍鉢。龍を調伏して鉢中に入らしむ。

【解虎之杖】 解虎錫。北齊の僧稠禪師、錫杖を以て兩虎の闘いを解く。

【蓮花之衣】 袈裟の異名。清淨無染の義に取る。

【甘露之飯】 甘露は阿密哩多。天人の所食。

【香積】 衆香世界の仏名。ここでは香を指すか。

【利見】 『易』乾「九二、見龍在田、利見大人」

【大雄】 『法華経』從地涌出品「善哉善哉、大雄世尊、諸衆生等、易可化度」(大正九・四〇 b)

敢て銘せざらんやと云ふ。

〔語釈〕

【宛如】宛然。おだやか、ものしずかなさま。『詩』魏風・葛履

「好人提提、宛然左辟、佩其象揅」

【玉兔馴、白鶴唳】〈参考〉「六祖能禪師碑銘并序」「金身永謝、

薪尽火滅、山崩川竭、鳥哭猿啼」(釈一五四)

【慧空・法岸・浩然】『宋高僧伝』(卷二四)「唐京師千福寺楚金

伝」「弟子慧空法岸浩然皆隨象王之子也」(大正五〇・八六四c)

【契元・正覚・奔吒利】未詳。

【宗通】宗旨に達すること。『楞伽經』卷三「仏告大慧、一切声

縁覚菩薩有二種通相、謂宗通及説通」(大正一六・四九九b)

【了義】王巾「頭陀寺碑文」に「息子了義、終焉遊集」(『文選』

卷五九)とある。

VII

〔訓読〕

天上に雲飄り、海中に日出づ。如何ぞ落照、大明奄失す。蓮花の外、別に蓮花有り。寥廓の表、又た寥廓に逢ふ。法は去來を離れ、道に今昨無し。松門一塔誰か寂寞を為さん。寂として常照し、死して亡びず。其の響は弥々高くして其の徳は弥々彰はる。白鶴双双、飛香郁郁。明月既に出て、更に星宿無し。

VIII

〔訓読〕

建塔国師奉勅追諡号記。貞元十三年四月十三日を以て、左街功德使開府邠国公竇文場奏す。千福寺先師楚金は是れ臣の和尚、天宝初に国の為に多宝塔を建て法華道場を置く。今を經ること六十余祀、僧等六時の礼に念じ、經声断えず、以

て四朝を歴れども、未だ旌徳を蒙らず。伏して乞ふ、聖慈もて特に諡号を加へて以て前修を広めんことを。奉勅あり宜しく諡を賜ひて大円禪師と曰ふべしと。中書門下准勅施行者、今合院梵侶、敬んで恩旨を承け、頂奉修持して、用て皇寿に資す。將に代隔たり時遷り、真縦固まる靡きを恐れんとす。輒ち碑末に刊して以て芳猷を紀し、遠く鸞嶺の風を追ひ、聿に不朽の跡を光かさんとす。貞元廿一年、歳は乙酉に在り、七月戊辰朔、廿五日壬辰建つ、広平の宋液摸刻す。

(今場正美)

麓山寺碑

〔釋文〕

夫天之道也。東仁而首。西義而成。故清泰所居。指於成事者已。地之德也。川浮而動。嶽鎮而安。故耆闍以居。取於安
 定者已。茲寺大抵。厥旨玄同。是以迴向度門。躔于郭右。仰止淨域。列乎巖嶺。寶堂岌業於太虛。道樹森梢於曾渚。
 無風而林壑肅穆。不用而相事澄明。化城未眞。梵天猶俗。名稱殆絶。地位嘗高者。不其盛歟。
 麓山寺者。晉太始四年之所立也。有若法崇禪師者。振錫江左。除結澗陰。嘗與炎漢太宗。長沙清廟。棟宇接近。雲霧晦
 冥。困豹文狸。女蘿薜帶。山祇見於法眼。寶后依於佛光。至諸舊居。特爲新寺。禪師泊翠。弘聚謀。介衆表之。明詔
 行矣。水臬有制。丘墟盡平。太康二載。有若法導禪師。莫知何許人也。默受智印。深入證源。不壞外緣而見心本。無作
 眞性而注福河。大起前功。重啓靈應。神僧銀色。化身丈餘。指定全模。標建方面。法物增備。檀供益崇。廣以凌雲之
 臺。疏以布金之地。

有若法愍禪師者。江夏人也。空慧雙銓。寂用同轡。慈目相視。淨心相續。綜覈萬法。安住一歸。注大道經。究上乘理。

永託茲嶺。克終厥生。逮宋元徽中。尚書令湘州刺史王公諱僧虔。右軍之孫也。信尚敬田。作爲塔廟。追存寶相。加名寶山。矧乎弓冶筆精。陶甄意匠。留書藏石。緘妙俟時。候法宇之傾低。期珍價以興葺。遠慮將久。遺事未彰。梁天監三年。刺史夏侯公諱祥。了義重玄。別構正殿。紹泰二年。刺史王公諱琳。律師法賢。或在家出家。或聞見眼見。建涅槃像。開甘露門。長沙內史蕭沈。振起法鼓。弘演梵言。繼捷槌於景鍾。納貝葉於曾闕。陳司空吳明徹。隨侍中鎮南晉安王。樂陽王。竝佛性森然。國楨秀者。壯迴廊以雲構。蔚愁居以天覆。

開皇九年。天臺大禪師。守護法身。清悲海。巖幢擗聳。智火融明。襲如來堂。坐法華定。四行樂而不取。三賢登而更遷。有若曇捷法師者。伐林及樹。染法與衣。不墜一滴之油。有雷大根之雨。摠管大將軍齊郡公權公諱武。福德莊巖。喜慧方便。疏寫四部。鎮重百城。有若智謙法師者。願廣於天。心細於氣。誦習山頂。創立花臺。有若摩訶衍禪師者。五力圓常。四無清淨。以因因而入果果。以滅滅而會如如。有若首楞法師者。文史早通。道釋後得。遠涉吳會。幽尋天台。法界圖於剡中。真訣論於湘上。具究竟戒。數解脫筵。一法開無量之門。一音警無邊之衆。方等有以復悔。雙林有以追遠。竝建場所。互爲住持。

惟□禪師者。迹其武。憑其高。超乎雲門。絕彼塵網。深以爲。性有習。道有因。止於心。反於照。習也者。坐乎樹。居乎山。因也者。固習而無因。則不住。因而無習。則不證。是浮漚和正。覺阿若冥搜。想息而精進甲堅。受除而煩惱穀散。百川到海。同味於鹹。千葉在蓮。比色於淨。起定不離於平等。發慧但及於慈悲。故能闡者順其風。觀者操其道。牧伯萃止。皇華洊臻。啓焚香之上緣。託成佛之嘉願。上座惠臬。寺主惠寬。都維那興哲等。皆靜慮演成。妙輪轉次。因差別而非法。隨品類而得根。去二見而入流。率一心而辦事。咸以形勝之會。如彼脩行之迹。如此而豐碑未勒。盛業不書。安可默而已哉。將何以發揮頌聲。披揚宿志者也。

司馬西河竇公名彥澄。碩德高闡。紹賢遠識。器守嶽厚。檢操冰清。屬以師長闕官。攝行隨手。以家而形於孝友。以己而廣於詩書。以重而雅俗自興。以明而至道不若。且猶歸心淨土。讓範佛乘。摧橋慢之外幢。興開示之眞語。建謀羣吏。

乃命下寮。顧蚊山之易疲。歎龍宮之難紀。其ノ詞曰。

天地有象。聖賢建極。宴坐中巖。成道西域。後代襲武。前良作則。安樂是依。靈鷲是式。一想冥契。三歸願塞。其一。
 金方置廟。衡麓開場。龍象擁錫。人天護ノ香。鬼神賜土。靈化度堂。重鎮牧伯。上游侯王。光昭法侶。大啓禪房。其二。
 幽谷左豁。崇山右峙。瞰郭萬家。帶江千里。玉水布飛。石林雲起。雷激庭際。月窺窓裏。花臺隨足。天樂盈耳。其三。
 人與地靈。心將法滅。既往在此。比明齊哲。佛日環照。牛車結轍。連率順風。駟驪欽烈。訪道追勝。形馳目絕。其四。
 碑板ノ莫建。軌物未弘。和合是請。佐貳是膺。政敷大郡。信發廣乘。願言有述。以訪無能。惟石可久。與山不崩。其五。
 前陳州刺史李邕文并書。大唐開元十八年。歲次庚午。九月壬子朔十一日壬戌建。江夏黃仙鶴刻。

〔校勘〕

底本としては、『中國石刻大觀』精粹篇二五・麓山寺碑（同朋舎出）との異同を以下に記す。

- 版、一九九一年）所收の南宋拓を用い、缺損部分を『永樂大典』
 卷五七七〇・長沙府志および『金石萃編』によつて補う。また缺
 落部分に異同があるものについては、『乾隆長沙府志』（中國方志
 叢書）所收）卷三九および『金石萃編』卷七八に掲載された録文
- | | |
|---|-------------------------|
| 1 | 「居」、『乾隆長沙府志』作「臨」。 |
| 2 | 「雷」、『金石萃編』作「霑」 |
| 3 | 「□□禪師」、『乾隆長沙府志』作「惠鏡禪師」。 |
| 4 | 「建」、『乾隆長沙府志』作「爰」。 |

I 序——嶽麓山および麓山寺の景観描写——

〔訓読〕

夫れ天の道なるや、東は仁にして首まり、西は義にして成る。故に清泰の居る所、成事を指す已。地の徳なるや、川浮
 いて動き、岳鎮まりて安んず。故に耆闍以て居り、安定を取る已。茲の寺は大抵にして、厥の旨は玄同なり。是を以て
 度門を迴向すれば、郭右を躋り、淨域を仰止すれば、巖巖に列なる。宝堂は太虚に岌業たりて、道樹は曾渚に森梢たり。

風無きも林壑は肅穆として、月あらざるも事は澄明たり。化城も未だ真ならず、梵天も猶お俗のごときなり。名称の殆ど絶え、地位の嘗に高き者は、其れ盛んならざるか。

【語釈】

【東仁而首、西義而成】 五行説では、仁は東に、義は西に配当される。典拠未詳。

【清泰】 阿弥陀仏の国土の名。『阿弥陀鼓音声王陀羅尼經』「阿弥陀仏与声聞俱、如来応正遍知、其国号曰清泰、聖王所住、其城縦広十千由旬、於中充滿利之種」(大正一一・三五二b)、このほか『法苑珠林』卷一五敬仏篇・弥陀部・引証(大正五三・三三九a)、『諸経要集』卷一(大正五四・四c)などにも引用される。

【成事】 成し遂げられた事柄。『後漢書』列伝五三李固伝「陽嘉二年、有地動・山崩・火災之異、公卿拳固対策……、固対曰、臣聞王者父天母地、宝有山川。王道得則陰陽和穆、政化乖則崩震為災。斯皆関之天心、效於成事者也。」

【川浮而动、岳鎮而安】 麓山寺の置かれた嶽麓山は、長沙市街から見て、その西を北流する湘水の対岸に望むことが出来る。

【川浮而动】 湘水の蕩々たる流れを言う。孔徳紹「悠然万頃満、俄爾百川浮」。

【岳鎮而安】 嶽麓山が盤踞する様を言う。王融「三月三日曲水詩序」爾乃迴輿駐罕、嶽鎮淵淳(『文選』卷四六)。

【耆闍】 耆闍は耆闍崛山の略。漢訳では鷲峰山、靈鷲山。王舎城

の東北にある釈尊説法の地。嶽麓山をこれに譬えて賞賛する。

【取於安定者已】 典拠未詳。

【大抵】 おおよそ、大略。『漢書』卷四八賈誼伝・顔師古注「大抵、猶言大略也」。しかし、この文脈にはそぐわないか。

【玄同】 『老子』第五六章「和其光、同其塵、是謂玄同」、『莊子』外篇・胠篋「天下之徳始玄同矣」、『広弘明集』卷一八・慧淨・析疑論「論云、一音演説、各隨類解、蠕動衆生、皆有仏性。然則仏陀之与先覚、語從俗異。智慧之与般若、義本玄同。習智覚、若非勝因、念仏慧、豈登妙果」(大正五二・二三〇b)。

【迴向度門、躡于郭右】 長沙市街から湘水に向かったときに、その西方に嶽麓山が見えることをいう。

【度門】 度は渡に同じ。彼岸に渡るための門戸。『大乘義章』卷一二・五停心義四門分別「言度門者、度是出離至到之義」(大正四四・六九七c)。参考…『唐代釈教文選訳注』七九・一六四頁。

【郭右】 用例未詳。郭は城郭、右は西の意。参考…道宣「釈迦方志」卷下「東晋孝武寧康三年二月八日、沙門釈道安、盛徳昭彰、擅名宇内。於襄陽郭西、鑄丈六無量寿像、明年季冬、嚴飾成就」(大正五一・九七一b)。

【仰止淨域、列乎巖巖】麓山寺を淨域に譬え、これを仰ぎ見ると山々が連なっていることを言う。

【仰止】仰ぎ慕う。止は助字。『詩』小雅・車牽「高山仰止、景行行止」。

【巖巖】山頂の意。竹林七賢論「阮籍常箕踞嘯歌、酣放自若。時蘇門山中、忽有真人在焉。籍親往尋、其人擁膝巖巖。遂登嶺從之」(『芸文類聚』卷一九・人部三・嘯)、白居易・遊悟真寺「誰知中有路、盤折通巖巖」(『白氏長慶集』卷六)。

【宝堂】七宝堂の略。『大般涅槃經(曇無讖訳)』卷一・壽命品「爾時、拘尸那城娑羅樹林、其林變白、猶如白鶴、於虚空中、自然而有七宝堂閣」(大正一一・三六九b)。

【岌嶮】高く壮麗なこと。張衡・西京賦「疏龍首以抗殿、状鬼戕以岌嶮」(『文選』卷二)。

【太虚】太虚空の略。道朗『大般涅槃經』序「功濟万化而不恃、明踰万日而不居、渾然与太虚同量、泯然与法性为一」(大正一一・三六五a)、『広弘明集』卷五・沈約・均聖論「而天地之在彼太虚。猶軒羲之在彼天地」(大正五二・一一二c)。

【道樹】菩提樹のこと。その下で积尊が成道したことから言う。謝朓・奉和隨王殿下「卷轡樓道樹、方津棹法舷」。

【森梢】または森峭に作り、高くそびえ立つ様子を言う。王粲・柳賦「枝扶疏而覃布、莖森梢以奮揚」(『芸文類聚』卷八九・木部下・楊柳)、王勃・澗底寒松賦「磊落殊状、森峭峻節」(『王子安集』卷二)。

【曾渚】未詳。

【無風】『弁正論』卷五仏道先後「玫瑰琥珀之樹、不日舒光、琉璃馬璃之枝、無風白響」(大正五二・五二一a)。

【林壑】謝靈運・石壁精舍還湖中作「林壑斂暝色、雲霞收夕霏」、『広弘明集』卷三〇・江總・静臥棲霞寺房望徐祭酒「故人市朝狎、心期林壑乖」(大正五二・三五七a)。

【肅穆】『古清凉伝』卷上「下有仏光寺、孝文所立。有仏堂三間、僧室十余間。尊儀肅穆、林泉清茂」(大正五一・一〇九五c)。

【不月】『大智度論』卷三「如是大德衆、無仏失威神、如空無月時、有宿而不蔽」(大正二五・六九b)、『阿育王經』卷六「此大吉衆僧、離世尊一人、淨心不莊嚴、如虚空無月」(大正五〇・一五一c)などの表現を逆手に取った比喩か。

【相事】未詳。

【澄明】『六十華嚴經』卷五五・入法界品「遙見仏來、端嚴殊特諸根寂定、如大象王、神心澄明淨若淵海、顯現如來自在境界、勝妙功德相好嚴身、円満光明、普照一切、震動十方無量世界」(大正九・七四九a)。

【化城未真、梵天猶俗】化城は『法華經』化城喻品に基づく語。麓山寺の景観が化城・梵天に勝るほど素晴らしいことを言う。

【化城未真】智顛・湛然『維摩經略疏』卷九・入不二法門品「雖入化城、未入宝所故也」(大正三八・六八九c)。

【猶俗】白居易・庭松「顧我猶俗士、冠帶走塵埃、未稱為松主、時時一愧懷」(『白氏長慶集』卷一一)。

【名称殆絶】 名称はここでは言葉の意。麓山寺の壮麗さを描写するの、言葉が見つからないことを言う。

【地位嘗高】 麓山寺が嶽麓山中に高々と存することを言うか。

【不其盛歟】 『唐会要』卷三五・褒崇先聖先師「制曰……、夫子十哲之外、曾參六十七人、同升孔門、伝習経術、子之四教、爾実行之。親授微言、式揚大義。是称達者、不其盛歟」。

II 創建および晋代における沿革——法崇・法導・法愍——

【訓読】

麓山寺なる者は、晋の太始四年（二六八）の立つる所なり。法崇禪師の若き者有りて、錫を江左に振り、結を潤陰に除く。嘗て炎漢太宗の長沙清廟と棟宇は接近し、雲霧は晦冥たり。赤豹文狸、女羅薛帶。山祇は法眼に見じ、寶后は仏光に依りて、至りて旧居を請いたれば、特くに新寺を為す。禪師翌日に泊び、聚謀を弘め、介衆これを表し、明詔行わる。水臬は制あり、丘墟は尽く平らかなり。太康二載（二八一）、法導禪師の若き者有り、何許の人なるかを知る莫し。黙して智印を受け、深く証源に入り、外縁を壊らずして心本を見、真性を作す無くして福河に注ぐ。大いに前功を起こし、重ねて靈応を啓く。神僧の銀色にして、化身は丈余なるもの、全模を指定し、方面を標建す。法物は増々備わり、檀供は益々崇し。広げるに凌雲の台を以てし、疏くに布金の地を以てす。

【語釈】

【晋太始四年】 晋の年号で言うが、麓山寺創建時の長沙郡は呉の版図であり、その年号では宝鼎三年。長沙郡が晋に領有されるようになるのは、呉の滅亡（二八〇年）の時からである。

【法崇】 竺法崇のこと。『高僧伝』卷四義解一に立伝される。同伝には次のようにある。「竺法崇、未詳何人。……嘗遊湘州麓山、山精化為夫人。詣崇請戒、捨所住山以為寺、崇居之少時、

化洽湘土。後還剡之葛峴山、……与隠士魯国孔淳之相遇、每盤遊極日、輒信宿妄婦、披衿頓契、自以為得意之交也。崇迺歎曰「緇想人外、三十余年、傾蓋于茲、不覺老之将至。……崇後卒於山中。著法華義疏四卷云」（大正五〇・三五〇c）、なお、ここで竺法崇と親交を結んだという孔淳之は、『宋書』卷九五隠逸伝に「孔淳之字彦深、魯郡魯人也。……居会稽剡县、性好山水、

毎有所游、必窮其幽峻、或旬日忘帰。嘗游山、遇沙門釈法崇、因留共止、遂停三載。法崇嘆曰「緬想人外、三十年矣、今乃傾蓋于茲、不覺老之將至也。」及淳之還反、不告以姓。……元嘉七年(四三〇)、卒、時年五十九」とある人物。孔淳之の在世期間(三七二―四三〇)と考えあわせると、法崇禪師による麓山寺の創建を碑文が晋太始四年(二六八)とするのには、年代的な矛盾が生じる。ただし、碑文後段では法崇禪師に続いて法淳禪師の事績を太康二載(二八一)に繫年していることもあり、ここでは疑義を呈するにとめておきたい。

【振錫】『高僧伝』卷一・安世高伝「値靈帝之末、関雒擾乱、乃振錫江南」(大正五〇・三三三b)。

【除結】結は煩惱のこと。衆生を生死に結びつけ繋ぎ止める諸要素。『増一阿含経』卷一一・善知識品「爾時、尊者朱利繫特、向世尊而説此偈、今誦此已足、如世尊之所説、智慧能除結、不由其余行」(大正二・六〇一b)、『注維摩詰経』卷六「行阿羅漢慈破結賊故。什曰、秦言殺結使賊也、此從除結中生、因以為名、亦能除結故因能受名也」(大正三八・三八四c)。

【潤陰】潤は潤州。現在の南京を含む長江南岸の地域。

【炎漢太宗】炎漢は漢王朝のこと。五行の火徳を以て帝位に就いたことから言う。また、太宗は前漢第三代文帝(前一八〇―一五七在位)の廟号。班固・高祖泗水亭碑「皇皇炎漢、兆自沛豊、乾降著符、精感赤龍」(『芸文類聚』卷一一・帝王部二・漢高帝)、『三国志』魏書一九・陳思王植伝「謹拜表献詩二篇、其辞

曰、……受禪炎漢、臨君万邦、万邦既化、率由旧則」。

【長沙清廟】清廟は周代においては文王を祀る廟。『詩』大雅・周頌・清廟「清廟、祀文王也」。ここでは長沙郡に置かれた漢の文帝廟のことを言うか。皇帝廟は後代では京師にのみ置かれたが、前漢においては各地の郡国にそれぞれ置かれた。

【赤豹文狸、女蘿薛帶】赤豹・文狸いずれも山鬼の一種。女蘿薛帶はその衣装こと。屈原・九歌・山鬼「若有人兮山之阿、被薜荔兮帶女蘿。……乘赤豹兮從文狸、辛夷車兮結桂旗」(『楚辭』卷二)。

【山祇】山の神。顔延之・車駕幸京口三月三日侍遊曲阿後湖作「山祇躡嶠路、水若警滄流」(李善注。山祇、山神也)、『文選』卷二二)。

【法眼】真実を見る智慧の眼。菩薩はこれによって諸事象の真相を知り、衆生を救済する。

【寶后】前漢文帝の寶皇后のことであろうか。『三国志』『晋書』など魏晋時代の史料には、寶后という人物は現れない。

【依於仏光】『六十華嚴経』卷三・盧舍那仏品「所謂依一切莊嚴住、或依虚空住、或依一切宝住、或依仏光明住、或依幻業住」(大正九・四一〇a)。

【至請旧居】法崇が文帝廟の近くに棟宇を建てて住したことで、文帝廟に祀られていた寶后は居場所を奪われた形になり、そのため「旧居」を返してくれと請願した、ということであろうか。

【聚謀】『春秋左氏伝』襄公三〇年「大夫聚謀」。

【介衆表之】介衆は衆衆。『春秋左氏伝』昭公二四年「三月庚戌、晋侯使士景伯泄問周故、士伯立于乾祭、而問於介衆（杜預注、乾祭、王城北門、介、大也）」。表は皇帝に上表文を奉ること。

【明詔行矣】大衆からの上表によって、皇帝の詔勅が降ったことを言う。麓山寺の創建に、国家の援助が与えられたことを示す。

【水泉有制】水泉は、みずもり、地面の水平を測る道具。何晏・景福殿賦「制無細而不協於規景、作無微而不違於水泉」（『文選』卷一一）。

【丘墟尽平】丘墟は荒れ果てた廢墟の意。『涅槃経』（曇無讖訳）卷二七・師子吼菩薩品「所遊之處、丘墟皆平、衣服離身、四寸不墮」（大正一一・五二八b）。

【法導禪師】『高僧伝』には見えず。

【智印】仏や菩薩が具える智慧を象徴する三昧耶形。

【証源】証は悟りこと。

【不壊外縁】外縁は、外から助ける間接的原因。『大智度論』卷二一「但以内無色相外観色為異、内亦無色相、外観諸色青黄赤白、是為八勝處、内有色相外観色者、内身不壊見外縁少者、縁少故名少、観道未增長故観少因縁、観多畏難撰故、譬如鹿遊未調不中遠放、若好若醜者、初学繫心縁中」（大正二五・二一六a）。

【見心本】『正法華経』卷四・往古品「又如世尊、為法之眼、最勝至誠、見人心本、幼少為童、常行平等、而為衆生、説上尊道」

（大正九・九三b）。

【無作真性】真性は人間全てに行きわたる真実の本性。

【注福河】『四十華嚴経』卷二・入不思議解脱境界普賢行願品「如来無尽智、照世円満灯、三世流福河、能令衆清浄」（大正一〇・六七〇a）。

【前功】以前に建てた功績。『書』盤庚下「古我先王、将多于前功、適于山、用降我凶徳、嘉績于朕邦」。ここでは、法崇の業績をいう。

【重啓】『周書』卷一・文帝紀上「太祖乃伝檄方鎮曰……、雖靈命重啓、蕩定有期、而乘鸞之徒、因生羽翼」。ここでは、先に法崇の事があり、ついで法導が神僧に逢ったことを言う。

【靈応】『歴代三宝紀』卷一二「大隋録者、我皇帝受命四天、護持三宝、承符五運、宅此九州。故誕育之初、神光耀室、君臨已後、靈応競臻」（大正四九・一〇一c）。

【全模】全体の設計図。左思・魏都賦「偃拱木於林衡、授全模於梓匠」（『文選』卷六）、『宋高僧伝』卷一四・唐京師崇聖寺文綱伝「景龍二載」六月七日御札題榜為靈感寺、是也。諸寺辟頑徳以隸焉。……或宝坊飛閣、克壯全模。或講堂経楼、舍利浄土」（大正五〇・七九二a、b）。

【標建】標識を建てること。『大唐西域記』卷一〇「城東不遠、有故伽藍、庭宇荒蕪、基址尚在。……在昔如来、於此説法、現大神通、度無量衆。用彰聖跡、故此標建、歳久弥神、祈願或遂」（大正五一・九三二a）。

【方面】 四方の面、転じてその範囲内。

【檀供】 布施の意であろう。『旧雜譬喻經』卷下「広為大檀供養

一切、万味飯食、其香広聞十方一切」(大正四・五二一a)、『景

徳伝灯録』卷三・僧璨大師「士民奔趨、大設檀供」(大正五一・

二二一c)。

【凌雲之台】 雲を凌ぐほどの台閣。『三国志魏書二・文帝紀(黄
初二年)十二月、行東巡、是歲築凌雲台』、『洛陽伽藍記』卷一・

瑤光寺「千秋門内道北有西游園、園中有凌雲台。即是魏文帝所
築者」。
【布金之地】 祇園精舎のことで、須達長者が地に黄金を敷きつめ
て土地を買い、釈尊に寄進した故事に由来する。ここでは転じ
て寺院のこと。『法顯伝』「祇洹精舎大院各有二門、一門東向一
門北向。此園即須達長者布金錢買地処、精舎当中央。仏住此処
最久」(大正五一・八六〇c)。

III 南朝から隋初——法愍・王僧虔・夏侯祥・王琳・法賢・蕭沈・吳明徹・晋安王・樂陽王——

〔訓読〕

法愍禪師の若き者有り、江夏の人なり。空慧は双つながら銚らめ、寂用は同じく轡す。慈目相い視て、淨心相い続ぐ。万法を綜覈し、一帰に安住す。『大道経』に注し、上乘の理を究む。永く茲の嶺に託りて、克く厥の生を終う。宋の元徽中(四七三、四七七)に逮び、尚書令・湘州刺史・王公諱僧虔は、右軍の孫なり。敬田を信尚し、塔廟を作為し、宝相を追存し、名を宝山に加う。矧や弓冶の筆精、陶甄の意匠をや。書に留めて石に藏して、妙を緘して時を俟ち、法宇の傾低するを候いて、珍儷以て興葺せんことを期す。遠慮將に久しからんとするも、遺事は未だ彰らかならず。梁の天監三年(五〇四)、刺史・夏侯公諱祥は、義を了らめ玄を重ねて、別に正殿を構う。紹泰二年(五五六)、刺史・王公諱琳、律師法賢は、或は在家・出家、或は聞見・眼見。涅槃像を建て、甘露門を開く。長沙内史・蕭沈は、振って法鼓を起こし、弘く梵言を演ぶ。撻槌を景鍾に継ぎ、貝葉を曾閣に納む。陳の司空・吳明徹、隨の侍中・鎮南晋安王、樂陽王は、並びに仏性森然たりて、国楨の秀でたる者なり。迴廊を壯んにするに雲構を以てし、愁居を蔚するに天覆を以てす。

〔語釈〕

【法愍禪師】『高僧伝』卷七義解四・釈法愍伝に次のように立伝される。「釈法愍、北人。弱年慕道、篤志経籍、十八出家、……後憩江夏郡五層寺。時沙門僧昌於江陵城内立塔、刺史謝晦欲壞之、愍聞故往諫晦、晦意不止。愍於是隱跡於長沙麓山、終身不出。……（謝晦）後以叛逆誅滅。……愍遇著『顯驗論』以明因果、并注『大道地經』。後卒於山中、春秋八十有三。弟子僧道立碑頌德」（大五〇・三七二a、b）。なお、ここに見える刺史の謝晦とは、『宋書』卷四四に立伝される人物で、劉宋建国の功臣。その荊州（治所は江陵）刺史就任は宋文帝の元嘉元年（四二四）のことで、同三年（四二六）に反乱を起こして誅殺されている。したがって法愍禪師の麓山寺入山は劉宋初年のことになる。

【江夏人】江夏郡は現在の湖北省武漢市。しかし、『高僧伝』法愍伝には単に「北人」とのみあり、のち江夏を経て長沙に至ったとする。

【空慧】空の道理を觀する智慧（中村元『仏教語大辞典』）との解釈もあるが、直後に「双銓」とあることからすれば、ここでは「空の慧」ではなく、「空と慧」すなわち禪定と慧学のことであるろう。

【双銓】用例なし。銓は詮と音通か。「双詮」の用例ならば、智顛『法華玄義』卷六下「四明所詮者、若委論其意、出四教義中今略引詮意若説人天乘、詮界内思議之俗、永不詮真、若為漸教一人別説九部十一部、乃至通十二部者、初正詮思議之俗諦、傍詮

思議之真諦、中正詮思議之真諦、傍詮思議之俗諦、後正詮不思議之真諦、傍詮不思議之俗諦也。乃至双詮不思議之真俗」（大正三三・七五四b）、および湛然『法華玄義釈籤』卷一三「言中後者。此兼方等般若兩意、故方等中所得小果、多因正詮思議之真、至般若中即不思議之傍正也、乃至去即法華開權顯実、真俗不二。故曰双詮」（大正三三・九〇九c）がある。なお、「銓」は、秤はかる、平らかの意。一方「詮」は、そなわる、道理が備わっている、物事の真理、法則の意で、中村元『仏教語大辞典』には「究極のところ」との語釈が示される。

【寂用】先の空慧と対句であり、これも禪定と智慧をいうのであるろう。慧遠『大乘義章』卷一四・十地義四門分別「寂用双行、離間隔相、故名無相」（大正四四・七五〇a）。

【同轡】馬が揃って走ること。轡は馬の手綱。張衡、西京賦「百馬同轡、踴足並馳」（『文選』卷二）。

【慈目】慈眼に同じく、慈悲を以て衆生を視る目。『出生無辺門陀羅尼經（不空訳）』「爾時世尊復説伽他曰、……於他勿嫉妬、為親名利故、慈目視衆生、得大威妙色」（大正一九・六七七c）。

【淨心相統】淨心は、①きよらかな心、②きよらかな信仰心、③法を確かに知る心、④衆生の本来有する自性清淨の心（中村元『仏教語大辞典』）。『八十華嚴經』卷二・十無尽藏品「令一切衆生、仏種不斷、淨心相統、亦以法光明、而演説法、無有窮尽、

不生疲倦」(大正一〇・一一四c)。

【綜覈】 様々な事象を総合して詳細に考察すること。『後漢書』列伝五一・左雄伝「再遷尚書令、上疏陳事曰、……降及宣帝、興於仄陋、綜覈名実、知時所病」、『魏書』卷一一四・釈老志「釈迦所説教法、既涅槃後、有聲聞弟子大迦葉・阿難等五百人、撰集著録。阿難親承囑授、多聞總持、蓋能綜覈深致、無所漏失」。

【万法】 あらゆる事物、一切の存在、諸法(中村元『仏教語大辞典』)。

【一婦】 碑文後段に、天台智顛が麓山寺に住したとの記述が見えていることからすれば、これは天台の四車家の立場から、万法が一仏乘に帰すことを言うのであろうか。

【大道経】 『道地経』一卷、安世高訳(大正藏卷一五所収)、『大道地経』とも称する。禪觀修道の階梯方法を順次説く。異訳に『修行道地経』七卷、竺法護訳(大正藏卷一五所収)がある。注釈としては、道安『大道地経注解』一卷が法経『衆経目錄』巻六などに挙げられるが、法悠の注釈は経録には見えない。また『高僧伝』法悠伝によれば、この他に『顕驗論』を著したというが、これも著録が無い。

【上乘理】 上乘は最上の乗物。無上乘とも云い、大乘のことである。『大乘大集地藏十輪経』(玄奘訳)巻五・有依行品「或有悟入广大甚深無上乘理」(大正一三・七四九b)。

【永託茲嶺、克終厥生】 『高僧伝』法悠伝には「悠於是隱跡於長沙麓山、終身不出。……後卒於山中、春秋八十有三」(大正五〇・

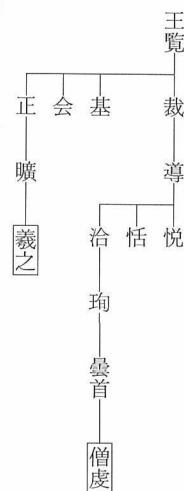
三七二a) という。

【尚書令・湘州刺史】 尚書令は尚書省の長官、刺史は州の長官。当時の湘州の領域は、ほぼ現在の湖南省に重なり、治所は長沙郡。

【王公諱僧虔】 王僧虔は宋・齊に仕えた貴族官僚。『南齊書』卷三三、『南史』卷二二に立伝される。『南齊書』本伝には「遷使持節・都督湘州諸軍事・建武將軍・行湘州事、仍轉輔國將軍・湘州刺史。所在以寬惠著稱。巴峽流民多在湘土。……元徽中、遷吏部尚書」とあり、万斯同『宋方鎮年表』(『二十五史補編』第三冊所収)によれば、王僧虔の湘州刺史在任は、宋の泰始七年から元徽二年の間(四七一〜四七四)。また、尚書令に就任したのは、のち昇明二年(四七八)のことである。したがって、「尚書令・湘州刺史」と並記するのは、生前の最高官位が尚書令で、麓山寺に関わりがあったのが湘州刺史在任中のことだからであり、二つの官を同時に兼任していたわけではない。なお、王僧虔は宋齊革命後にも「其年(建元二年、四八〇)冬、遷使持節・都督湘州諸軍事・征南將軍・湘州刺史、侍中如故。清簡無所欲、不營財產、百姓安之。世祖即位、僧虔以風疾欲陳解、會遷侍中・左光祿大夫・開府儀同三司」(『南齊書』本伝)とあるように、湘州刺史に就任している。王僧虔の湘州刺史在任中のことは、『高僧伝』巻八・釈法安伝「顯嘗京朝、流名四遠、迄至立年、專當法匠。王僧虔出鎮湘州、携共同行、後南適番禺」(大正五〇・三八〇a)、同書卷一三・釈曇遷伝「王僧虔為湘州及三

呉、並携共同遊」(大正五〇・四一四a)などにも見える。

【右軍之孫】右軍とは王羲之のことで、右軍將軍に就任したことから王右軍と呼ばれる。しかし、錢大昕『潛研堂金石文跋尾』が「以晋・宋・齊史考之、僧虔為丞相導之玄孫、於羲之為族曾孫、不当云孫也」と言うように、「右軍の孫」とは李邕の誤解である。矢野主税『改訂魏晉百官世系表』(長崎大学史学会、一九九七)によって王羲之と王僧虔の關係を图示すれば次のとおり。



【信尚】尚は尊ぶ。『法苑珠林』卷二二・入道篇「宋尼釈曇輝……。刺史甄法崇、信尚正法、聞輝志業、迎与相見」(大正五三・四五三b)。

【敬田】福田に同じく、仏・法・僧のこと。恭敬すれば福を生ずることから言う。

【追存】存は、思う、念ずるの意。追存は追憶すること。『仏滅度後棺斂葬送経』「鉢当變化、現五色光、飛行昇降、開化民心。黎庶睹之、追存仏徳、去愚即明、順用正教、皆興廟寺、旌表仏徳」(大正一一・一一一四c)。

【宝相】仏の莊嚴な相好のこと。また、仏を指すか。『法華経』卷四・授学無学人記品「阿難、是諸人等、当供養五十世界微塵

教諸仏如来、恭敬尊重、護持法藏、末後同時、於十方国、各得成仏、皆同一号。名曰、宝相如来・応供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊」(大正九・三〇b)。

【加名宝山】宝山は須弥山。この一句未詳。

【弓治】父子代々伝える事業。『礼記』学記「良治之子、必学為裘。良弓之子、必学為箕」、『北史』卷五六・魏長賢・魏季景伝論「長賢思樹風声、抗言昏俗、有朱子游之風。季景父子、雅業相伝、抑弓治之義」。

【筆精】書を善くすること。江淹・別賦「淵雲之墨妙、敞楽之筆精」(李善注、漢書曰、王褒、字子淵。楊雄、字子雲。漢書曰、敞安、臨菑人也。徐楽、燕無終人也。上疏言時務、上召見、乃拜楽・安皆為郎中)、『文選』卷一六)。

【弓冶筆精】王僧虔が祖父王羲之(李邕の誤解なのだが)の筆使いの妙を受継いでいることを言う。

【陶甄】陶工が器を作ること。転じて天下を治めることの比喩。『晋書』卷二一・楽志上・張華・正徳舞歌「祚命于晋、世有哲王。弘济区夏、陶甄万方」。

【意匠】様々に工夫を凝らすこと。楊炯「王勃集」序「六合殊材、並推心於意匠、八方好事、感受氣於文枢」。

【陶甄意匠】王僧虔が尚書令として天下の政治を行ったことを言う。

【法宇】寺院のこと。梁・簡文帝・神山寺碑「銘邁彼高蹤、構茲

法宇」。

【傾低】 謝惠連・祭古冢文「几筵糜腐、俎豆傾低」(『文選』卷六〇)。

【珍伽】 珍奇な宝物のことか。『仏祖歴代通載』卷一二「禪師尊称大通、諱神秀……、万回菩薩、乞施後宮。宝衣盈箱、珍伽敵国」(大正四九・五七八a)。

【興葺】 建築物を創建すること。王巾・頭陀寺碑文「眷言靈宇、載懷興葺(注、楚辞曰、葺之兮荷蓋、王逸注曰、葺、蓋屋也)」(『文選』卷五九)。

【刺史夏侯公諱祥】 夏侯詳の伝は、『梁書』卷一〇、『南史』卷五五にあり。前者には「(天監)三年、遷使持節・散騎常侍・車騎將軍・湘州刺史。詳善吏事、在州四載、為百姓所称。……六年、徵為侍中・右光祿大夫」とある。なお錢大昕『潛研堂金石文跋尾』は、「按、梁書・南史俱作詳、古書祥・詳二文、恒通用」という。

【了義重玄】 了義とは義理を明らかにすること。重玄は奥深い真理を悟ることか。

【刺史王公諱琳】 王琳は、はじめ梁に仕えたが、梁陳革命のものには北斉に逃れ、陳に対抗した。『南史』卷六四に伝があり、少なくとも五五六〜五五八年に湘州刺史であったことが確認できる。また、『隋天台智者大師別伝』には「時王琳抛湘、從琳求去。琳以陳侯故旧、又嘉此志節、資給法具、深助隨喜。年十有八、投湘州果願寺沙門法緒、而出家焉」(大正五〇・一九一c)

とあるが、「琳以陳侯故旧」とは、王琳が智顛の亡父陳起祖の旧友であったことを言う。

【律師法賢】 僧伝には見えず。

【聞見眼見】 『大般涅槃經』(曇無讖訳)卷二七・師子吼菩薩品に見有二種。一者眼見。二者聞見。諸仏世尊眼見仏性。如於掌中觀阿摩勒果。十住菩薩聞見仏性故不了了。十住菩薩唯能自知定得阿耨多羅三藐三菩提。而不能知一切衆生悉有仏性。善男子。復有眼見。諸仏如來十住菩薩眼見仏性。復有聞見。一切衆生乃至九地聞見仏性。菩薩若聞一切衆生悉有仏性。心不生信不名聞見」(大正一二・五二七c〜五二八a)、『大乘義章』卷五「九地已還、断其迷相。是故説為聞見仏性。十地以上。断迷実性。是故説為眼見仏性」(大正四四・五六二b)。

【長沙内史蕭沈】 未詳。正史には現れず。

【振起法鼓】 法鼓は法事の際に用いる太鼓。ここでは仏法を振興すること。『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷九「振法鼓而挫天魔、麾勝幡而摧外道」(大正五〇・二七一c)。

【繼捷槌於景鐘】 捷槌も景鐘も鐘の意。この一句、文意未詳。

【曾閣】 未詳。

【司空吳明徹】 『陳書』卷九に立伝される。吳明徹が司空に就任したのは陳の太建八年(五七六)のこと。『隋天台智者大師別伝』には「大中大夫蔣添致・儀同公吳明徹、皆稟息法、脚氣廢除。法雲遠覃、例皆如此」(大正五〇・一九七c)とある。

【隨侍中鎮南晋安王、樂陽王】 いずれも未詳。『金石萃編』で王

昶は「隋書諸王伝、無晋安・楽陽二王、惟陳書有世祖第六子伯恭立為晋安王、而楽陽亦無考」という。

階雲構、綺壁霞鮮」（『芸文類聚』卷七七・内典下・寺碑）

【国植】 国家の楨幹となるべき人物、国柱。沈約、齊太尉文憲王公墓誌銘「德被九官、功苞十乱、帝囟必举、皇猷諧煥、斯謂国楨、是惟民幹」（『芸文類聚』四六・職官部二・太尉）。

【蔚愁居】 愁居は哀愁に閉ざされた場所。『戦国策』趙策「守四封之内、愁居懼處、不敢動搖」。蔚は、草木の茂る様子、つや、彩り、心が晴れない様子。

【雲構】 雲にまで聳える巨大な建造物。任孝恭・多宝寺碑銘「宝

【天覆】 天が万物の上を覆っていること。

IV 隋代以降（一）——天台大禪師・曇捷・權武・智謙・摩訶衍・首楞——

【訓読】

開皇九年（五八九）、天台大禪師は、法身を守護し、悲海を澄清し、嚴幢は標聳として、智火は融明たり。如来堂を襲い、法華定に坐し、四行樂^{ねが}うも取らず、三賢登るも更らに遷る。曇捷法師の若き者有り、林及び樹を伐り、法と衣とを染む。一滴の油も墜さず、大根の雨を霑^{うるお}す有り。摠管大將軍・齊郡公權公諱武は、福德もて莊嚴して、方便の喜慧あり、四部を疏写して、百城に鎮重す。智謙法師の若き者有り、願は天より広く、心は氣より細し。山頂に誦習し、花台を創立す。摩訶衍禪師の若き者有り、五力は円常にして、四無は清淨たり。因因を以て果果に入り、滅滅を以て如如に会す。首楞法師の若き者有り、文・史は早に通じ、道・釈は後に得たり。遠く吳・会に涉り、幽^{ふか}く天台に尋^{たず}ぬ。法界をば剡^{えが}中に図き、真訣をば湘上に論ず。究竟戒を具して、解脱筵を敷く。一法もて無量の門を開き、一音もて無辺の衆を警^{いま}しめる。方等以て復悔する有り、双林以て追遠する有り。並びに場所を建てて、互いに住持と為る。

【語釈】

【開皇九年】 陳の年号では禎明三年。この年の正月に陳が減び、

長沙は隋の版図に入る。

【天台大禪師】天台大師智顛のこと。智顛は、陳至徳三年(五八五)に天台より下山して陳の都建康に赴き、至敬寺・靈耀寺・光宅寺などに住して『大智度論』『仁王般若経』『法華文句』を講じたのち、その地で陳の滅亡に遭遇している。時に智顛五十二歳。建康陥落後の状況を『隋天台智者大師別伝』は「金陵既敗、策杖荆湘。路次益城、忽夢老僧。曰『陶侃瑞像、敬屈守護』。於是往憩匡山(廬山)」(大正五〇・一九四c)と記す(『統高僧伝』卷一七・隋国師智者天台山国清寺釈智顛伝もほぼ同じ)。なお、智顛と湘州の関わりは、これより先、出家の際に湘州刺史王琳を頼ったときに始まる。八二頁語釈【刺史王公諱琳】参照。

【嚴幢】幢は寺院に立てるのぼり。

【標簷】標・簷いづれも高くあがること。

【襲如来堂】如来堂は如来室と同義。衆生を憐れむ心の状態のことで、これを住居に譬えたもの。『法華経』卷四・法師品「若有善男子善女人、如来滅後、欲為四衆、説是法華経者、云何応説。是善男子善女人、入如来室、著如来衣、坐如来座。爾乃応為四衆、広説斯経。如来室者、一切衆生中大慈悲心是。如来衣者、柔和忍辱心是。如来座者、一切法空是。安住是中、然後以不懈怠心、為諸菩薩及四衆、広説是法華経」(大正九・三二c)。また、次項【坐法華定】参照。

【坐法華定】法華三昧を修すること。『摩訶止観』卷二上「欲得法華三昧一切語言陀羅尼、入如来室、著如来衣、坐如来座、於

天龍八部衆中説法者、……应当修習此法華経、説誦大乘、念大乘事、令此空慧、与心相応、念諸菩薩母」(大正四六・一四b)。

【四行楽而不取】四行楽は四安楽行(身安楽行・口安楽行・意念楽行・誓願安楽行)を行することによって、煩惱に執着せぬことをいう(取は執着の意)。『法華経』安楽行品に基づく。

【三賢登而更遷】三賢は菩薩五十二位のうち十住・十行・十回向にある菩薩のこと。その地位に登ったのちにも更にその上の聖の位を目指して修行してゆくこと。

【曇捷法師】『仏祖統紀』卷六・東土九祖一・四祖天台智者智顛「是年(開皇一四年)過岳州、刺史王宣武請授大乘戒法、学士曇捷請講金光明。其俗專業殺捕、及聞法感化。於是一郡五県、一千余所咸舍殺業」(大正四九・一八三c)。また同書卷二四・仏祖世繫表に智顛の弟子の一人として「岳陽曇捷禪師」(大正四九・一九四c)が見える。

【伐林及樹】『大般涅槃経』(曇無讖訳)卷四〇橋陳如品「是故先当調伏其心、不調伏身、以是因縁、我経中説、斫伐此林、莫斫伐樹。何以故。従林生怖、不従樹生、欲調伏身、先当調心、心喻於林、身喻於樹」(大正二二・六〇三b)。

【染法与衣】典拠未詳。

【不墜一滴之油】油断しないこと、正念を保つこと。『大般涅槃経』(曇無讖訳)卷二二・光明遍照高貴徳王菩薩「善男子。譬如世間有諸大衆滿二十五里、王敕一臣、持一油鉢経由中過、莫令

傾覆、若葉一獲、当断汝命、復遣一人、拔刀在後、隨而怖之、臣受王教、尽心堅持、經歷爾所大衆之中、雖見可意五邪欲等、心常念言、我若放逸、著彼邪欲、当棄所持、命不全濟。是人以是怖因緣故、乃至不棄一獲之油。菩薩摩訶薩、亦復如是、於生死中、不失念慧、以不失故、雖見五欲、心不貪著」(大正一一・四六九b c)。

【有霑大根之雨】大根は大乗の機根をいう。霑は恩恵を施すこと。『法華経』卷三・藥草喻品「迦葉、譬如三千大千世界、山川谿谷土地、所生卉木叢林、及諸藥草、種類若干、名色各異、密雲弥布、遍覆三千大千世界、一時等澍、其沢普洽、卉木叢林、及諸藥草、小根小莖小枝小葉、中根中莖中枝中葉、大根大莖大枝大葉、諸樹大小、隨上中下、各有所受、一雲所雨、称其種性、而得生長、華果敷実、雖一地所生、一雨所潤、而諸草木、各有差別」(大正九・一九b)。

【權公諱武】權武は、『隋書』卷六五に伝あり。

【四部】四部の主要な經典のこと、四大部経。具体的には、般若・華嚴・涅槃・法華などが想定できる。

V 隋代以降(二) —— 惠鏡(？)・惠杲・惠宣・興哲 ——

〔訓読〕

惟れ□□禪師なる者は、其の武を迹おいて、其の高きに憑る。雲門を超えて、彼の塵網を絶つ。深く以為えらく、性に習有り、道に因有り。心に止まりて、照に反るは、習なる者なり。樹に坐して、山に居るは、因なる者なり。固く習すも

【智謙法師】未詳。

【摩訶衍禪師】未詳。

【五力】涅槃に至るための五つの力。信力・精進力・念力・定力・慧力。

【四無】四無畏のこと。仏や求道者が教えを説くに際して畏れることとのないこと。正等覚無畏・漏永尽無畏・說障法無畏・說出道無畏。

【以因因而入果果】因因は、因の因。AがBの因であり、BがCの因であるとき、AをCの因因という。果果は涅槃のこと。『大般涅槃経』(曇無讖訳)、卷二七・師子吼菩薩品「仏性者、有因有因因、有果有果果。有因者即十二因縁、因因者即是智慧。有果者即是阿耨多羅三藐三菩提、果果者即是無上大般涅槃」(大正一一・五二四a)。

【以滅滅而会如如】滅滅は、有為相としての滅を成立させるもの。如如は、そのようにあることの意味で、真如と同義。生成しないもの。典拠未詳。

【首楞法師】未詳。

因無くんば、則ち住せず。因あるも習無くんば、則ち証せず、と。是れ浮漚の和正なる、阿若の冥搜を覚る。想息して精進は甲のごとく堅く、受除かれて煩惱は殻のごとく散ず。百川は海に到れば、味を鹹に同じくし、千葉は蓮に在れば、色を淨に比す。定より起ちては平等を離れず、慧を発しては但て慈悲に及ぶ。故に能く聞く者は其の風に順い、観る者は其の道を操る。牧伯は萃り、皇華は洵りに臻り、焚香の上縁を啓き、成仏の嘉願を託す。上座惠杲、寺主惠宣、都維那興哲等は、皆な静慮は演成し、妙輪は転次す。差別に因りて法を非とし、品類に随いて根を得。二見を去りて流入り、一心を率いて事を弁す。威な形勝の会を以て、彼の脩行の迹の如くす。此の如きも豊碑は未だ勒されず、盛業は書されず。安んぞ黙して已む可けん哉。將た何を以て頌声を発揮し、宿志を披揚せんや。

【語釈】

【□□禪師】『乾隆長沙府志』のみ「□□」を「惠鏡」に作るが、史伝には見えず。また『乾隆長沙府志』が何に基づいたのかも不明である。

【迹其武、憑其高】□□(惠鏡?)禪師が、もとは軍人であったことを辞めて、僧侶となって麓山寺に住したということであろうか。憑高とは高みに登ること。李白「天台曉望」「天台隣四明、華頂高百越。門標赤城霞、樓榭滄島月。憑高登遠覽、直下見溟渤」(『李太白集』卷二)。また、僧叔『大智度論序』「有鳩摩羅耆婆法師者、少播聰慧之聞、長集奇拔之誉、才拳則亢標万里、言発則英弁榮枯、常杖慈論焉、淵鏡憑高、致以明宗」(大正二五・五七a)などの用例もある。ここでは麓山寺への入山という意味合いも含むものと解しておく。

【雲門】雲が湧き出るほど高い場所のこと。

【塵網】六塵(色声香味触法)が人を執えること網のようであること。澄観『華嚴経随疏演義鈔』卷七〇「六根取於六塵根網塵也、六塵引於六根塵網根也」(大正三六・五六六a)、『根本説一切有部苾芻尼毘奈耶』卷一「若人貪俗務、諸苦常隨逐、超然離塵網、能往涅槃宮」(大正二三・九一〇c)。

【性有習、道有因。止於心、反於照、習也者。坐乎樹、居乎山、因也者。固習而無因、則不住。因而無習、則不證】未詳。

【是浮漚和正、覺阿若冥搜】この二句意味不明。阿若は阿若憍陳如の略で、釈尊が最初に度した五人の比丘の一人であろうか。また、浮漚は浮かび漂う泡、転じて生死無常の譬えであるが、阿若との対であることからすれば人名の音訳とも考えられる。

【想息】『増一阿含経』卷二・広演品「世尊告曰、若有比丘正身正意、結跏趺坐、繫念在前、無有他想、專精念休息、所謂休息

者、心意想息、志性詳諦、亦無卒暴、恒專一心、意業閑居、常求方便、入三昧定、常念不貪、勝光上達」(大正二・五五六a)。

【皇華游臻】皇華は天子の勅使。『詩』小雅・皇皇者華序「君遣使臣也、送之以礼楽、言遠而有光華也」。游は頻りに、臻は至る。

【受除】受は四受のことか。四受は四取と同義で、欲取・見取・戒禁取・我語取(または、愛欲・悪見・戒禁取見・我見)。

【上座惠泉、寺主惠寛、都維那興哲】いずれも不明。

【牧伯萃止】牧伯は地方長官の雅称。萃はあつまる、止は助字。

【去二見而入流】二見は断見(人の心身は断滅して続生しないとの説)と常見(人の心身は過去現在未来ともに常住して間断ないとする説)。いずれも誤った思想とされる。

『詩』陳風・墓門「墓門有梅、有鴉萃止」。

VI 建碑の経緯——寶彦澄——

〔訓読〕

司馬西河の寶公名は彦澄は、高闡に碩徳たりて、賢を紹うけて遠く識らる。器守は岳厚にして、検操は水清たり。属たまま師長官を闕かき、撰行すること随手たり。家を以てすれば孝友に形あれ、己を以てすれば詩書に広く、重きを以てすれば雅俗は自ら興り、明を以てすれば至道は不おいに若しかう。且つ猶お浄土に帰心し、仏乗を護範とす。僣慢の外幢を摧き、開示の真語を興す。群吏に建謀して、乃ち下寮に命ず。蚊山の疲れ易きを顧みて、龍宮の紀し難きを歎く。其の詞に曰く、

〔語釈〕

【司馬】別駕・長史とともに州の次官。

者としての名声を博していたことをいう。謝承『後漢書』楊賜

【西河寶公名彦澄】西河郡は唐代には汾州と呼ばれた。現在の山西省中部の汾陽県。寶彦澄は当時の史料には現れず、その伝記は不明。

伝「嘉徳殿前有青赤氣、詔遣中使問賜祥異禍福所在、以賜博学碩徳之儒、故密諮問」(『北堂書鈔』卷五三)。

【碩徳高闡】高闡は宮殿の門のこと。寶彦澄が官界において有徳

【紹賢遠識】紹は受け継ぐの意。遠識は名声が遠方にまで及ぶこと。寶彦澄の家系が代々名族であったことをいう。『史記』卷一

三〇太史公自序「子産之仁、紹世称賢。……作鄭世家第十二」。
『晋書』卷四九向秀伝「向秀字子期、河内懷人也。清悟有遠識、少為山濤所知、雅好老莊之学」。

【器守岳厚】器守は人の器のことか。岳厚は山のごとく大いなること。

【檢操氷清】檢操は、みさお。氷清は、水のごとく清らかなこと。『三国志』呉書・眞譚伝・裴松之注「晋陽秋」称譚清貞有檢操、外如退弱、内堅正有膽幹。『東觀漢記』「樊准……、臨職公正、不發私書、世称氷清」(『北堂書鈔』三七)。

【師長】官署の長。『尚書』盤庚下「嗚呼、邦伯・師長・百執事之人」。ここでは竇彦澄の上官である州(湘州か)の刺史のこと。

【関官】関は欠に通じる。官職が欠員であることか。

【撰行】職務を代行する。『史記』五帝本紀「帝堯老、命舜撰行天子之政、以觀天命」。

【隨手】即座に、すぐに。『三国志』魏書・方技伝・華佗「太祖苦頭風、每發、心乱目眩、佗針鬲、隨手而差」。

【至道】『礼記』大学「故曰、苟不至德、至道不凝焉」。

【丕若】『尚書』召誥「我受天命、丕若有夏歷年、式勿替有股歷年」。

【顧蚊山之易疲】蚊に山を背負わせる、転じて微力で重任に堪えないことの譬え。『莊子』秋水「且夫知不知是非之竟、而猶欲觀於莊子之言、是猶使蚊負山、商軻馳河也、必不勝任矣」。

VII 詞および撰文・書写の記載

〔訓読〕

天地に象有り、聖賢は極を建つ。中巖に宴坐して、西域に成道す。後代武を襲い、前良則を作す。安楽是れ依り、靈鷲是れ式る。一想すれば冥は契い、三帰すれば願は塞つ。其の一。金方に廟を置き、衡麓に場を開く。龍象は錫を擁して、人天は香を護る。鬼神は土を賜ひ、靈化は堂を度す。重鎮たる牧伯、上游たる侯王。光昭たる法侶、大に啓けたる禪房。其の二。幽谷は左に豁く、崇山は右に峙ゆ。郭を瞰れば万家、江を帯ること千里。玉水は布飛し、石林は雲起す。雷は庭際に激しく、月は窓裏に窺う。花台は足に随ひ、天楽は耳に盈つ。其の三。人と地と靈となり、心と法とは滅ぶるも、既往は此に在り、比りに斉哲を明らかにす。仏日は照を環らし、牛車は轍を結ぶ。連率は風に順ひ、駟驪は欽烈たり。

道を訪ねて追勝せんとすれば、形は馳せ目は絶す。其の四。碑板建つる莫く、軌物は未だ弘からず。和合して是れ請ひ、佐貳は是れ膺く。政は大郡に敷かれ、信は広乗に発す。願くは言に述有らんとするも、以て訪ねんとするも能ふ無し。惟だ石のみ久しかる可く、山と与にも崩れず。其の五。

前の陳州刺史李邕、文並びに書。大唐開元十八年、歲次は庚午、九月壬子朔十一日壬戌建つ。江夏の黃仙鶴、刻す。

(米田健志)

唐台州國清寺湛然傳

〔釋文〕

唐台州國清寺湛然傳

釋湛然。俗姓戚氏。世居晉陵之荆溪。則常州人也。昔佛滅度後。十有三世至龍樹。始用文字廣第一義諦。嗣其學者號法性宗。元魏高齊間有釋慧文。默而識之。授南嶽思大師。由是有三觀之學。洎智者大師蔚然興於天台。而其道益大。以教言之則然乃龍樹之裔孫也。智者之五世孫也。左溪朗公之法子也。

家本儒墨。我獨有邁俗之志。童丱邈焉異於常倫。年二十餘受經於左溪。與之言大駭。異日謂然曰。汝何夢乎。然曰。疇昔夜夢披僧服掖二輪遊大河之中。左溪曰。嘻汝當以止觀二法度群生於生死淵乎。乃授以本師所傳止觀。然德宇凝精神鋒爽拔。其密識深行沖氣慧用。方寸之閉合於天倪。至是始以處士傳道。學者悅隨。如群流之趣於大川也。天寶初年解逢掖而登僧籍。遂往越州曇一律師法集。廣尋持犯開制之律範焉。復於吳郡開元寺敷行止觀。無何朗師捐代。挈密藏獨運於東南。謂門人曰。道之難行也我知之矣。古先至人。靜以觀其本。動以應乎物。二俱不住。乃蹈于大方。今

之人或蕩於空或膠於有。自病病他道用不振。將欲取正捨予誰歸。於是大啓上法旁羅萬行。盡攝諸相入於無聞。卽文字以達觀。導語默以還源。乃祖述所傳章句凡十數萬言。心度諸禪身不踰矩。三學俱熾群疑日潰。求珠問影之類。稍見罔象之功行。止觀之盛始然之力也。

天寶末。大曆初。詔書連徵。辭疾不就。當大兵大饑之際。揭厲流學徒愈繁。瞻望堂室以爲依怙。然慈以接之謹以守之。大布而衣一床而居。以身誨人者艾不息。建中三年二月五日示疾佛隴道場。顧語學徒曰。道無方性無體。生歟死歟其旨一貫。吾歸骨此山報盡今夕。要與汝輩談道而訣。夫一念無相謂之空。無法不備謂之假。不一不異謂之中。在凡爲三因。在聖爲三德。爇炷則初後同相。涉海則淺深異流。自利利人在此而已。爾其志之。言訖隱几泊然而化。春秋七十二。法臘三十四。門人號咽。奉全身起塔。附于智者大師塋兆西南隅焉。入室弟子吳門元浩。可謂邇其人近其室矣。

然平日輯纂教法。明決前疑開發後滯。則有法華釋籤法華疏記各十卷。止觀輔行傳弘訣十卷。法華三昧補助儀一卷。方等懺補闕儀二卷。畧維摩疏十卷。維摩疏記三卷。重治定涅槃疏十五卷。金錍論一卷。及止觀義例止觀大意止觀文句十妙不二門等。盛行于世。詳其然師始天寶終建中。以自證之心說未聞之法。經不云乎。云何於少時大作佛事。然師有焉。其朝達得其道者。唯梁肅學士。故摛鴻筆成絕妙之辭。彼題目云。嘗試論之。聖人不與其閒必有命世者出焉。自智者以法傳灌頂。頂再世至于左溪。明道若昧。待公而發乘此寶。乘煥然中興。蓋受業身通者三十有九僧。搢紳先生高位崇名。屈體承教者又數十人。師嚴道尊遐邇歸仁。向非命世而生則何以臻此。觀夫梁學士之論擬議偕齊。非此人何以動鴻儒。非此筆何以銘哲匠。蓋洞入門室見宗廟之富。故以是研論矣。吁吾徒往往有不知然之道。詩云。維鵠有巢維鳩居之。梁公深入佛之理窟之謂歟。有會稽法華山神邕作真讚。至大宋開寶中。吳越國王錢氏。追重而誅之。號圓通尊者焉。可不是歟。

〔校勘〕

1 「饑」|| 「餓」(宋本・元本)

2 「自」|| 「善」(宋本・元本)

3 「然」¹¹「如」(宋本・元本)

I

〔訓読〕

唐の台州国清寺湛然の伝

釈湛然。俗姓は戚氏。世に晋陵の荆溪に居す。則ち常州の人なり。昔仏の滅度の後、十有三世にして龍樹に至り、始めて文字を用いて第一義諦を広む。其の学を嗣ぐ者を法性宗と号す。元魏・高斉の間、釈慧文有りて、黙して之を識り、南嶽の思大師に授く。是れに由りて三観の学有り。智者大師蔚然として天台興るに洎んで、其の道益す大なり。教を以て之を言わば、則ち然は乃ち龍樹の裔孫にして、智者の五世の孫なり、左溪の朗公の法子なり。

〔語釈〕

【台州国清寺】 浙江省天台山の最大の寺院。「国清」の名は、『国清百録』第八十八「表国清啓」に説かれる、「昔陳世有定光禪師。德行難測。遷神已後。智者夢見其靈云。今欲造寺未是其時。若三国為一家。有大力勢人当為禪師起寺。寺若成国即清。必呼為国清寺。」(大正四六・八一六a)という靈瑞に基づいている。

【晋陵之荆溪】 現在の江蘇省常州市武進県。

【龍樹】 『摩訶止観』卷一上には、「付法藏因縁伝」を踏まえて、「(大智度)論是龍樹所説。付法藏中第十三師。」(大正四六・一b)と述べている箇所がある。

【法性宗】 真如法性と因縁に随って現象する諸法と相即してい

るとする立場を「法性宗」と言う。ここでは天台宗のことを意味する。ちなみに、無為の真如と有為の諸法とが、不一不異の関係にあつて相即しないとする立場を「法相宗」と言う。玄奘(六〇二〜六六四)がインドよりもたらした唯識思想はこれに当たる。

【元魏高斉間】 元魏(三八六〜五四九)、高斉(五五〇〜五七七)。北朝の五胡十六国の興亡を統一したのが魏(北魏)であり、魏がやがて、西魏と東魏とに分裂。高斉(北斉)は、東魏から興る。

【釈慧文】 生没年不詳。天台宗初祖とされる。『仏祖統紀』「釈慧

文伝」参照。

【南嶽思大師】慧思(五一四～五七七)、天台宗第二祖とされる。

『立誓願文』には中国における最初の末法の自覚が表明されている。『統高僧伝』卷十七「釈慧思伝」参照。

【三観之学】諸法が空であると観ずる空観、諸法が仮有であると観ずる仮観、諸法は空でもなく仮有でもなく、また諸法は空でもあり仮有でもあると観ずる中観、の三種の観法を言う。

【智者大師】天台大師智顛(五三八～五九七)、天台宗第三祖とされる。『天台智者大師別伝』『国清百録』『統高僧伝』卷十七など参照。

【左溪朗公】玄朗(六七三～七四五)、湛然の師、天台宗第八祖とされる。山林を好み、頭陀行を行じて、浙江省浦陽県の左溪山に隠棲していた。『宋高僧伝』卷二六参照。

【法子】法嗣。教えの継承者。

II

【訓読】

家は本儒墨にして、我独り俗を邁るの志有り。童卯にして邈かに常倫に異なれり。年二十余にして経を左溪より受く。之に言を与えて大いに駭けり。異日然に謂て曰く、「汝何をか夢みるや。」と。然曰く、「疇昔の夜夢に僧服を披て二輪を披み大河の中に遊ぶ。」と。左溪曰く、「嘻、汝は当に止・観の二法を以て群生を生死の淵より度すべし。」と。乃ち授くるに本師所伝の止・観を以てす。然は徳宇凝精にして神鋒爽拔なり。其の密識は深行にして沖氣の慧の用なり、方寸の間も天倪に合す。是に至りて始めて処士を以て道を伝う。学ぶ者の悦び随うこと、群流の大川に趣くが如し。

【語釈】

【儒墨】「儒」は仁義忠孝を説く儒家の学問、墨は兼愛交利を説く墨家の学問だが、儒墨と連称することで、世俗の学問全般を意味する。

【童卯】子どもを指す。卯は子どもの髪型、あげまき。

【邈焉】①はるかなさま。②無頓着なさま。

【年二十余受経於左溪】『仏祖統紀』・『九祖伝』・『釈門正統』では、いずれも左溪に従学する以前に、金華芳嚴和尚なる人物に従学していたことを伝えている。

【嘒昔】①昨日。「嘒」は発声で意味がない。『札記』檀弓「予嘒昔之夜」。②先日。むかし。『潘岳』文「嘒昔之遊、二紀於茲」。

【止観】「止」は samatha (奢摩他) の訳で、諸々の思いを止めて心を一つの対象に注ぐこと。「観」は vipaśyana (毘鉢舍那) の訳で、止によって正しい智慧を起こして対象を観ること。

【天倪】倪は、きわ(際)、かぎりの意。

【徳宇凝精】人徳がひろやかで、精神がひきしまっていること。

【神鋒爽拔】頭腦の明晰さが、爽快しく群を抜いていること。

【密識】底知れない見識。

【沖気】天地間の調和した根元の気。『老子』四十二章「沖気以爲和」。

【処士】官吏に仕えないで民間にある人物。隠士のこと。

III

【訓読】

天宝の初年逢掖を解き僧籍に登り、遂に越州の曇一律師の法集に往きて、広く持犯開制の律範を尋ぬ。復た呉郡の開元寺に於て止観を敷行す。何くか無くして、朗師代を捐つ。密蔵を挈えて独り東南に運らさんとするに、門人に謂て曰く、「道の行い難きや我れ之を知れり。古先の至人、静以て其の本を観、動以て物に应ず。二つ俱に住せざれば、乃ち大方を踏まん。今の人或は空に蕩い或は有に膠く。自ら病み他を病ましめ、道用て振わず。將に正を取らんと欲せば、予を捨てて誰にか帰せん。」と。是に於て大いに上法を啓き旁く万行を羅ね、尽く諸相を攝めて無間に入る。文字に即して以て観に達し、語黙を導いて以て源に還る。乃ち所伝の章句を祖述すること凡そ十數万言なり。心は諸れ禪に度り身は矩を踰えず。三学俱に熾んにして、群疑日に潰え、珠を求め影に問うの類、稍罔象の功行を見る。止観の盛は然の力を始めとするなり。

【語釈】

【天宝初年】 天宝年間は、七四二年〜七五六年の十四年間。『仏祖統紀』は、天宝七年(七四八年)としている(大正四九・一)

八八c)。

【逢掖】 儒者の着る衣服。掖は腋、袖の大きな衣。『礼記』儒行「丘少居魯、依逢掖」。

【曇一律師法集】 曇一の生没年は不詳。『宋高僧伝』卷十四「唐会稽開元寺曇一伝」には、門人として越州の常照、清源、湖州の神玩、宣州の道昂、抗州の義賓、台州の湛然、蘇州の弁秀、潤州の昭亮、常州の法俊の名を挙げている(大正五〇・七九九a)。

【吳郡】 現在の江蘇省蘇州市吳県を指す。また、江蘇省の滬海道・蘇常道・金陵道西部の地を指している場合もある。

【敷行】 『釈門正統』には、「敷演」としている。「行」の字は、「衍」の誤りか。

【朗師捐代】 左溪玄朗は、七五四(天宝十三)年九月に入寂する。

【密藏】 奥深い教藏。具体的には不明。

【独運於東南】 『九祖伝』の記述から至徳年間(七五六〜七五七)のことと考えられる。その場合、単に師の玄朗を亡くしただけでなく、安祿山の動乱を避けて東南に行つたと考えられる。また、湛然が東南に至つたのは、故郷の晋陵に帰って、主著であ

る『法華玄義釈籤』を整理記述するためであつたと考えられる。【至人】 十分に道を修めた人。『莊子』逍遙遊篇「至人無己、神人无功、聖人無名」。

【無間】 無間道のこと。まさしく煩惱を断つて悟りを引き起こそうとする段階。これに対し、煩惱から解脱しまさしく悟りを証して真理を現前させるのを解脱道という。

【三学】 戒・定・慧の三学を指す。

【罔象之功行】 罔象は、①ただようさま、②虚無で形の無いこと、③水中の怪物の名、の三つの意味がある。『莊子』天地篇に、黄帝が失つた玄珠を罔象が見つける話がある。また斉物篇に罔象と影との先後主客関係を問う話がある。『莊子』内篇・斉物篇第二「罔両問景曰。曩子行。今子止。曩子座。今子起。何其無特操与。景曰。吾有待而然者耶。吾所待又有待而然者耶。吾待蛇蚶蜺翼邪。惡識所以然。惡識所以不然。」『莊子』外篇・天地篇第十二「黄帝遊赤水之北。登乎崑崙之丘而南望。還歸。遺其玄珠。使知索之而不得。使離朱索之而不得。使喫詬索之而不得也。乃使象罔。象罔得之。黄帝曰。異哉。象罔乃可以得之乎。」

IV

〔訓読〕

天宝の末・大暦の初に、詔書連りに徴さるるも、疾と辞して就かず。大兵・大饑の際に当りて、法流を掲厲し学徒愈す繁り、堂室を瞻望して以て依怙と為す。然は慈以て之に接し謹以て之を守る。大布を衣い一床に居す。身を以て人を誨え者艾まで息めず。建中三年二月五日疾を仏隴の道場に示す。顧みて学徒に語りて曰く、「道に方無く性に体無し。生か死か其の旨は一貫せり。吾れ骨を此の山に帰し報は今夕に尽きん。汝ら輩と道を談じて訣れんことを要む。夫れ一念に相無きを之れ空と謂う。法として備わらざる無きを之れ仮と謂う。一にもあらず異にもあらざるを之れ中と謂う。凡に在りては三因と為す。聖に在りては三徳と為す。炷を爇せば則ち初後相同なるも、海を渉らば則ち浅深流を異にす。自ら利し人を利するは此に在る已。爾ら其れ之を志せ。」と。言い訖りて凡に隠りて泊然として化す。春秋七十二、法臘三十四なり。門人号咽して、全身を奉じて塔を起て、智者大師の瑩兆の西南の隅に附す。入室の弟子呉門の元浩は、其の人に迹く其の室に近しと謂うべし。

〔語釈〕

【大暦】 大暦年間は、七六六年～七七九年の十三年間。

【詔書】 ここでは、天宝十四年（七五五年）及び大暦元年（七六

六年）の二回と伝えられる（『釈門正統』も同様の記述）が、『仏祖統紀』では三回としている。すなわち、玄宗・肅宗・代宗の三帝からである。ただし、これらの年号は記されていない（大正四九・一八九a）。

【大兵大饑之際】 安祿山の乱（七五五年～七六三年）を指す。

【瞻望】 ①はるかに仰ぎ見る。瞻仰。②仰ぎ慕う。瞻慕。

【依怙】 頼りとするもの。普通には父母を指す。

【大布】 粗末な布。きめの粗い布。

【者艾】 者は六〇歳、艾は五〇歳を指し、老年期を意味する。

【建中三年】 七八二年に、湛然は七十二歳で示寂する。

【仏隴】 天台山中の、仏隴山を指す。

【隠几】 机にもたれかかること。

【泊然】 ①春と秋。②年月。③年齢。④書名、経書の一。ここでは③の意味。

【法臘】 出家してからの年数。

【全身】 遺体のこと。

【塋兆】 墓所、墓地の意味。塋は墓、兆は区域を指す。

【吳門元浩】 元浩（？～八一七）、湛然より天台学を学び、蘇州開元寺に住した。『涅槃経』の注釈を書いたと伝えられるが現存しない。『宋高僧伝』巻六参照。

【附】 先祖の墓に合わせ葬ること。

V

〔訓読〕

然は平日教法を輯纂して、前疑を明決し後滞を開発す。則ち『法華釈籤』・『法華疏記』各十卷、『止観輔行伝弘訣』十卷、『法華三昧補助儀』一卷、『方等懺補闕儀』二卷、『略維摩疏』十卷、『重治定涅槃疏』十五卷、『金錡論』一卷、及び『止観義例』・『止観大意』・『止観文句』・『十妙不二門』等有り。盛んに世に行わる。詳らかに其れ然師は天宝より始まり建中に終るまで、自証の心を以て未聞の法を説けり。經に云わざるや、「云何ぞ少時に於て大いに仏事を作さん」と。然師には焉有り。其の朝達の其の道を得たる者は、唯梁肅学士のみなり。故に鴻筆を擲り絶妙の辞を成す。彼の題目に云く、「嘗試みに之を論ずるに、聖人其の間に興らずんば必ず命世の者出する有り。智者法を以て灌頂を伝えて自り、頂より再世して左溪に至り、明道味きが若し。公を待ちて発すに此の宝乘に乗り、煥然として中興す。蓋し業を受け身に通ずる者三十有九僧なり。搢紳先生高位崇名にして、体を屈し教えを承くる者又數十人なり。師は嚴にして道尊く遐迹仁に帰す。向に命世の生まるるに非ずんば則ち何を以てか此に臻らん」と。夫の梁学士の論を觀るに擬議偕に斉し。此の人に非ずんば何を以てか鴻儒を動かさん。此の筆に非ずんば何を以てか哲匠に銘せん。蓋し洞く門室に入り宗廟の富を見る。故に是を以て研論す。吁吾が徒往往にして不然の道を知らざる有り。詩に云う、「維れ鵲に巢

有りて維れ鳩は之に居す。」と。梁公深く仏の理窟に入るの謂なるか。会稽法華山の神邕有りて真讚を作す。大宋の開宝中に至りて、吳越国の王錢氏、追重して之に誄し、円通尊者と号す。是ならざる可けんや。

【語釈】

【輯纂】資料を揃えて編集すること。

【法華釈義】湛然の著作は、基本的に天台智顛の著述の註解に徹している。以下に本文に挙げられた著作の概略を述べる。

- ・『法華釈義』十巻：詳しくは『法華文義釈義』、大正三三・No. 一七一七、智顛『法華文義』の註解。

- ・『法華疏記』十巻：詳しくは『法華文句記』、大正三四・No. 七一九、智顛『法華文句』の註解。

- ・『止観輔行伝弘訣』十巻：大正四六・No. 一九一二、智顛『摩訶止観』の註解。法相や華嚴の教学に対する批判を含む。七五五（大宝一四）年に成立。

- ・『法華三昧補助儀』一巻：詳しくは『法華三昧行事運想補助儀』、大正四六・No. 一九四二、智顛『法華三昧儀』の註解。

- ・『方等懺補闕儀』二巻：現存せず。『東域伝灯目録』巻下、及び『諸宗章疏録』に見える。ただし一巻となっている。
- ・『略維摩疏』十巻：普通には『維摩経略疏』という。大正三八・No. 一七七八、智顛述『維摩経文疏』二八巻を簡略編集したもの。

- ・『維摩疏記』三巻：或いは六巻。己統十八、智顛『維摩経文

疏』の註解。

- ・『重治定涅槃疏』十五巻：大正三八・No. 一七六七、灌頂『大般涅槃経疏』三三巻を湛然が再治したもの。

- ・『金剛論』一巻：詳しくは『金剛鉅論』、大正四六・No. 一九三二、「金剛鉅」とは『涅槃経』如来性起品の譬喩に拠ったもの。非情有仏性説が唱えられた書として知られている。

- ・『止観義例』二巻：大正四六・No. 一九一三、天台止観の解釈法。

- ・『止観大意』一巻：大正四六・No. 一九一四、智顛『摩訶止観』の註解。

- ・『止観文句』二巻：現存せず。『東域伝灯目録』巻下に見える。
- ・『十妙不二門』一巻：大正四六・No. 一九二七、『法華文義釈義』の一部を別に詳しく述べたもの。

【云何於少時大作仏事】『法華経』「從地涌出品」の偈頌に「云何於少時、教化令発心、而住不退地」（大正九・四二a）とある。

【梁肅学士】七五一〜七九三、儒教に精通し、皇太子の侍説であった。また、湛然について、天台の教観を学んだ。（『唐書』巻二〇二「蘇源明伝」、『居士伝』卷一三、「仏祖統紀」卷一〇参照。）

『仏祖統紀』卷四九「名文光教志」に梁肅撰として「天台禪林寺碑」、「天台止観統例」、「智者大師伝論」を収めている。

【鴻筆】 広大で優れた文章。鴻とは体長の最も大きい雁を指す。

【命世】 一世に名高いこと。

【焕然】 光輝くさま、りっぱなさま。

【受業身通者三十有九僧】 湛然は、大暦三年以降に、江淮の名僧四十人と共に五台山に往詣したという記録がある。(『仏祖統紀』、『釈門正統』を参照)。「三十九僧」とは、この時の名僧たちを指すと思われる。ちなみに、華嚴宗の澄観(七三八〜八三九)伝には、七七五年(大暦一〇年)に、湛然より止観・法華・維摩の疏を習ったという記述(『宋高僧伝』卷五澄観伝(大正五〇・七三七a)、『仏祖統紀』卷二九澄観伝(大正四九・二九三b))があり、更に七七六年(大暦一一年)には五台山に往詣したという記述があるので、澄観がこの三十九僧の一人であると考えられる。

【摺紳】 笏を大帯にさしはさむこと。転じて、士大夫などの高貴の人を指す。

【先生】 学問や技芸に長じている人の敬称。

【遐迹】 遐は遠い、迹は近い。遠くにいる者も近くににいる者も、

といった意味。

【擬議】 擬は比べる、なぞらえること、議は批評すること、といった意味であるが、ここでの文脈では適応していない。従って意味は未詳。

【鴻儒】 大学者。『論衡』「能精思著文、連結篇章者、為鴻儒。」

【哲匠】 賢明で才能ある人。

【洞入門室見宗廟之富】 『論語』子張篇の「夫子之牆數仞、不得其門而入、不見宗廟之美百官之富、得其門者或寡矣。」という文を踏まえている。

【維鵠有巢維鳩居之】 『詩経』召南「鵠巢」。鳩は自分で巢を作らず鵠の作った巢に住む、という事実を踏まえ、①女性が嫁いで夫の家に住む、②他人の地位を横取りする、の二つの意味がある。ここでは梁肅が湛然の教えに深く研鑽することを意味し、湛然の教えそのものを体得するに至ったことを喩える。

【会稽】 現在の浙江省紹興市。

【神邕】 玄朗の弟子(『宋高僧伝』卷一七参照)。

【大宋開宝】 開宝年間は、九六八年〜九七六年の八年間。

【詠】 死者の生前の行いを繰り返し讃え、その死を悼む文章を記すこと。

(坂井祐円)